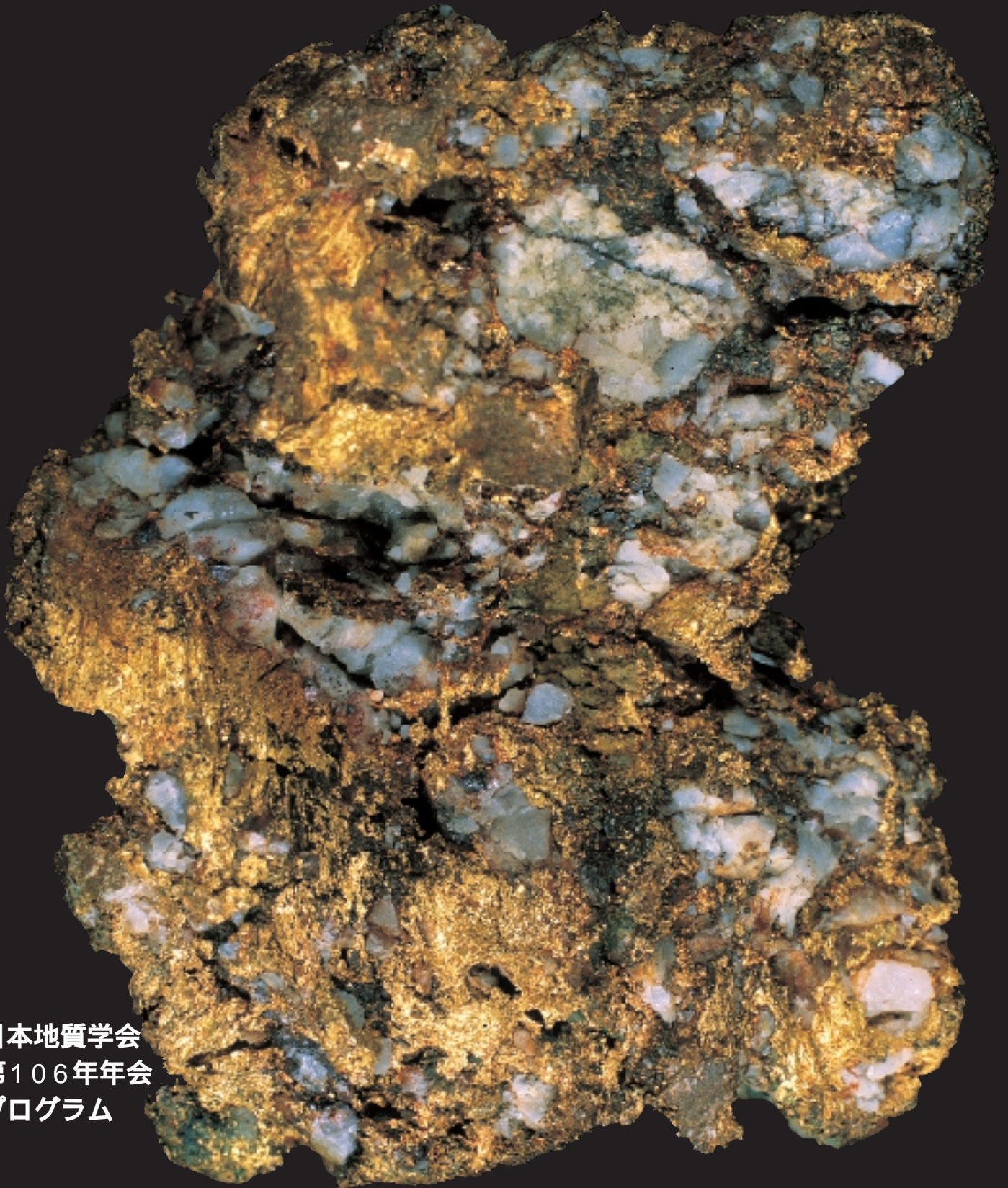


日本地質学会 *News*

Vol.2 No.8 August 1999



日本地質学会
第106年年会
プログラム

幻想の崩壊 アメリカの水資源開発

マーク・ライスナー[著] 片岡夏実[訳] ●新刊 6,000円
『沈黙の春』以来、もっとも重要な作品」と評され、アメリカの公共事業を根本から変えた衝撃のルポ。アメリカの公共事業の100年におよんだ構造的問題を暴き、全米でセンセーショナルをまきおこしたレポート。

流域一貫 森と川と人のつながりを求めて

中村太士[著] ●新刊 2,400円
21世紀に求められる、流域管理、流砂系管理、集水域管理、景域管理の指針を示す書。先進事例・調査事例を紹介しながら、分断された河川流域管理をつなぎ直すための、総合的な土地利用のあり方を提言する。

アメリカはなぜダム開発をやめたのか

公共事業チェック機構を実現する議員の会[編] ●4刷 1,500円
アメリカの河川開発機関を徹底視察した国会議員らが、日本の公共事業政策の抜本的な改革を提言する画期的レポート。

沈黙の川 ダムと人権・環境問題

パトリック・マッカーリー[著] 鷺見一夫[訳] 4,800円
大規模ダム建設から集水域管理の時代へ。フィールド調査と膨大な資料からまとめた。曲がり角にある日本の河川行政に一石を投じる大著。

「フィールドガイド日本の火山」最新刊

④ 東北の火山 高橋正樹+小林哲夫[編] 2,000円

【目次】十和田湖(巨大噴火のエネルギーを秘めた伝説のカルデラ湖)／岩手山(マagmaうごめく東北の名峰—成長と崩壊をくりかえす成層火山)／秋田駒ヶ岳(本州でもっとも新しい昭和の溶岩流をたずねて)／鳥海山(日本海側唯一の巨大活火山をめぐって)／蔵王山(美しい火口湖に秘められた火山の素顔をさぐる)／吾妻山(雄大な爆裂カルデラと中央火口丘を歩く)／安達太良山(ほんとうの空の下で火山トレッキング)／磐梯山(村々を埋めつくした100年前の山体大崩壊)／那須岳(室町時代に噴出した溶岩ドームをめぐって)／ほか

「フィールドガイド日本の火山」既刊書4点 各2,000円
代表的な火山の成り立ちや地質、地形を実際に見て歩く、日本初の本格的な火山ガイド。 【宇井忠英氏(日本火山学会会長)推薦】

① 関東・甲信越の火山 [I]

【主要目次】日光男体山／日光白根山／赤城山／浅間山／妙高山／ほか

② 関東・甲信越の火山 [II]

【主要目次】新潟焼山／北八ヶ岳／富士山／箱根／伊豆大島／新島／ほか

③ 北海道の火山

【主要目次】十勝岳／雌阿寒岳／恵庭岳／有珠山／北海道駒ヶ岳／ほか

⑤ 九州の火山

【主要目次】由布・鶴見岳／九重山／阿蘇山／雲仙岳／霧島山／桜島／他

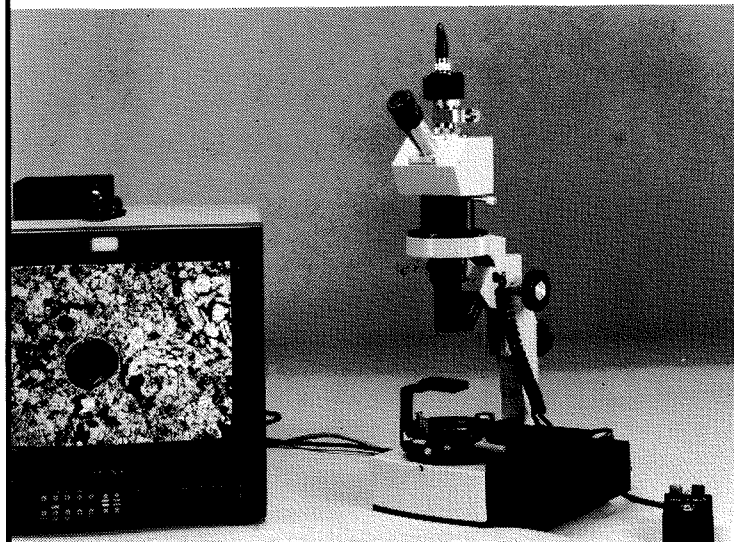
① 築地書館 〒104-0045 東京都中央区築地7-4-4-201 TEL 03-3542-3731 FAX 03-3541-5799 ●総合図書目録進呈いたします。
●ご注文は、最寄りの書店または直接上記宛先へ。(送料400円) ホームページ=<http://www.tsukiji-shokan.co.jp/>

(価格別) 消費税が加算されます

鮮明な映像・ポラビジョンビデオシステム

特長

- テレビで偏光顕微鏡観察が大勢で一度に見られます。
- リモコンによりステージの回転及びオープン・クロスポーラーの観察がスイッチ1つで行えます。
- 高性能CCDカラーカメラにより高画質で色彩はあざやかです。
- ズーム式で(30倍～200倍)変倍が容易です。
- ビデオプリンターと接続して、その場で写真が撮れます。
- パソコンと接続して画像解析・計測ができます。(画像解析用ソフト別売)



(14インチ・モニター画面) 隕石・コンドライト(L5)

..... 営業品目

- 岩石薄片の受託加工
EPMA用研磨薄片・研磨片・軟弱粘土岩・ブルーレジンを圧入薄片・難資料歓迎します。
- オートマチックポイントカウンター
- 偏光投影機(ポラビジョン)
- 偏光実体顕微鏡(ポラステレオ)
- 簡易偏光顕微鏡(ポラスター)
- 教育用岩石薄片
- 隕石標本 各種

製造・販売

★ 有限会社 **北辰光器製作所**

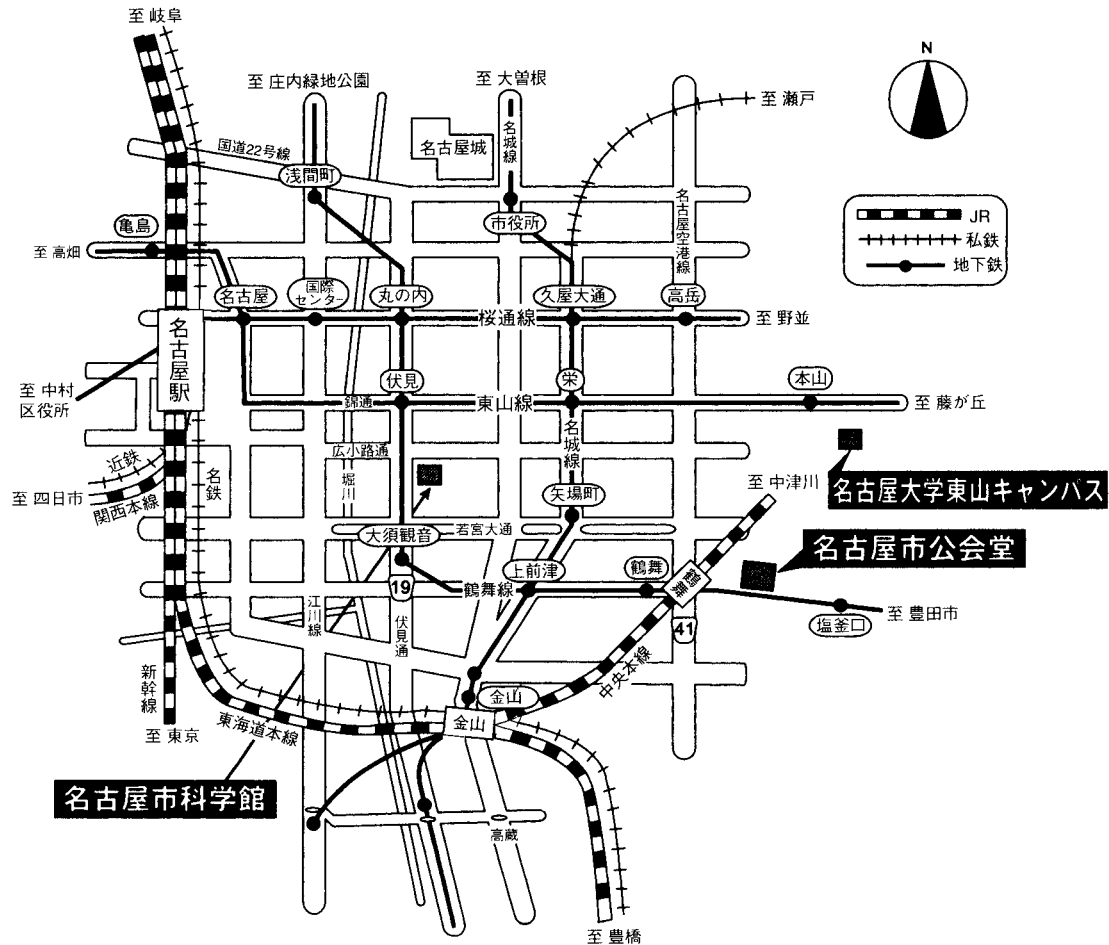
本社・工場 〒168-0082 東京都杉並区久我山3-29-27
電話・ファックス 03(3334)7959

日本地質学会第106年年会プログラム

期 日 1999年10月9日(土) 11日(月)

会 場 9日:名古屋市公会堂・名古屋市科学館

10日・11日:名古屋大学東山キャンパス共通教育棟本館, A館・第一体育館・名古屋市科学館



会場への公共交通機関のご案内

<名古屋大学東山キャンパス>

・名古屋駅(新幹線・在来線・名鉄・近鉄)から:

地下鉄東山線「藤ヶ丘」行き乗車(約15分) 本山駅下車(3番出口へ) 四谷通りを南へ徒歩約15分, または市バス八事11系統「平針住宅・島田住宅」行きで約5分 名古屋大学前下車.

・名古屋空港から:

名鉄バス「名鉄バスセンター」行きに乗車(約45分) バスセンター下車, 名古屋駅にて地下鉄東山線「藤ヶ丘」行きにのりかえ. 以下, 名古屋駅からの場合と同じ.

・栄から:

1) バスターミナルにて市バス栄17系統「名古屋大学前」行きに乗車(約30分) 名古屋大学前下車

2) 地下鉄栄駅にて東山線「藤ヶ丘」行き乗車. 以下, 名古屋駅からの場合と同じ.

*名古屋大学前のバス停から, 栄方面は「栄」行き, 本山方面は「光ヶ丘」・「猪高車庫」行きに乗車.

<名古屋市公会堂>

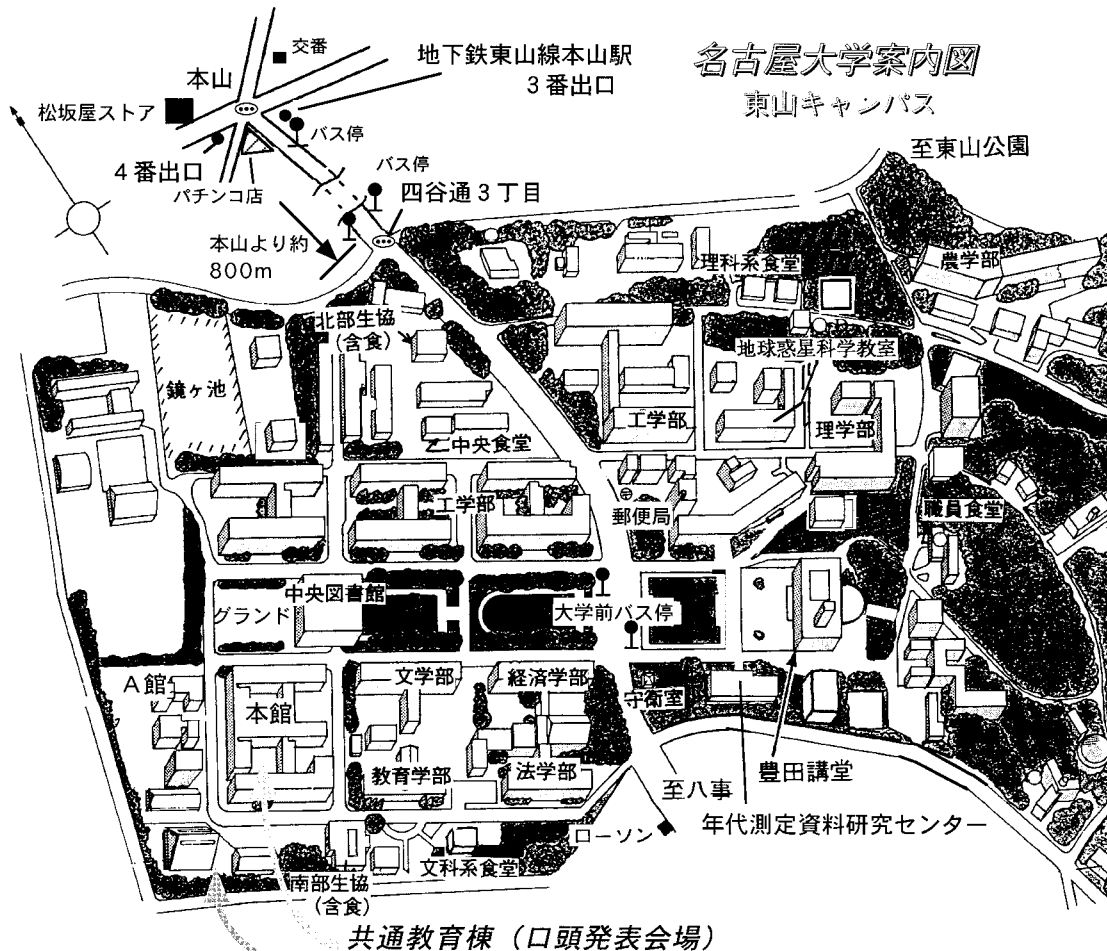
・名古屋駅(新幹線・名鉄・近鉄)から:

1) JR中央線「高蔵寺・中津川」方面行きにのりかえ JR鶴舞駅下車で徒歩約3分.

2) 地下鉄東山線「藤ヶ丘」行きにのりかえ 伏見駅にて地下鉄鶴舞線「赤池・豊田市」方面行きにのりかえ 鶴舞駅下車で徒歩3分.

<名古屋市科学館>

・地下鉄東山線伏見駅下車, 南へ徒歩約5分.

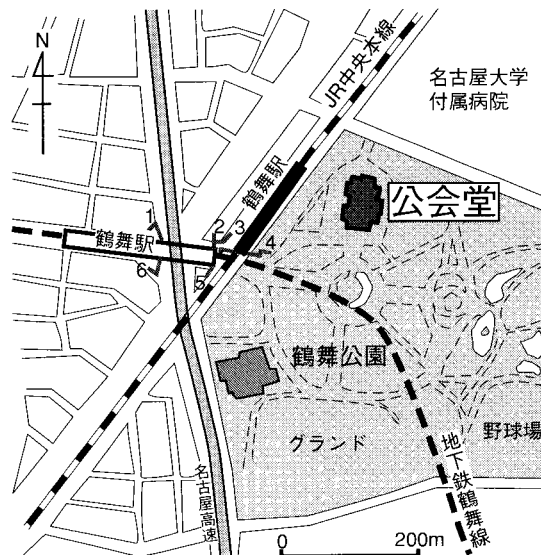


体育館 (ポスター会場, 企業等団体展示, 書籍・地図・機器展示)

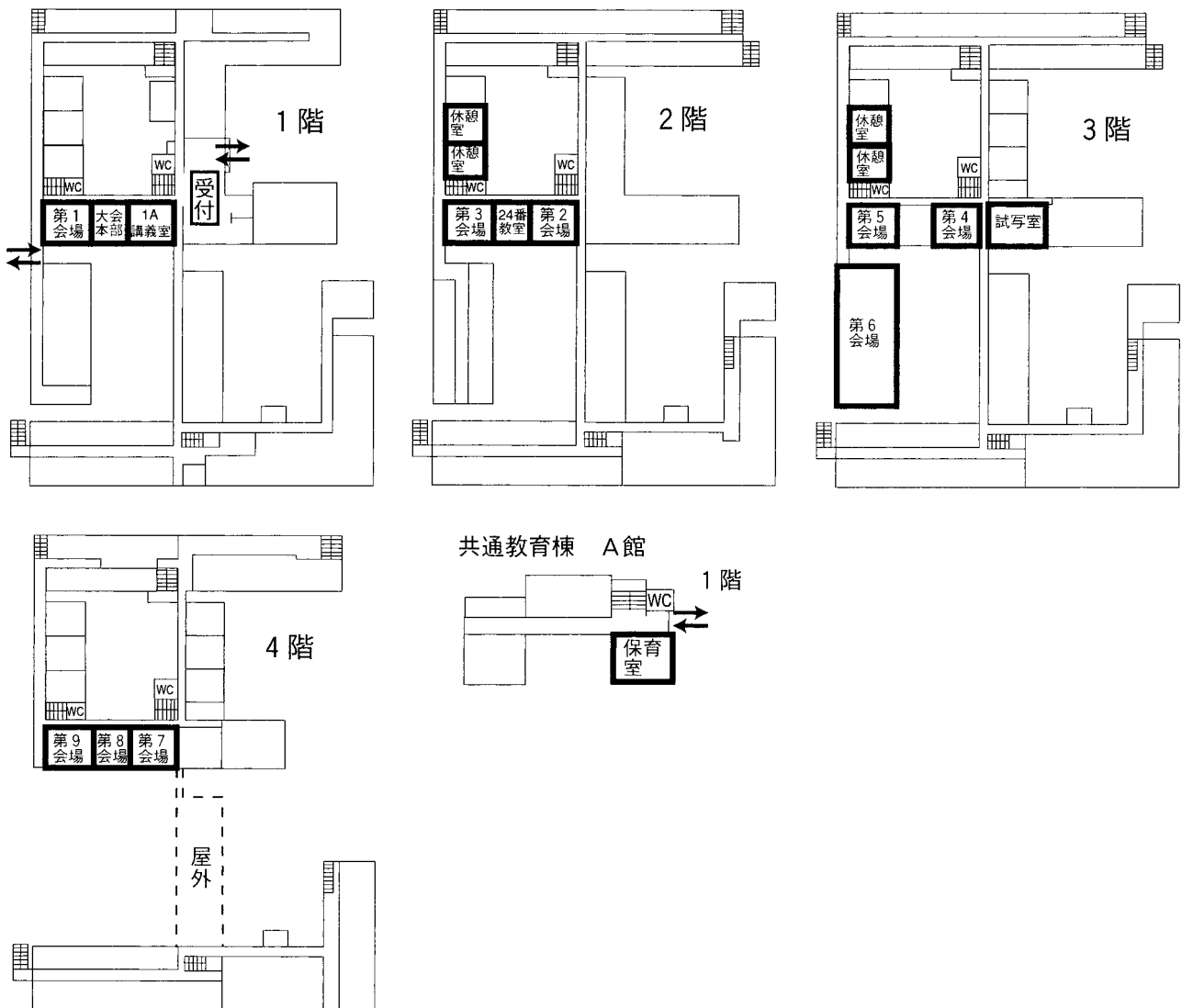
*名大前バス停から郵便局周辺は現在地下鉄工事のため煩雑になっております。

名古屋市公会堂 (9日)

受付	1階ロビー	(1F)
シンポジウム	大ホール	(1F)
懇親会	4階ホール	(4F)
市民講演会	大ホール	(1F)
休憩室	第1集会室	(2F)
保育室	第1楽屋	(1F)
大会本部	主催者控室	(1F)



共通教育棟 本館



名古屋大学会場 (10・11日)

受付	共通教育棟本館	玄関ホール (1F)	第9会場	共通教育棟本館	4C講義室 (4F)
第1会場	"	1B講義室 (1F)	試写室 (スライド受付)"	"	35番教室 (3F)
第2会場	"	2A講義室 (2F)	ポスター会場	第一体育館	
第3会場	"	2B講義室 (2F)	書籍販売	"	
第4会場	"	3A講義室 (3F)	機器展示	"	
第5会場	"	3B講義室 (3F)	企業展示	"	
第6会場	"	3C講義室 (3F)	休憩室	共通教育棟本館 22, 23, 32, 33番教室	(2F, 3F)
第7会場	"	4A講義室 (4F)	保育室	共通教育棟A館 17番教室	(1F)
第8会場	"	4B講義室 (4F)	大会本部 (学会本部)	共通教育棟本館 14番教室	(1F)

懇親会

10月9日(土) 18:00 20:00 会場 名古屋市公会堂4階ホール

原則的には予約参加です。予約参加費は正会員6,000円、院生、学生会員は4,000円です。5月号ニュース誌に申込書等がとじ込んであります。お申し込みは9月17日、参加費のご送金は9月24日が切ですので至急お手続きください。たくさんのご参加をお待ちしています。

日 程 表

	10月10日				10月11日							
	9:00	午前	11:00	14:00	午後	17:00	9:00	午前	11:00	14:00	午後	17:00
第1会場	1.地域地質・地域層序						30.中部・近畿					
第2会場	2.年代層序			3.層序対比			6.新生代		7.中古		8.脊椎動物	
第3会場	24.石油			26.地学教育			16.火山岩			15.火山噴火		
第4会場	12.岩石変形						14.付加体					
第5会場	9.変成作用			29.北海道			19.活構造			13.テクトニクス		
第6会場	10.深成岩						34.大陸衝突			11.マントル		
第7会場	4.海域地質			5.海洋環境			28.プルーム			33.地下生物圏		
第8会場	27.テクト堆積			17.水文地質			31.地質汚染			18.地震地質		
第9会場	20.碎屑物			21.炭酸塩岩			22.堆積作用			23.堆積相		
ポスター会場	1.地域地質・地域層序, 2.年代層序, 3.層序対比, 4.海域地質, 5.海洋環境, 9.変成作用, 10.深成岩, 12.岩石変形, 17.水文地質, 20.碎屑物, 21.炭酸塩岩, 24.石油地質, 25.地学教育, 29.北海道,						6.新生代, 7.中生代, 8.脊椎動物, 11.マントル, 13.テクトニクス, 14.付加体, 15.火山噴火, 16.火山岩, 18.地震地質, 19.活構造, 22.堆積作用, 23.堆積相, 25.情報地質, 28.プルーム, 30.中部・近畿, 31.地質汚染, 32.古環境, 34.大陸衝突					

発 表 者 へ

一般発表の発表者は招待講演を除いて本学会の会員に限ります(共同発表の場合は筆頭者に適用)。また、止むを得ぬ事情により、予め連記された共同発表者内で筆頭者の変更を希望する場合は、必ず事前に行事委員会(会期前は学会本部へ、会期中は年会本部事務局へ)に連絡して下さい。この場合も「会員に限り1人1題」の発表制限は守るものといたします。代理人による代読、発表会場内での突然の発表者変更、発表順序の変更は一切認めませんのでご注意下さい。とくに口頭発表者の方には発表時間の厳守をお願いいたします。発表に際しては座長の指示に従い、会場の運営がスムーズに行われますようご協力下さい。

口頭発表

1題15分(討論時間を含む)

OHPおよびスライド使用。スライドは15枚以内。

スライドの受付は全て試写室(3F, 35番教室)で行います。

スライドカセロールに各自でセットし、講演開始30分前まで(9時から講演する方は前日、または当日の遅くとも15分前まで)に提出してください。終了後は、試写室で返却します。

ポスターセッション

*掲示する際の画紙、テープ等の用意はありません。必要なものは各自でご用意くださるよう、ご協力をお願いします。

展示時間は、9:00-16:00です。

展示の準備および撤収はこの時間内に確実に行って下さい。

コアタイム

指定された時間内は、発表者は必ずその場に立ち会い、その他の時間は各自の都合によって随時行って下さい。

発表番号が奇数の場合 11:00~12:00

発表番号が偶数の場合 13:00~14:00

ボード面積は210cm×180cm(タテ×ヨコ)です。

発表番号・発表題名・発表者名をポスタータイトルとして、必ず明記して下さい。

シンポジウムの発表者へ

プログラム上では概ねの時間を示してあります。詳細は各世話人の指示に従ってご準備下さい。

事前参加登録のお願い

*まだ間にあります。ぜひ事前登録をしてください。

今回から事前参加登録制とし、登録費は全参加者から、事前にいただくことになりました。送金の締め切りは9月24日です。ニュース誌5月号にとじ込みの振替用紙で至急手続きをお願いいたします。事前登録者には、「入金確認証」(兼参加登録票)を9月末頃に届くようお送りします。当日は、この「入金確認証」によって受付を行いますので、お忘れなくご持参ください。

当日の参加登録受付のしかた

*事前参加登録をして、「入金確認証」をご持参の方
「入金確認証」に記載されている項目順に受付し、終了した時点で「入金確認証」(兼参加登録票)を回収させていただきます。

1. 参加登録(全員) ネームカードの配布
2. 講演要旨(予約購入者のみ) 演旨の配布
3. 懇親会(参加者のみ) 名簿確認と参加証の配布
4. 見学旅行(参加者のみ) 名簿確認と参加最終確認

*事前登録をしていない方

当日参加者として備え付けの「参加登録票」に必要事項を記入し、参加登録をおこなってください。

1. 参加登録費
正会員：5,000円
名誉会員・院生および学生会員(非会員院生・学生会)：2,000円
非会員(一般)：7,000円
2. 講演要旨当日販売
会 員：3,500円
非会員：4,500円
3. 懇親会当日参加費(ただし、人数に余裕がある場合に限る)
正会員・非会員(一般)：7,000円
名誉会員・院生および学生会員(家族および非会員院生・学生会)：5,000円

専門部会ランチョン

10日(日)・11日(月) 12:00 13:00

*部会入会を希望される方、興味をお持ちの方もご出席ください。

10日(日)

地域地質部会(第1会場)、層序部会(第2会場)、構造地質部会(第4会場)、岩石部会(第5会場)、現行過程部会(第8会場)

11日(月)

情報地質部会(第1会場)、古生物部会(第2会場)、火山部会(第3会場)、応用地質部会(第8会場)、堆積部会(第9会場)

夜間小集会

名称：世話人<会場、時間>集会の概要、の順で簡単に紹介します。また、当日都合により急遽会場の変更がある場合もありますので、掲示にご注意ください。

10日(日)

1. 地質年代小委員会：兼岡一郎 <24番教室, 18:00~20:00>
学術会議地質年代小委員会としての集まり。報告・打ち合わせ等
2. 国際レルソライトワークショップ：小畑正明 <第2会場, 18:00~20:00> 第3回会議(イタリア, パピア)の報告と、第4回(2003年)日本開催実現をめざして、国内の準備体制を整える。
3. 地震発生帯の深海掘削計画：芦寿一郎 <1A講義室, 18:00~20:00> 地震発生帯に関して、OD21の掘削計画および陸上の付加体研究の双方より意見交換を行う。
4. 保育室懇談会：清水以知子 <A館17番教室, 17:00~18:30> 学会保育室の利用者の声を聞き、今後について話し合う。
5. 女性地球科学者の未来：田崎和江 <A館17番教室, 18:30~20:00> 毎年行っている巡検について計画を話し合う。女性科学者の現状(就職など)についての情報交換を行う。
6. 地質学史懇話会：諏訪兼位ほか <第4会場, 18:00~20:00>
講演会：糸魚川淳二「図、図版に見られる明治期の災害」、白木敬一「サヌカイトとボニナイトの発見」、香掛俊夫「ヴェルナーシンボジウムの報告」
7. 南極地質夜間小集会：本吉洋一 <第1会場, 18:00~20:00>
第40次の調査報告、第8回南極地学国際シンポ(ウエリントン)報告、および今後の調査・研究計画について。
8. 地質系博物館協議会：松岡敬二ほか <第3会場, 18:00~20:00> 博物館を取り巻く問題の中から各学会員に関連する話題を提供し、意見交換を行う。
9. 構造地質研究会夜間小集会：高木秀雄ほか <第7会場, 18:00~20:00> 特別講演：Dr. J. F. Hippertt "Microstructural processes in shear zone: examples from Precambrian rocks in South America."
10. IGCP 434 白亜紀の炭素循環と生物多様性の変動：平野弘道 <第5会場, 18:00~20:00> IGCP 434 発足にあたり、研究課題の認識の深化、5カ年間の国際共同研究の進め方、第1回国際シンポの打ち合わせなどを行う。
11. 都市地質連絡協議会・環境地質研究委員会・環境地質部会(合同)：石渡康尊 <第8会場, 18:00~20:00> 講演および事務連絡。
12. 炭酸塩堆積学に関する懇話会：松田博實ほか <第6会場, 18:00~20:00> 炭酸塩堆積学に関する最近の話題・トピックスについて討論するとともに、最新の研究動向・情報についての意見交換を行う。
13. 若手研究者懇親会：真砂英樹ほか <第9会場, 18:00~20:00> 若手研究者相互の親睦を深め、お互いの研究内容や抱えている問題についての情報交換を行う。特に、学位取得後の就職状況について時間を割いて議論する。

11日(月)

14. OD21と固体地球科学関連の国内研究体制：平朝彦ほか <第6会場, 18:00~20:00> OD21を含め、国内の固体地球科学の研究体制の変革期に際して、「地質学」はどのようにこれに参画していくか 現状報告とフリーディスカッション

15. 地表付近で形成される地質構造：永田秀尚 <第1会場，18：00～20：00> 斜面変動・応力解放などによって形成される非テクトニクスな地質構造に着目し，今後の研究方向や応用地質的な課題との関連について議論する。
16. ヒマラヤ地質研究会：在田一則ほか <第2会場，18：00～20：00> Himalayan geology に関する情報交換および各研究プロジェクトの紹介など。
17. 淡水動物相の歴史：友田淑郎 <第3会場，18：00～20：00> ユーラシアにおけるコイ科魚類の出現と発達についての研究集会。
18. 南半球の新生代古海洋学：本山 功ほか <第4会場，18：00～20：00> Leg175 (1997.10) 以降のODP乗船国内研究者を中心として，南半球における最新の古海洋研究のプロジェクトの紹介と情報交換を行う。

企業等団体展示

10日(日)・11日(月) 9:00～16:00 企業展示会場
帝国石油株式会社 探鉱部
有限会社 アクトオン

シンポジウム

9日(土) 13:00～17:00 名古屋市公会堂

13:00-15:00

A. 廃棄処分と地質学の役割 放射性廃棄物の地層処分を例として

世話人：小松正幸(愛媛大)・金折裕司(山口大)・湯佐泰久(サイクル機構東濃地科学センター)

<趣旨> 環境問題のひとつに『廃棄物処分問題』があり，その例として，高レベル放射性廃棄物の処分問題がある。地層処分は現段階で有力な解決方法のひとつと見なされており，これは廃棄物を人間の生活圏から遠く離れた深部の地質環境に，長期にわたって隔離する方法であり，その安全性を確保するための研究が多くの国で実施されている。今，地質学はこの『地層処分問題』に何をすべきか問われている。具体的に『我々はなにができるか，どのような貢献策が有るのか』について関係各位の真摯な議論を期待したい。

1. 挨拶，本シンポジウムの趣旨(13:00～13:05)
.....小松正幸(愛媛大)
2. 自然から学ぶ廃棄処分の智慧 地質学は何ができるか(13:05-13:25)
.....湯佐泰久(サイクル機構東濃地科学センター)
3. 廃棄物処分と新しい地質技術 地下地質の不確実性はどのように対応するか(13:25-13:45).....渡辺邦夫(埼玉大)
4. Meeting the challenge of deep geological waste disposal: some lessons from research into radioactive waste disposal in the U.K. (13:45-14:15)
.....Richard Metcalfe(英国地質調査所)
5. コメント(14:15-14:20).....鹿園直建(慶應大)
6. 総合討論(14:20-14:50)

15:00-17:00

B. コリア半島の基盤地質と東アジアの古生代テクトニクス

世話人：足立 守(名古屋大)・石渡 明(金沢大)

<趣旨> 日本列島を含む東アジアの古生代・中生代のテクトニクスをきちんと論ずるにはコリア半島の基盤地質の理解が不可欠である。しかし，この地域の基盤岩の年代や地質構造などの基本的な情報が不十分なまま，地質構造発達史や中朝地塊・揚子地塊の衝突帯の東方延長などが論じられてきた。このシンポジウムでは，コリア半島の基盤地質の最新の研究結果を交えて，この問題を討議し，今後の研究課題を提示する。

1. シンポジウムの目的と意義(15:00-15:20)
.....足立 守(名古屋大)
2. Basement geology of the Korean Peninsula with special reference to the Imjingang Fold Belt (15:20-15:50)
.....Chwae Ueechan(韓国資源研究所)
3. コメント：コリア半島南部の基盤岩類のCHIME年代(15:50-16:00).....鈴木和博(名古屋大)
4. コメント：コリア半島北部の基盤岩の年代(16:00-16:10)
.....猪俣道也(東京農大)
5. コメント：飛騨外縁帯における中・古生界テクトニクス(16:10-16:20).....東田和弘(名古屋大)
6. 中国大別 蘇魯超高压变成帯：その東方延長は？(16:20-16:35).....石渡 明(金沢大)
7. 総合討論(16:35-17:00)

普及行事：市民講演会 10月9日(土)

山岡耕春(名古屋大助教授)「東海地方の活断層と地震」

時間：10:00-12:00

会場：名古屋市公会堂大ホール(入場無料)

小澤智生(名古屋大教授)「中部地方の恐竜化石が語る日本列島の成り立ち」

時間：13:30-15:00

会場：名古屋市科学館サイエンスホール(高校生以上は通常入館料300円必要)

主催：日本地質学会・名古屋市科学館

後援：愛知県教育委員会・岐阜県教育委員会・三重県教育委員会

20億年の タイムトラベル

主な展示

20億年前にできた石
地質図から見る中部地方
木曾三川の石はどこから来た？
濃尾平野の地下を探る
東海沖の海底を探る

主な体験実習（10月9～11日）

化石の複製を作ってみよう
活断層を探してみよう
顕微鏡で見る美しい微化石
CGで見る中部地方
岩石・鉱石を割ってみよう



中部地質情報展

場所：名古屋科学館1階(地下鉄伏見駅下車南へ徒歩約5分)
期間：1999年9月15日(水)～10月11日(月)、10月9～11日は
大進化します。

9/17(金)、20(月)、27(月)、10/4(月)は休館日。
10月8日は改装のため中部地質情報展のみ休み。

開館時間：9:30～17:00、入館は16:30まで。

高校生以上は通常入館料300円が必要です。

中部地方の自然史系博物館も多数出展。

子供から大人までみんなで楽しめます。

10月9～11日には、プレゼントや学校教材向け資料も用意。

地質図の販売もします。

専門家のやさしい説明もつきます。

主催：通商産業省工業技術院地質調査所・名古屋科学館・日本地質学会

後援：愛知県教育委員会・岐阜県教育委員会・三重県教育委員会・NHK名古屋放送局

問い合わせ先：〒305-8567 つくば市東1-1-3 地質調査所総務部広報係 電話：0298-54-3520 Fax：3533

e-mail：gsjnews@gsj.go.jp

http://www.gsj.go.jp/HomePageJP.html

普及行事：見学旅行

申込方法：参加者全員の氏名、年齢(学年)と代表者の連絡先(住所・電話またはFax)を明記して、各コース指定の方法でお申し込みください。

見学旅行名	見学コース	案内者	日程	費用	申込方法
上麻生礫岩と日本最古の石博物館(定員20名)	日本最古の石博物館(岐阜県加茂郡七宗町中麻生国道41号線沿い)(10:00)集合、博物館見学、飛水峡周辺にて日本最古の21億年前の岩石を含む上麻生礫岩など観察、川辺ダム付近にて蜂屋層の火山岩や珪化木など見学後、日本最古の石博物館(16:00)解散	足立 守 野村隆光	10/3	¥500 (昼食持参)	ハガキ又はFaxにて、9月22日(水)必着 〒464-8602 名古屋大学理学部地球惑星科学科気付 日本最古の石博物館見学旅行係 Fax 052-789-3033
濃尾地震の傷跡・根尾谷断層を歩く(定員10名)	地震断層観察館前(岐阜県本巣郡根尾村水島)(11:00)集合、観察館・地震体験館や周辺の断層地形見学後(15:00)解散 「公共交通機関不便地にて自家用車にてご参加下さい」	矢入憲二	10/10	¥700 (昼食持参)	ハガキ又はFaxにて、9月30日(木)必着 〒464-8602 名古屋大学理学部地球惑星科学科気付 地震断層観察館見学旅行係 Fax 052-789-3033
豊橋市自然史博物館と渥美半島の地質(定員36名)	豊橋市自然史博物館(10:00)集合、自然史博物館見学後、豊田市西幸町にて高師小僧の産状の観察、伊古部町海岸にて、渥美層群の観察と化石採集、田原町蔵王山にて豊橋市域の地形などを観察後、JR豊橋駅(17:00)解散	松岡敬二 吉川博章	10/11	無料 (昼食持参)	ハガキ・電話又はFaxにて、9月20日(月)必着 〒441-3147 豊橋市大岩町大穴1-238 豊橋市自然史博物館 見学旅行係 電話0532-41-4747, Fax 0532-41-8020
化石採取と瑞浪化石博物館・地球回廊・東濃鉱山(定員40名)	JR瑞浪駅前(10:10)集合、瑞浪層群中の貝化石等の採取、瑞浪化石博物館・地球回廊・東濃鉱山の見学後、JR土岐市駅(16:20)解散 「動きやすい汚れてもかまわない服装、ハンマー・たがね・ビニール袋は各自持参」	湯佐泰久 柄沢宏明	10/17	大人 ¥600 小学生以下 ¥290 (昼食持参)	Faxにて、10月12日(火)必着 瑞浪市化石博物館 柄沢 宏明まで Fax 0572-68-7710
中津川市鉱物博物館とベグマタイト鉱物(定員20名)	JR中津川駅(9:00)集合またはJR恵那駅(9:30)集合、苗木花崗岩およびベグマタイトの観察ベグマタイト鉱物の採集、中津川市鉱物博物館見学後、JR中津川駅(16:00)解散 「小学生は保護者同伴、軍手、標本袋等は参加者が持参のこと、ハンマー、ルーペは博物館から貸し出すが、自分のものがあれば持参」	大林達生 上浦寛次	10/24	大人 ¥4000 小学生以下 ¥3000 (昼食持参)	ハガキ・Fax又はe-mailにて、10月17日(日)必着 〒508-0101 中津川市苗木639-15 中津川市鉱物博物館 見学旅行係 Fax 0573-67-2191 e-mail museum@city.nakatsugawa.gifu.jp

口頭およびポスター発表

*口頭(O)・ポスター(P)それぞれに通し番号がついています。

*発表時間 口頭 15分, ポスターコアタイム 奇数番号 11:00~12:00, 偶数番号 13:00~14:00

1. 地域地質・地域層序

世話人: 天野一男 (kam@mito.ipc.ibaraki.ac.jp)・斎藤 眞・岡田 誠

10日(日) 9:00 17:00 第1会場

座長: 1-4 天野一男, 5-8 八尾 昭, 9-12 田近 淳,

13-16 永広昌之, 17-20 高橋 努

- O-1 9:00 揚子地塊上のベルム系 三疊系境界
.....八尾 昭・江崎洋一・桑原希世子・
Hao Weicheng・Liu Jianbo
- O-2 9:15 安山岩の貫入が泥岩の性質に与えた影響.....
.....中田英二
- O-3 9:30 北海道北部中川町周辺地域における中期中新世
の古環境変遷
.....阿部恒平・疋田吉識・長谷川四郎
- O-4 9:45 北海道留萌付近に分布する峠下層(中新統)の
堆積環境.....長谷川四郎・小林洋一
- O-5 10:00 重力性曲げによる木古内層(硬質頁岩)の斜面
変動.....田近 淳
- O-6 10:15 秋田県中部に分布する中新世水中火山岩類(砂
子淵層)の堆積相.....一関 敏・天野一男
- O-7 10:30 岩手県二戸地域の第三系四ツ役層の層序と珪
化木の産状.....杉山了三・川守田浩・小守一男
- O-8 10:45 南部北上山地, 米谷地域北部のベルム系の層序
の再検討.....永広昌之・石崎国熙・酒井孝幸
- O-9 14:00 棚倉断層沿いに分布する中新世男体山火山角礫
岩中のペペライト.....橋本 純・天野一男
- O-10 14:15 足尾帯・上越帯境界地域の二疊紀酸性凝灰岩層
.....滝沢文教・竹之内耕・田沢純一
- O-11 14:30 水戸市北方に分布する中新統の堆積環境の復元
.....大森信義・天野一男・小島 健
- O-12 14:45 房総半島安房層群天津層・清澄層・安野層中の
8凝灰岩のフィッシュン・トラック年代
.....徳橋秀一・檀原 徹・岩野英樹
- O-13 15:00 山中地溝帯東域から産出した白亜紀二枚貝化石
とその意義.....高橋 努・田中 均・
一瀬めぐみ・宮本隆実・川治芳弘・矢島孝一
- O-14 15:15 長野県上田市塩田平の更新統の層序と形成過程
.....山崎伸行
- O-15 15:30 丹沢山地北部に分布する水中火山碎屑岩類堆積
相.....納谷友規・天野一男
- O-16 15:45 南部フォッサマグナ 丹沢山地北縁に分布する
新第三系礫質堆積物の堆積相
.....鈴木久美子・天野一男
- O-17 16:00 丹後半島の海底段丘の層序と編年
.....富永好明
- O-18 16:15 北但層群からの *Miogyopsina*, *Operculina* の産出と

その意義

-三木武行・谷口正夫・松本俊雄・瀬戸浩二
 - O-19 16:30 広島県三段峡地域における節理の形成過程
.....平山恭之・林 隆也・中井真一・
津島淳生・於保幸正
 - O-20 16:45 高松埋没孔の球粒とジルコン年代.....三浦保範
- 11日(月) 9:00 11:00 第1会場
- 座長: 21-24 徳橋秀一, 25-28 石田啓祐
- O-21 9:00 四国中東部の秩父・黒瀬川帯構成ユニットの配
列.....石田啓祐・香西 武
 - O-22 9:15 高知県中部・土佐山田地域に分布する南海層群
の層序及び物部川層序との対比
.....香西 武・石田啓祐
 - O-23 9:30 高知県東部の秩父帯白亜系の地質
.....節田佑介・狩野彰宏
 - O-24 9:45 九州中軸部に分布する白亜系中九州層群(新称)
について.....田中 均・高橋 努・
宮本隆実・利光誠一・一瀬めぐみ
 - O-25 10:00 野島層群の層序.....鶴飼宏明
 - O-26 10:15 中部九州・三池炭田の形成に関する2, 3の考
察.....三木 孝
 - O-27 10:30 九州の三郡帯南部の地質構造
.....赤嶺辰之介・豊原富士夫
 - O-28 10:45 中琉球・枝手久島の三宝山帯について
.....藤田 宏

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-1 北海道北北地域・勇知層の珪藻化石年代(更新世)とそ
の意義.....秋葉文雄
- P-2 北海道石狩平野南部地域における新生代 tectono-strati-
graphic cycles栗田裕司・横井 悟
- P-3 破壊面のメソスコピックな構造と崩落ブロックの配置から
推定される岩盤崩落の運動像.....永田秀尚
- P-4 “早池峰帯”の岩相構成と内部構造
.....川村信人・内野隆之・北上古生層研究グループ
- P-5 南部北上帯北縁部の中・古生界層序の再検討 5万分の
1地質図幅「早池峰山」の地域地質(その1).....吉田孝
紀・川村寿郎・川村信人・北上古生層研究グループ
- P-6 北上山地, 千厩地域の火成岩類のK-Ar年代
.....御子柴(氏家)真澄
- P-7 上越帯・足尾帯西帯の地質構造区分.....竹之内耕
- P-8 栃木県塩原層群(更新統湖成層)の層序と植物化石のタ
フォノミー.....辻野 匠・前田晴良
- P-9 神奈川県地層を総合的に対比する.....平田大二
- P-10 佐渡島のブーゲー異常
.....清原永子・足立 守・志知龍一
- P-11 北部フォッサマグナの先第三系基盤とその構造

-加藤碩一・駒沢正夫・宮崎純一
- P-12 北部フォッサマグナ高府向斜の構造的特徴
.....新妻祥子・岡田 誠・天野一男
- P-13 十枚山断層付近に分布する藤代岩体について
.....岡野 誠
- P-14 岡山県東部における角礫構造をもつ夜久野花崗岩類(殿敷型角礫岩)の産状とその形成時期.....竹村静夫
- P-15 岡山県大佐山蛇紋岩体中のヒスイ輝石岩に産するジルコンのU-Pb年代.....宮本知治・柳 学
- P-16 岡山県西部高山市周辺の備北層群
.....矢野孝雄・瀬戸浩二・藤井 健・島田直樹・北野定幸・吉富健一・中野雄介
- P-17 隠岐島前の層序
.....山内靖喜・野村律夫・村上 久・石倉広美
- P-18 断層ガウジの変位組織から推定される上韭生川断層の右横ずれ運動.....田村俊之・山本俊夫・村田明広
- P-19 長崎県佐世保層群における泥質岩の風化とそれに伴う鉱物学的変化.....津島淳生
- P-20 熊本県東陽 泉村地域上部ベルム系球磨層の石灰岩の産状.....永井勝也・藤井さとみ・佐野弘好
- P-21 鹿児島市地域の第四系層序と構造発達史.....大木公彦
- P-22 ロシア極東シホテリアン地域のメタロジェニー
.....佐藤興平・根建心具・S.V. コバレンコ・M. リャザンツェバ・S.V. コレンバウム・A.I. ハンチュク・V.G. ゴネフチュク・円城寺守・A.A. ブルプレフスキ・N. ベルニコフ・S.M. ロディオノフ・N.P. ロマノフスキー
- P-23 ロシア極東シホテリアン地域の金銀鉱床における流体包有物と鉱物の性質.....円城寺 守・佐藤興平・根建心具・S.V. コバレンコ・S.M. ロディオノフ・A.I. ハンチュク
- P-24 極東ロシア, シホテリアン南部の花崗岩類の地球化学的水平変化.....根建心具・佐藤興平・A.I. ハンチュク・S.V. コレンバウム・S.V. コバレンコ・円城寺守
- P-25 Sulphur isotope composition and REE distributions of ores from Pb-Zn-Ag mines, Myanmar
.....Marlar Myo Myint, Yoshimichi Kajiwara and Kosei Komuro
- P-26 ニューゼaland北島Waipapa帯北部 Arrow Rocks における下部三疊系コノドント生層序と日本の深海成ベルム/三疊系境界層との岩相比較
.....山北 聡・竹村厚司・相田吉昭・堀 利栄・樋口 靖・K. Bernhard Spörl i・Hamish Campbell・小玉一人・酒井豊三郎
- P-27 ニューゼalandWaipapa帯Arrow Rocks におけるベルム/三疊系境界付近の地球化学的検討(その2)
.....堀 利栄・樋口 靖・竹村厚司・相田吉昭・山北 聡・Karyne Rogers・Hamish Campbell・K. Bernhard Spörl i・小玉一人・酒井豊三郎

2. 年代層序スケール

世話人: 高橋雅紀 (masaki@gsj.go.jp)・岡田 誠

10日(日) 9:30 10:45 第2会場

座長: 29~33 高橋雅紀

- O-29 9:30 加速器¹⁴C年代測定によるロシア, バイカル湖湖底堆積物の編年
.....中村俊夫・小田寛貴・太田友子・河合崇欣
- O-30 9:45 河口湖湖底ボーリングコアの層序および年代
.....輿水達司・内山 高・長島美音・柴田知之・吉澤一家・河西 学・青砥澄夫
- O-31 10:00 広島県三次地域に分布する備北層群の層序と年代.....三宅 誠・竹村厚司・松田高明・渡辺真人
- O-32 10:15 K-Ar年代に基づく東北本州弧の後期中新世~鮮新世火山岩活動史
.....八島隆一・大竹二男・長橋良隆
- O-33 10:30 年代層序スケールと放射年代: 放射年代測定の役割と限界.....兼岡一郎

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-28 本州中央部における鮮新・前期更新世テフラ層序とその精密対比.....長橋良隆・里口保文
- P-29 広域風成塵堆積物のTL, OSL年代測定
.....雁澤好博・Naomi Porat・奈良ゆみ子
- P-30 個別分子の炭素同位体比層序に基づく富山県上市地域の石徹白・赤岩両亜層群の堆積年代推定
.....長谷川卓・吉田秀樹
- P-31 長崎県大村湾の海底堆積物コアの磁気的性質
.....林田 明・中山修平・松岡敷充・竹村恵二・岡村 真・松岡裕美
- P-32 富山県東部魚津地域に分布する新第三系の磁気層序
.....岩城啓美・伊藤康人・渡辺真人
- P-33 松島地域の中新世珪藻化石層序の再検討
.....柳沢幸夫・秋葉文雄
- P-34 東北日本中部中新統上部の浮遊性有孔虫生層序
.....林 広樹・太田 聡・高橋雅紀
- P-35 K-Ar ages for the last occurrence (LO) of *Cyclacargolithus floridanus* in the Boso and Karasuyama sequences, central Japan
.....高橋雅紀・田中裕一郎・三田 勲・岡田利典

3. 地域間層序対比

世話人: 鈴木毅彦 (suzukit@comp.metro-u.ac.jp)・岡田 誠

10日(日) 14:00 16:45 第2会場

座長: 34-37 鈴木毅彦, 38-41 水野清秀, 42-44 黒川勝己

- O-34 14:00 越後平野西縁部における完新統上部の珪藻遺骸群集.....安井 賢・鴨井幸彦・小林巖雄
- O-35 14:15 ATの堆積期間と植生への影響河合小百合
- O-36 14:30 銭亀-女那川テフラの年代観と関連する諸問題

-平川一臣・中村有吾・伝法谷宣洋・市川八州夫
- O-37 14:45 山口県に分布する阿蘇4テフラの古地磁気方位
.....藤井純子・中島正志・石田志朗・松尾征二
- O-38 15:00 0.3 Maに噴出した広域テフラ Ng-1 と飛騨地方
に分布する高山軽石層との対比
.....田村糸子・鈴木毅彦
- O-39 15:15 房総半島上総・下総層群に含まれる中期更新世
広域テフラ.....鈴木毅彦
- O-40 15:30 新潟地域と房総半島の更新世前期火山灰層の対
比.....黒川勝己・坂井 一・樋渡晴美・
青木豊樹
- O-41 15:45 新潟地域と掛川地域における鮮新世後期の火山
灰層の対比.....青木豊樹
- O-42 16:00 近畿中部、信楽高原周辺に分布する流紋岩礫を
含む礫層の時代・火山灰層の対比による検討
.....水野清秀
- O-43 16:15 岩手県北部に分布する大滝溶結凝灰岩および沼
宮内火山泥流堆積物の層序.....照井一明
- O-44 16:30 岐阜県岩村層群（下部中新統）の凝灰岩の組成
と対比.....細山光也・入月俊明

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-36 香川県高松低地および坂出低地の第四紀中期～後期テ
フラの対比.....川村教一
- P-37 K-Ar ages and paleomagnetism of a Pleistocene ash fall
deposit (Ks-22 : Boso) and its source ignimbrite
(Kamitakara : Takayama)Mahito Watanabe・
Masaki Takahashi・Satoru Harayama・
Hiroyuki Hoshi・Yasto Ito
- P-38 房総半島中部、上総層群黄和田層下部の第三紀・第四紀
境界付近の火山灰層 “ Kd38 ”
.....高橋直樹・満岡 孝・横山一己

4. 海域の地質・テクトニクス

世話人：湯浅真人 (yuasa@gsj.go.jp)

10日(日) 9:00 11:00 第7会場

- 座長：45-48 坂本 泉, 49-52 荒井晃作
- O-45 9:00 北海道北西沖大陸棚のテクトニクスと堆積層序
発達史.....荒井晃作・岡村行信・倉本真一
- O-46 9:15 駿河湾西岸の基盤隆起帯構造
.....石井 良・根元謙次
- O-47 9:30 東海沖堆積盆の地質構造
.....加藤 進・瀬能 修
- O-48 9:45 大陸斜面上に見られる地滑り状地形
.....花田正明
- O-49 10:00 伊豆・小笠原弧、孀婦岩構造線周辺の地質学的
特徴.....坂本 泉・堀内誠示・藤岡換太郎
- O-50 10:15 海洋地殻上部の物性と流体移動特性 ODP
Leg185速報廣野哲朗・中嶋 悟・
ODP Leg185乗船研究者一同
- O-51 10:30 巨大な熱水の形成モデル 構造規制と粒子から

- 礫岩へ藤岡換太郎
- O-52 10:45 南極ロス海のテクトニクスと成因.....木村勝弘

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-39 プレートの斜め沈み込みによる前弧域の変形 北海道南
方、千島弧前弧加藤幸弘
- P-40 日本海東縁、奥尻海嶺および周辺の大地震と海底変動：
1999年度「よこすか/しんかい」日本海行動成果報告
.....竹内 章・岡村行信・加藤幸弘・池原 研・
張 勁・佐竹健二・長尾哲史・平野真人
- P-41 研究船淡青丸KT99-4 研究航海報告 紀南海山列と小笠
原背弧雁行海山列の地質学的・岩石学的研究
.....石井輝秋・佐藤 暢・原口 悟・町田嗣樹・
谷口英嗣・白井 朗・石塚 治・八木和徳
- P-42 マイクロ蛍光X線岩石表面走査法による全岩化学組成
海洋底産噴出岩類を例として
.....佐藤 暢・石井輝秋・金山晋司
- P-43 四国海盆 九州・パラオ海嶺海域の音響層序学的研究
.....棚橋 学・関本真紀・山内英生

5. 海洋環境

世話人：西村 昭 (akiran@gsj.go.jp)・氏家 宏

10日(日) 14:00 16:00 第7会場

- 座長：53-56 本山 功, 57-60 志賀健司
- O-53 14:00 新潟盆地七谷層変質火山岩に産するコーレンサ
イト及び関連鉱物について
.....張 永杰・吉村尚久
- O-54 14:15 オホーツク海南部における過去10万年間の珪
藻遺骸群集と海洋環境の変遷
.....志賀健司・小泉 格
- O-55 14:30 九州西方の海底コア中の有孔虫化石の炭素・酸
素同位体比からみた過去37,000年間の古環境変
遷
.....井尻 暁・王 律江・大場志道・川幡徳高
- O-56 14:45 北西太平洋における深層水についての一考察：
深海性底生有孔虫群集の深度分布から
.....的場保望
- O-57 15:00 南大西洋ベンゲラ海流の過去600万年間の古海
洋史：ODP Leg 175 Hole 1082A の放散虫群集
解析から.....本山 功
- O-58 15:15 南極・丸湾大池の完新世堆積物に記録された海
洋環境の変化
.....瀬戸浩二・森脇喜一・三浦英樹
- O-59 15:30 チベット、ヤールンツァンポー縫合帯シャー
ーチャートから産出する中生代放散虫とその年代
学的、構造地質学的意義.....松岡 篤・
揚 群・小林健太・長橋 徹・武井雅彦・
曾 慶高・王 玉淨
- O-60 15:45 デボン系放散虫生層序と環境変化.....梅田真樹
- 10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場
- P-44 西太平洋表層堆積物における放散虫化石の産出量と保存

- 状態.....杉山和弘・福原達雄・田中裕一郎・西村 昭
 P-45 フィリピン海の過去15万年間の古環境三重野久美
 P-46 放散虫化石にもとづくニュージーランド東方海域の暁新
 世以降の古海洋環境
相田吉昭・鈴木 淳・ODP Leg 181乗船研究者一同
 P-47 南極、ロス海北側の深海堆積物に記録された第四紀炭酸
 カルシウム溶解変動
西村 昭・仲宗根徹・阿波根直一
 P-48 南極半島陸棚堆積物の珪藻化石年代と新生代氷床発達史
 の評価: ODP Leg 178の結果
岩井雅夫・ODP Leg 178 Shipboard Scientific Party
 P-49 アルケノン古水温推定法の検討: ハプト藻の培養実験
山本正伸・白岩善博・井上 勲

6. 新生代古生物

世話人: 入月俊明 (tirizuki@aeu.ac.jp), 天野和孝

11日(月) 9:00 10:30 第2会場

座長: 61-63 入月俊明, 64-66 天野和孝

- O-61 9:00 北海道歌登町東部地域に分布する志美宇丹層か
 ら産出した有孔虫群集の特性
内田淳一・長谷川四郎
 O-62 9:15 北日本太平洋沿岸における *Elphidium excavatum*
 (Terquem)の形態変異とその分布
黒澤一男・長谷川四郎
 O-63 9:30 青森県下北半島東部の浜田層の有孔虫化石.....
吉本直一・根本直樹
 O-64 9:45 難波累層(完新統)の貝形虫化石群集に基づく
 古環境解析
安原盛明・吉川周作・入月俊明・七山 太
 O-65 10:00 異なる堆積速度の下で形成された貝化石群: 中
 部更新統下総層群叢層の例.....鎌滝孝信
 O-66 10:15 鹿島台地西縁の木下層から産する貝化石
大原 隆・菅谷政司

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-50 三重県中部の一志層群波瀬累層, 大井累層(下部中新統
 上部)の貝類化石と古環境.....杉澤 学・本田 裕
 P-51 北部フォッサマグナの鮮新統荻久保層および猿丸層より
 産する軟体動物化石群と古海洋気候
熊崎健太郎・延原尊美・小澤智生
 P-52 紀伊半島南西部, 中部中新統田辺層群白浜層の堆積相と
 底生動物群集: 浅海化に伴う堆積環境の細分化と底生群
 集の多様化.....船山展孝・近藤康生
 P-53 陸棚 陸棚斜面における物質循環の示標としての軟体動
 物化石群集: 西南日本の鮮新 更新統の沖合泥質相を例
 に.....延原尊美
 P-54 鹿児島県種子島の中部中新統荻久保層群大崎累層より産し
 たスジボラ属(新腹足目: ガクフボラ科)の新種とその
 古生物地理学的意義.....井上恵介
 P-55 河川堆積物における大型植物化石の堆積過程 岐阜県多
 治見市小名田の中新統土岐口陶土層の例
實吉玄貴・中山勝博・塚腰 実

- P-56 穀の保存状態から見た, 巻貝の穀の一生.....田中秀典
 P-57 土岐口陶土層(中新統)の花粉群集と古植生
齊藤 毅・百原 新
 P-58 大阪湾の完新世貝形虫の変遷と地史的イベント
*Bicornucythere bisanensis*の古生物地理に関連して
入月俊明・増田富士雄・宮原伐折羅・吉川周作・
 藤原 治
 P-59 古琵琶湖層群産のイチョウ化石.....山川千代美

7. 中・古生代古生物

世話人: 長谷川卓 (jh7ujr@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)・江崎洋一

10月11日(月) 10:30 11:00 第2会場

座長: 67-68 長谷川卓

- O-67 10:30 関東山地秩父南帯海沢層のチャートシーケンス
 から産する前期三疊紀放散虫動物群
指田勝男・堀 常東・栗原敏之
 O-68 10:45 飛騨外縁帯より *Cyrtospirifer* と *Leptophloeum*
 の発見.....田沢純一・楊 偉平・三宅幸雄

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-60 示相化石としてのペルム紀 *Stauraxon* 放散虫
桑原希世子・八尾 昭
 P-61 中国安徽省巢湖地域の上部ペルム系 Dalong 層から産出
 した放散虫化石
亀高正男・永井ひろ美・朱 嗣昭・呉 春寅
 P-62 物部川動物群と南海動物群の混在型動物群の発見: 高知
 市鴻ノ森地域の黒瀬川構造帯下部白亜系から
近藤康生・河野由紀子・菊池直樹・田代正之
 P-63 高知県横倉山層群のデボン紀中畑層に見られる殻をもつ
 た *Ceratoikiscidae* 科放散虫.....古谷 裕

8. 脊椎動物化石

世話人: 後藤仁敏・仲谷英夫 (nakaya@eng.kagawa-u.ac.jp)

11日(月) 14:00 15:45 第2会場

座長: 69-72 鈴木 茂, 73-75 藤田正勝

- O-69 14:00 赤坂石灰岩より発見されたペルム紀魚類化石
後藤仁敏・大倉正敏
 O-70 14:15 ユーラシアにおけるコイ科魚類の歴史
友田淑郎
 O-71 14:30 山形県真室川町の野口層(下部鮮新統)から産
 出した板鰐類化石.....矢部英生
 O-72 14:45 北海道徳別地域から産出した滄龍(モササウル
 ス類)化石.....櫻井和彦
 O-73 15:00 岐阜県の中新統岩村層群よりケトテリウム類化
 石の産出.....木村敏之・奥村好次
 O-74 15:15 エチオピア南部前期更新世コンソ哺乳類動物相
仲谷英夫・諏訪 元・ブルハニ=アスファオ
 O-75 15:30 九州北西部東松浦半島における中新世野島層群
 の足印化石と分布.....河野隆重

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-64 モンゴル国ゴビ砂漠中央部の恐竜足跡化石産地, アブドラントヌルー(上部白亜系, ジャドフタ層?)からの恐竜卵, 炭化石群.....渡部真人
- P-65 モンゴル国ゴビ砂漠上部白亜系ジャドフタ層より新種のエナンテオルニス類鳥化石の発見.....鈴木 茂・渡部真人・K. ツオクトバートル
- P-66 イノシシ科の分類と岡山県新見市NT洞産の中期更新世イノシシ化石.....藤田正勝・河村善也
- P-67 川崎市高津区新作の上部更新統より産出したニホンムカシジカ *Cervus (Nipponicervus) praenipponicus* の比較形態学的研究.....桑山 龍

9. 変成作用とテクトニクス

世話人: ウオリス=サイモン (swallis@ip.media.kyoto-u.ac.jp)・渡辺暉夫

10日(日) 9:00 11:00 第5会場

- 座長: 76~79 ウオリス=サイモン, 80~83 渡辺暉夫
- O-76 9:00 三波川低変成度岩類に認められる昇温期変成作用.....石塚英男
- O-77 9:15 三波川帯のエクロジャイトとその形成テクトニクス.....高須 晃・宮城康夫・櫻井 剛
- O-78 9:30 三波川エクロジャイトの再評価: 高変成度ナツブとしてのエクロジャイトユニット.....青矢睦月・ウオリス=サイモン
- O-79 9:45 沖縄島, 名護変成岩の上昇プロセス.....遅沢壮一
- O-80 10:00 四国中央部別子地域三波川変成帯の東平緑れん石角閃岩体からのコスモクロア成分を含む単斜輝石.....阪本志津枝・宮城康夫・高須 晃
- O-81 10:15 The metamorphic grades of the surrounding rocks of the Eppawala carbonatite body, Sri Lanka.....M. W. K. Weerakoon
- O-82 10:30 ロシア南部アルタイ山地のカンプリア紀高圧変成岩.....太田 努・宇都宮敦・石川 晃・丸山茂徳・ミハエル プスロフ
- O-83 10:45 メナシュンベツ川流域における日高変成帯の変成岩類, 深成岩類の帯磁率と不透明鉱物.....堂山大助・小山内康人

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-68 ゴンドワナ地塊東縁の原生代末期エクロジャイト: 岩石化学とテクトニクス.....渡辺暉夫・Agashev, Alexy・森田崇志・西谷達郎・和田恵治
- P-69 高圧変成帯における蛇紋岩メランジュの意義.....前川寛和
- P-70 東南極セールロンダーネ山地の重復変成作用とパンアフリカン変動.....白石和行・C. M. Fanning・R. Armstrong・本吉洋一
- P-71 Structural and metamorphic evolution of the late Proterozoic basement rocks in the Negele area, southern Ethiopia.....Tadesse Yihunie・星野光雄

- P-72 日高変成帯に産する3タイプのザクロ石角閃岩からのP-T経路精密決定と拡散の影響.....白杵 直
- P-73 ロシア沿海州の250-230 Ma 藍閃変成帯は中期地塊揚子地塊衝突帯の東方延長か?.....辻森 樹・石渡 明・板谷徹丸・S.V. ヴィソツキー・S.V. コパレンコ・A.I. ハンチューク
- P-74 Sulu 超高压変成帯の上昇機構と上昇速度制限.....ウオリス=サイモン
- P-75 海嶺拡大速度の変化が沈み込み変成作用に与える影響.....岩崎一郎
- P-76 走査型レーザー顕微鏡による堆積岩中の間隙構造の可視化: 付加体における間隙率減少と変形・変成作用.....大西セリア智恵美・清水以知子・芦寿一郎・馬場 敬・伊藤 真
- P-77 オマーン・オフィオライト直下, ダイナモサーマル変成岩の変形構造: アル・ワット地域の例.....釘宮康郎・溝上周作・山浦洋平・増田俊明
- P-78 変成帯の境界層モデル.....鳥海光弘・乾 睦子・岡本 敦
- P-79 極東ネパールの変成作用とテクトニクス.....在田一則・D.D. シェリング
- P-80 中央ネパール, アンナプルナ地域のザクロ石の組織と累帯構造.....山口はるか・鳥海光弘
- P-81 ヒマラヤ変成帯の二重逆転変成作用と二重デタッチメント.....酒井治孝・瀧上 豊・中牟田義博・折橋裕二
- P-82 葛根田花崗岩周辺の接触変成作用: 自由エネルギー最小化法化学平衡計算に基づく解析.....竹野直人・村岡洋文・佐脇貴幸・佐々木宗建
- P-83 角閃石から推定される温度圧力経路.....岡本 敦・鳥海光弘
- P-84 四国中央部面河地域西部の中期中新世ホルンフェルスと角礫パイプ.....木村一成・榊原正幸・東山輝紀
- P-85 四国中央部における三波川変成岩の累進および後退過程の地域差.....八木公史・竹下 徹
- P-86 四国西部, 八幡浜大島変成岩の変成作用と上昇プロセス.....宮下由香里・小松正幸
- P-87 四国中央部三波川帯の五良津東部緑れん石角閃岩体と峨蔵地域に産する累進的エクロジャイト.....櫻井 剛・高須 晃
- P-88 四国中央部別子地域三波川変成帯・東平緑れん石角閃岩体中のエクロジャイト.....宮城康夫・高須 晃
- P-89 三波川変成帯四国中央部に見られるザクロ石の累帯構造と温度圧力履歴.....乾 睦子・鳥海光弘
- P-90 ざくろ石の累帯構造から読みとる三波川昇温P-T履歴の地域差.....榎並正樹・泉 統文・小津 博
- P-91 三波川帯における変形段階と歪み解析: constriction vs flattening.....森山義礼・ウオリス=サイモン
- P-92 愛知県東部, 音羽一蒲郡地域領家変成岩中の変形および非変形花崗岩質脈のCHIME モナザイト年代.....寛 光喜・鈴木和博・三宅 明
- P-93 富山県東部黒部川流域に分布する宇奈月変成帯の変形変成史.....高橋路輝・豊島剛志
- P-94 領家・阿武隈変成帯(4).....小野 晃

10. 深成岩とマグマプロセス

世話人：中島 隆 (tngkoch@gsj.go.jp), 大和田正明

10日(日) 9:00 17:15 第6会場

座長：84-87 中島 隆, 88-91 川野良信,

92-95 石川正弘, 96-99 柚原雅樹,

100-104 大和田正明

- O-84 9:00 本州弧白亜紀～第三紀火成活動の時空変遷
.....川野良信・加々美寛雄・井川寿之・
石岡 純・加々島慎一・柚原雅樹・周藤賢治・
飯泉 滋・今岡照喜・大和田正明・
小山内康人・田結庄良昭
- O-85 9:15 本州弧白亜紀～第三紀火成岩類の Sr・Nd
初生値.....加々美寛雄・川野良信・
井川寿之・石岡 純・加々島慎一・柚原雅樹・
周藤賢治・飯泉 滋・今岡照喜・大和田正明・
小山内康人・田結庄良昭
- O-86 9:30 北上帯アダカイト質花崗岩類の Sr・Nd 同位体
比.....遠藤美智子・土谷信高・加々美寛雄
- O-87 9:45 甲府花崗岩類の Sr・Nd 同位体組成
.....角田謙朗・石岡 純・加々美寛雄
- O-88 10:00 南部北上山地, 氷上花崗岩体について その4
.....浅川敬公
- O-89 10:15 北アルプス黒部五郎岳から北ノ俣岳における前
期白亜紀閃緑岩の記載岩石学的研究
.....増澤直彦・原山 智
- O-90 10:30 飛騨帯船津花崗岩類に伴われる暗色包有物の岩
石化学的特徴.....石岡 純
- O-91 10:45 琵琶湖周辺地域における白亜紀珪長質 苦鉄質
火成活動.....沢田順弘・斎藤 眞
- O-92 14:00 京都市北方, 山陽帯に分布する白亜紀丹波花崗
岩質岩類の化学的特徴
.....貴治康夫・小澤大成・村田 守
- O-93 14:15 近畿領家帯中性～苦鉄質岩類の分布と化学組成
の関係.....藤井宏明・田結庄良昭
- O-94 14:30 伊那領家帯, 非持トータル岩の Rb-Sr, Sm-Nd
および K-Ar 年代とその意義
.....柚原雅樹・原 文宏・加々美寛雄
- O-95 14:45 近畿領家帯 生駒山周辺に分布する花崗岩類の
K-Ar 年代島田和明・田結庄良昭・
森岡幸三郎・井口 禪
- O-96 15:00 同位体年代からみた近畿領家帯の深成岩類の冷
却史.....田結庄良昭・森岡幸三郎・井口 禪・
島田和明・藤井宏明・加々美寛雄
- O-97 15:15 近畿地方領家帯に分布する高 Sr 同位体初生値
をもつ花崗岩類の成因.....森岡幸三郎・
田結庄良昭・加々美寛雄・井口 禪
- O-98 15:30 領家帯変成岩における部分溶融と花崗岩マグマの
生成過程.....菊地信吾・森清寿郎
- O-99 15:45 花崗岩質岩石の部分溶融過程で生じる液組成の
不均一.....藤林紀枝・丸山さつき
- O-100 16:00 西南日本外帯, 中期中新世花コウ岩類の成因:
スラブ溶融の可能性について

.....折橋裕二・稲垣賢一・平田岳史・
安間 了・平田大二・丸山茂徳

- O-101 16:15 コヒスタン古島弧下部地殻ユニットに産するエ
ピドート花崗岩.....中島 隆・宮崎一博・
白波瀬輝夫・A. B. Kausar
- O-102 16:30 海洋性島弧地殻岩石の弾性波速度と化学組成
.....石川正弘
- O-103 16:45 肥後帯水越層中の花崗岩礫の K-Ar 年代とその
意義.....戸邊恵里・高木秀雄・柴田 賢
- O-104 17:00 南部北上帯日立変成岩および肥後帯竜峰山変成
岩からのオルドビス紀前期花崗岩
.....坂島俊彦・寺田健太郎・竹下 徹・
早坂康隆・佐野有司・日高 洋

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-95 地殻の分化過程 日高変成帯トッタベツ川断面を例とし
て王子裕幸
- P-96 日高変成帯, 野塚岳地域の塩基性複合岩体の分化過程
.....山崎 徹・大和田正明・小山内康人
- P-97 空隙および暗色包有物の形態解析からみた葛根田花崗岩
の変形.....大谷具幸・中島善人・中野 司・村岡洋文
- P-98 北上帯東縁部の前期白亜紀花崗岩体中に共存するアダカ
イト質花崗岩類とカルクアルカリ質花崗岩類の成因関係
.....土谷信高・遠藤美智子・木村純一・加々美寛雄
- P-99 北上山地, 宮古花崗岩体の岩石学的研究
.....小岩修平・土谷信高
- P-100 南部北上帯, 遠野複合深成岩体の岩石学的特徴 特に,
中心相と主部相について西村幸一
- P-101 朝日連峰南部に分布する深成岩類の岩石学.....安藤 勲
- P-102 新潟県北部, 岩船花崗岩の結晶作用と起源.....
.....加々島慎一・志村俊昭・川井稔子
- P-103 南部阿武隈山地, 鮫川深成岩体の同位体年代
.....田中久雄・柚原雅樹
- P-104 早月・片貝川地域での fluids の作用の下での伊折花崗岩
の形成.....藤吉 瞭
- P-105 大峯花崗岩を構成する鉱物の特徴: 特に走査電顕カソ
ド・ルミネッセンス観察によって初めて明らかになった
石英の累帯構造について.....廣井美邦・本吉洋一
- P-106 山陰帯北部に分布する白亜紀～第三紀珪長質火成岩類の
Rb-Sr 年代と Sr 同位体初生値の時代変化
.....西田和浩・飯泉 滋
- P-107 島根県西部, 岡見深成岩体中の苦鉄質包有岩の産状と岩
相.....先山 徹
- P-108 山陰西部須佐地域の中期中新世海底火山 深成複合岩
体: 輝石 K-Ar 年代からの制約
.....今岡照喜・板谷徹丸・岡田利典
- P-109 山口県岩国地域土生花崗閃緑岩の Rb-Sr 鉱物アイソクロ
ン年代.....壺井基裕・鈴木和博
- P-110 花崗岩 苦鉄質マグマ同時共存の広域的証拠と苦鉄質岩
の岩石化学的特徴.....吉倉紳一・熱田真一・
山本哲也・山本隆広・村井政徳・島田和明・山本定雄
- P-111 中北部九州に産する玄武岩質下部地殻由来の白亜紀花崗
岩類.....亀井淳志・大和田正明・山本耕次・
小山内康人・加々美寛雄

- P-112 累帯深成岩体の形成モデル；大隅花崗閃緑岩体の例
.....西村光史・柳 暉
- P-113 ハルツバーグ苦鉄質 超苦鉄質岩体の岩石学・地球化学
.....佐野 栄・R.Oberhaensli・R.Romer・R.Vinx
- P-114 南部モンゴル，東ゴビ地方に分布する Lugiin Gol
Nepheline Syenite Complex の岩石学
.....飯泉 滋・B.Munkhtsengel
- P-115 南インド，Tamil Nadu に産するアルカリ深成岩類の同
位体地球化学的研究 カーボナタイトと関連珪酸塩岩の
関係とその起源について
.....宮崎 隆・加々美寛雄・周藤賢治・森清寿郎・
K.C. ラジャセカラン・V. ラムモハン

11. 上部マントル 地殻プロセス

世話人：平島崇男 (hirajima@terra.kueps.kyoto-u.ac.jp)・
小山内康人

11日(月) 9:45 ~ 17:00 第6会場

- 座長：105-109 有馬 眞，110-113 小山内康人，
114-117 志村俊昭，118-121 本吉洋一
- O-105 9:45 カザフ共和国クムディ・コル地域のダイヤモンド
グレード・エクロジヤイトの岩石学
.....岡本和明・片山郁夫・丸山茂徳・J.G. Liou
- O-106 10:00 コクチュタフ変成岩中のシリカに富んだ単斜輝
石.....片山郁夫・岡本和明・C. D. Parkinson・
中島洋一
- O-107 10:15 カザフ共和国コクチュタフ変成帯 Barchi-kol 地
域のクライノパイロクシナイトとそれに伴う岩
石類の岩石学的記載.....真砂英樹
- O-108 10:30 三波川泥質片岩中のローソン石の希土類元素貯
蔵相としての重要性.....上野貴司
- O-109 10:45 領家変成帯高温部におけるホウ素鉱物の分布 -
青山・伊那・柳井地域の比較.....河上哲生
- O-110 14:00 Mg₃Al₂Si₃O₁₂ (パイロープ) 組成における高温
高压下での相関係.....川崎智佑
- O-111 14:15 羽越地域における下部地殻グラニュライト相変
成作用.....志村俊昭・川井稔子・加々島慎一
- O-112 14:30 岩内岳かんらん岩体に見られる不定形ダナイト
の特徴とその成因.....久保啓子
- O-113 14:45 スリランカの Highland Complex に産する超高
温変成岩類 サフィリングラニュライトとマフ
ィックグラニュライトの変成履歴
.....安東 努・小山内康人・濱本拓志
- O-114 15:00 UHT metamorphism in southern Indian gran-
ulite terrain : evidence from carbon isotope ther-
mometry.Satish-Kumar, M.
- O-115 15:15 コヒスタン古島弧の塩基性下部地殻のスカボラ
イトの起源.....芳野 極
- O-116 15:30 コリア半島・南西地域の河東 山清アノーソサ
イト岩体.....金 容義
- O-117 15:45 南アフリカ共和国ブッシュフェルト火成岩体接
触部における高変成泥質岩の形成環境
.....水野耕平・宮野 敬

- O-118 16:00 九州における高度変成岩類のSr-Nd同位体比の
特徴.....濱本拓志・小山内康人・河原大輔
- O-119 16:15 東南極太古代ナピア岩体の形成発達史：超高温
変成岩類のSm-Nd同位体分析
.....鈴木里子・本吉洋一・白石和行・
加々美寛雄
- O-120 16:30 伊豆 小笠原島弧地殻物質の高圧下弾性波速度
.....北村圭吾・石川正弘・有馬 眞
- O-121 16:45 地質温度計・圧力計の適用限界についての再検
討 化学平衡の評価.....小畑正明

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-116 変成作用における非平衡不均一構造形成のDLAによる
モデル化.....宮崎一博
- P-117 クラックシール脈と沈み込み帯における脱水過程
.....西山忠男・森 康
- P-118 四国中央部汗見川地域三波川帯泥質片岩中のざくろ石の
微量成分累帯構造.....園部美穂子・高須 晃
- P-119 ざくろ石の組成累帯構造から見た三波川変成作用とアル
プス変成作用の比較 . その1) イタリア・ドラマイラ岩
体.....平島崇男・松本尚子
- P-120 三波川変成帯・高越地域における紅簾石英片岩中のタ
ルク形成反応.....畑中晶子・平島崇男
- P-121 中国・大別山産，含クリノヒューマイトドロマイト質マ
ーブルとクリノヒューマイト 単斜輝石 ざくろ石岩の
岩石成因論.....大森聡一・叶 凱
- P-122 カザフ共和国コクチュタフ変成帯 Kumdy-Kol 地域に産
する含ディオブサイド方解石マーブル
.....深沢京香・太田雅仁・小笠原義秀
- P-123 マイクロラウエX線回折法によるコクチュタフ超高压変
成帯産マイクロダイヤモンドの研究
.....石田治人・小笠原義秀・太田雅仁・大隅一政
- P-124 カザフスタン北部・超高压変成岩からみた沈み込み帯で
の交代作用.....山本純平・丸山茂徳
- P-125 超高温変成岩類の岩石学 ナピア岩体・トナー島の変成
プロセス小山内康人・豊島剛志・
大和田正明・角替敏昭・外田智千・W. A. Crowe
- P-126 東南極ナピア岩体ハワードヒルズ産アルミナス片麻岩の
超高温変成作用.....吉村康隆・本吉洋一・宮本知治・
E. S. Grew・C. J. Carson・D. J. Dunkley
- P-127 東南極ナピア岩体トナー島の苦鉄質グラニュライト中に
含まれるフッ素に富む角閃石と超高温変成作用
.....角替敏昭・小山内康人・豊島剛志・大和田正明・
外田智千・W. A. Crowe
- P-128 東南極ナピア岩体の超高温変成作用の時期：電子線マイ
クロプローブを用いたモナザイトとジルコンの年代測定
.....外田智千・鈴木里子・本吉洋一

12. 岩石・鉱物の破壊と変形

世話人：竹下 徹 (toru@letitbe.geol.sci.hiroshima-u.ac.jp)・
林 愛明

10日(日) 9:00 17:00 第4会場

- 座長：122-125 小林健太, 126-129 坂口有人,
130-133 武田昌尚, 134-137 重松紀生,
138-141 西川 治
- O-122 9:00 新しいガス圧式高温高压変形・透水試験システムの開発.....嶋本利彦・宇野 博・山田雅夫・新山恒夫・加藤宏和・井科兼一・青山 豊
- O-123 9:15 岩石内部の流体移動によって誘発された微小破壊の震源過程に関する実験的研究.....増田幸治・西澤 修・雷 興林・佐藤隆司・伊藤久男
- O-124 9:30 東北日本弧横断ルートに沿うレオロジープロファイルとその問題点.....西川 治・大槻憲四郎・藤原 治・布施圭介
- O-125 9:45 断層帯における水/岩石相互作用と水の移動, 拡散.....藤本光一郎
- O-126 10:00 野島断層帯の形成深度と摩擦発熱による到達温度.....大槻憲四郎・長瀬敏郎
- O-127 10:15 断層帯における熱現象のESR解析 野島断層帯深部掘削コア試料を例として.....福地龍郎・今井 登
- O-128 10:30 中国桐柏 大別超高压変成帯に産出するシュードタキライトとその地震テクトニクス意義.....林 愛明・孫 知明・楊 振宇
- O-129 10:45 部分融解岩の実効粘性率について: R.C.M.P.は存在するのか.....武田昌尚・小畑正明
- O-130 14:00 四万十帯におけるウルトラカタクレーサイトの発見: 古南海地震の震源領域.....坂口有人
- O-131 14:15 内部回転構造を持つ岩石の変形とその微分幾何学的構造.....山崎和仁・長濱裕幸
- O-132 14:30 断層のゲージ場理論.....長濱裕幸
- O-133 14:45 天然の剪断帯から推定される破碎・塑性遷移領域の断層変形過程.....重松紀生・後藤清彦
- O-134 15:00 瀬戸内海手島の領家花崗岩類に存在する小剪断帯の産状.....細見幸信・高木秀雄
- O-135 15:15 愛知県足助断層帯の断層帯の産状.....高木秀雄・荒井誠一・浅野 稔
- O-136 15:30 双葉破碎帯の断層帯 福島県小高町南部.....大友幸子・柴田裕香・鈴木淳一
- O-137 15:45 畑川破碎帯東縁部における花崗岩とアブライト脈のウルトラマイロナイト化.....金川久一・鶴見純子・細沼浩子
- O-138 16:00 マイカフィッシュの形成過程: "non-rotation after rotation" モデル.....増田俊明・鈴木知陽・矢田多佳美・宮崎真理・釘宮康郎・山本啓司
- O-139 16:15 幌満かんらん岩に含まれる斜方輝石の形態定向配列と格子定向配列.....石井和彦・澤口 隆
- O-140 16:30 チベットヤールンツァンポー縫合帯シャルーチ

ヤートが被った3ステージの剪断変形

-小林健太・松岡 篤・楊 群・長橋 徹・武井雅彦・曾 慶高・王 玉淨
- O-141 16:45 Development of preferred orientation and microstructure in sheared quartzite: comparison of natural data and simulated results.....Toru Takeshita, Hans-Rudolf Wenk and Ricardo Lebensohn

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-129 棚倉破碎帯の脆性変形領域における運動像.....淡路勲太・山本大介・高木秀雄
- P-130 花崗岩中の割れ目及び雁行状割れ目の形態解析.....藤井幸泰
- P-131 四国中央部三波川変成帯瀬場谷産緑閃石角閃岩の角閃石ファブリックの解析.....藤原みどり・竹下 徹
- P-132 ノンコアクシャル場での歪解析の精度(その2).....林大五郎
- P-133 常温常圧での石英の塑性変形.....伊計秀明・神田寛行・平賀岳彦・釘宮康郎・増田俊明
- P-134 秋田県南部, 雄勝カルデラに見られるマイロナイトと熱水破碎.....伊藤久敏
- P-135 四国中央部三波川帯の石英片岩中の微細構造解析.....野中広美・竹下 徹・佐藤博樹
- P-136 瀬戸川スレートの白雲母の変形組織と全岩組成変化.....大塚隆司
- P-137 断層帯中の鉱物含有量の測定 野島断層の例.....関谷典恵・田中秀実・藤本光一郎・大谷具幸・伊藤久男
- P-138 ポーフイロクラスト領域の幾何学, 'Degree of Stair Stepping' と '面積係数' の導入.....島田耕史・高木秀雄・丁 俊
- P-139 走査型レーザー顕微鏡による岩石組織の画像処理と粒子解析.....清水以知子・澤口 隆・島田耕史・山口はるか・橋本善孝
- P-140 高温・高压三軸試験機を用いた粘土物質の浸透率測定.....高橋美紀・鈴木清史
- P-141 野島断層掘削コアを用いた断層帯区分の定量化.....築山裕一・田中秀実・藤本光一郎・大谷具幸・伊藤久男

13. テクトニクス

世話人：久田健一郎 (hisadak@arsia.geo.tsukuba.ac.jp)・山路 敦

11日(日) 14:00 17:00 第5会場

- 座長：142-145 久田健一郎, 146-149 天野一男,
150-153 山路 敦
- O-142 14:00 南部フォッサマグナにおける「連続二重衝突仮説」「押し出し仮説」の提唱.....天野一男・高橋正樹・Andrew J. Martin
- O-143 14:15 南部フォッサマグナ・島弧・島弧衝突帯における衝突付加した島弧の復元(楕円山地塊の場

- 合)..... Martin, Andrew James・天野一男 162-165 中江 訓, 166-170 木村克己
- O-144 14:30 南部フォッサマグナ島弧多重衝突テクトニクス
における東部御坂山地の位置付け
..... 田中館宏橋・天野一男・岡田 誠
- O-145 14:45 古地磁気からみた南九州の反時計回り回転運動
の時期と範囲..... 奥田明美・小玉一人
- O-146 15:00 掛川層群上部が記録する応力場:多重逆解法に
よる解析..... 山路 敦・酒井哲弥
- O-147 15:15 別府湾北岸地域における第四紀応力場の多重逆
解法による解析
..... 峯元 愛・山路 敦・竹村恵二
- O-148 15:30 石川県金沢市南部地域の地質構造..... 家長将典
- O-149 15:45 1997-98年東北日本横断地殻構造探査について
..... 佐藤比呂志・岩崎貴哉・平田 直・
蔵下英司・伊藤谷生・大口健志・井川 猛
- O-150 16:00 反射法地震探査によって切り開かれた新たな地
平:日高衝突帯におけるデラミネーション ウ
ェッジ構造と、後背地/前縁地西フェルゲンツ
褶曲・衝上断層帯..... 伊藤谷生・津村紀子・
在田一則・森谷武男・佐藤比呂志・平田 直・
岩崎貴哉・木村 学・奥池司郎・井川 猛・
清水信之・川中 卓
- O-151 16:15 ブラインドスラストに関連したバックスラスト
..... 大津 直
- O-152 16:30 中央構造線にそう三波川変成岩の変成作用 ダ
メイジ帯の小断層群
..... 原 郁夫・塩田次男・宮本隆実
- O-153 16:45 大分県三重町地域における北部秩父帯 - 黒瀬川
帯間の剪断帯..... 安倍美佐
- 11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場
- P-142 微小せん断歪みの繰り返し反転によるベイン構造の形成
実験..... 宮田雄一郎・梶原万紗子
- P-143 未固結変形における歪み速度指示者としてのせん断面角
..... 田中 尚・宮田雄一郎・鈴木清史
- P-144 三次元インバージョン構造の形態と形成過程 アナログ
スケールモデル実験による検討
..... 山田泰広・Ken R. McClay
- P-145 四国中西部の中央構造線からみた後期白亜紀末~暁新世
における中央構造線の大規模正断層運動..... 窪田安打
- P-146 クロムスピネルによる黒瀬川帯の横ずれ運動の検証
..... 久田健一郎・高島 静・近藤康生・
菊池直樹・荒井章司
- P-147 シベリア・クラトン南西縁のリフェアンの火山岩類:そ
のtectonic settingの多様性..... 高野香奈・
渡辺暉夫・太田 努・A. Postnikov・E. Sklyarov・
前原恒祐・北山英子・宇都宮敦・石川 晃
- O-154 9:00 美濃-丹波帯堆積岩コンプレックスの付加過程
に関する試案..... 大藤 茂・小山雅通・
佐々木みぎわ・安部美佐・近藤 健・山北 聡
- O-155 9:15 丹波-美濃-足尾-八溝地域のジュラ紀付加体
の「コンプレックス」および「ユニット」区分
と対比..... 大塚 勉
- O-156 9:30 八溝山地鷲子山塊ジュラ紀堆積岩コンプレク
スのユニット区分..... 堀 常東・指田勝男
- O-157 9:45 八溝・鷲子山塊の付加コンプレックス
..... 笠井勝美・天野一男
- O-158 10:00 放散虫化石帯の欠如から推定される構造的不連
続面:八溝山地チャート碎屑岩シーケンスで
の例..... 中江 訓
- O-159 10:15 秩父帯における付加体形成後の帯状配列の改変
紀伊半島東部の例 柏木健司
- O-160 10:30 岐阜県丹生川地域的美濃帯中にみられるカタク
レーサイト
..... 佐々木みぎわ・今里亜紀彦・大藤 茂
- O-161 10:45 韓国南東部の下部白亜系河陽層群の礫岩から得
られたジュラ紀新世放散虫化石
..... 鎌田祥仁・久田健一郎・Yong Il Lee
- O-162 14:00 丹波帯ジュラ紀付加複合体のスラスト系と運動
像..... 木村克己
- O-163 14:15 九州 四国, 四万十帯の低角ナップ構造
..... 村田明広
- O-164 14:30 過去の付加体におけるデュプレックス構造内
部の変形機構分布, 紀伊半島白亜系四万十帯の
例..... 橋本善孝・木村 学
- O-165 14:45 底づけ付加体に記録された造構性侵食作用
..... 木村 学・大西 智恵美 セリア・
橋本善孝・芦寿一郎
- O-166 15:00 帯磁率異方性からみたテクトニックメランジュ
のファブリック
..... 氏家恒太郎・久光敏夫・徐 垣
- O-167 15:15 四国四万十帯における, ビトリナイト反射率と
粒度別イライト結晶度の比較検討
..... 松田達生・池原(大森)琴絵
- O-168 15:30 石炭の光学異方性発達メカニズム 四国西部宇
和島地域の白亜系四万十帯の例
..... 本山善士・岡村 真
- O-169 15:45 関東山地四万十帯大滝層群に記録された変成履
歴の復元..... 原 英俊
- O-170 16:00 西オーストラリア, ビルバラ花崗岩緑色岩帯に
産する太古代35億年前のキャメルクレーク緑
色岩帯の温度構造..... 太田 宏・丸山茂徳

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-148 九州東部の四万十帯北帯のビトリナイト反射率と地質構
造との関連..... 湧川寛子・君波和雄
- P-149 深部付加体の岩石構成と地質構造 四国中央部新居浜
土居地域の三波川帯を例として
..... 森山 豊・岡本健治・木村英樹・榊原正幸
- P-150 四万十帯層状チャートの堆積環境

14. 付 加 体

世話人: 中江 訓 (nakae@gsj.go.jp)・村田明広

10月11日(月) 9:00 16:15 第4会場

座長: 154-157 鎌田祥仁, 158-161 村田明広,

-高柳幸央・山本綱志・足立 守
 P-151 付加コンプレックス中の緑色岩と石灰岩・チャートの層序関係再検討：九州南部三宝山帯の例
佐野弘好・上島 彩
 P-152 覆瓦構造シートに挟まれるメラングジュ.....石田直人
 P-153 神居古潭変成岩類における原岩層序と付加過程
安元和己・榊原正幸

15. 火山噴火・噴出物と火山地質・発達史

世話人：三宅康幸 (ymiyake@gipac.shinshu-u.ac.jp)・林信太郎

11日(月) 14:00 17:00 第3会場

- 座長：171-174 林信太郎, 175-178 下司信夫,
 179-182 奥野 充
 O-171 14:00 東伊豆単成火山群, カワゴ平テフラの¹⁴Cクロ
 ノロジー.....奥野 充・高橋 浩・中村俊夫・
 小林 淳・福沢仁之・山崎晴雄
 O-172 14:15 遠方テフラから読みとられる噴火様式と再堆積
 過程 鮮新・更新世境界, 恵比寿峠・福田テフ
 ラ片岡香子・長橋良隆
 O-173 14:30 富士火山の山体崩壊の脅威.....中村真人
 O-174 14:45 2.2kaの由布火山の噴火および火砕堆積物の
 堆積温度.....藤沢康弘
 O-175 15:00 標名火山の山体形成史の再検討.....中村庄八
 O-176 15:15 焼岳火山群の活動史.....及川輝樹
 O-177 15:30 式根島火山の生成シナリオ.....大島 治
 O-178 15:45 山口県中央部の白亜紀阿武隈群中で見いだされ
 た2つのコールドロン井川寿之・今岡照喜
 O-179 16:00 東北地方の水蒸気噴火と内陸地震との時空的関
 係.....林信太郎・斉藤紀子
 O-180 16:15 石川県金沢市医王山の中新統流紋岩と真珠岩の
 岩石学的研究.....山本朗子・石渡 明
 O-181 16:30 佐渡島北部に産する多重殻ピロー.....寺崎紘一
 O-182 16:45 コロンビアリバー玄武岩中の集成パホイホイ溶
 岩：溶岩の流動に関わる意義.....三宅康幸

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-154 設楽大峠火山岩体の形成過程とマグマ供給系の発達
下司信夫
 P-155 北部北上山地八戸～種差付近に分布する前期白亜紀火山
 岩類の層序と形成史.....佐々木加奈子・土谷信高
 P-156 西南北海道, 中新統馬場川層の玄武岩質火山噴出物
佐藤 明
 P-157 初期噴火活動の指標としての火山灰中の本質発泡ガラス
渡辺一郎・是永陽子・木村慶信・檀原 徹・
 渡辺一徳
 P-158 福島県南会津地域の小型カルデラ群.....水垣桂子
 P-159 始良カルデラ 25 ka 噴火の再検討 複数火口同時噴火の
 可能性福島大輔・小林哲夫
 P-160 雲仙岳眉山の崩壊による海底流れ山.....丹羽俊二
 P-161 木曾御岳山樽沢累層中の礫からの古期御岳山の復元
小田貴代美
 P-162 北海道北部函岳地域に産するサックル安山岩の分化プロ

- セス 二重オバサイト層を持つ酸化角閃石斑晶からの考
 察垣原康之

16. 火山岩とマグマ供給系

世話人：木村純一 (jkimura@riko.shimane-u.ac.jp)・吉田武義

11日(月) 9:00 10:45 第3会場

- 座長：183-185 矢内桂三, 186-189 池田保夫
 O-183 9:00 北海道北東部の中新世玄武岩質岩石の起源につ
 いてPb, Nd, Sr 同位体からの制約：千島背弧海
 盆の形成と関連性について.....池田保夫・
 R.J. Stern・加々美寛雄・C-H. Sun
 O-184 9:15 男鹿半島, 漸新統門前層中部の火山岩類の岩石
 学.....深瀬雅幸・周藤賢治
 O-185 9:30 東北日本弧, 鮮新世火山フロント火山岩の岩石
 学的特性 稲庭岳火山と笹森山火山を例に
安井光大・山元正継・甲斐奈緒・岸 勉
 O-186 9:45 東北本州弧における第四紀火山岩地球化学的マ
 ッピングの再検討
木村純一・吉田武義・飯泉 滋
 O-187 10:00 スピネル中のメルト包有物からみるマントル起
 源安山岩の地球化学.....高橋徳幸
 O-188 10:15 ミクロネシア, パラオ諸島の第三紀火山岩
白木敬一・新田 全・伊藤純一・
 宮本光隆・河野雅代
 O-189 10:30 火星隕石からみた火星の火山岩.....矢内桂三

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-163 小笠原諸島父島の無人岩質岩脈におけるマグマの混合と
 元素の挙動.....坂元健太郎・浦野準臣・黒田 直・
 渡辺綾香・白木敬一
 P-164 一枚の流紋岩溶岩中に見られる組織的不均質性の成因
 隠岐島後, 末期中新世流紋岩の場合
小林伸治・沢田順弘・吉田武義・飯泉 滋

17. 環境地質 水文地質・都市地質・人間社会と地質環境

世話人：田村嘉之 (tamura-yoshiyuki@pop07.odn.ne.jp)・
 長瀬和夫・古野邦雄

10日(日) 14:00 16:45 第8会場

- 座長：190-193 香川 淳, 194-197 藤崎克博,
 198-200 渡辺直喜
 O-190 14:00 新潟県五頭山西麓の水文地質構造と断層系
渡部直喜・中川 勉・柚原雅樹
 O-191 14:15 乾燥地域における地下水シミュレーション
藤崎克博
 O-192 14:30 相関分析を用いた地下水盆の把握
黒田登美雄・古川博恭・池田耕一郎・
 東風平朝司
 O-193 14:45 塩類風化の進行プロセスについて 重要文化
 財・旧下野煉瓦窯における観察から

-朽津信明
O-194 15:00 道路堆積物の化学分析 - 地質学への応用
.....平岡義博
O-195 15:15 津軽平野西部の温泉の全炭酸の炭素同位体比...
.....谷口敦行・箕浦幸治
O-196 15:30 大学における地学教育 環境・防災問題を柱として
.....藤田 崇・田中 淳
O-197 15:45 三保海岸(静岡県清水市)の景観変化 海岸浸食に関連して
.....佐藤 武
O-198 16:00 房総半島に生息するタゴガエルの産卵及び越冬場所に関する地質環境
.....大木淳一・長谷川雅美
O-199 16:15 千葉県における累積水準点変動(1968~1998年)
.....香川 淳・古野邦雄・楠田 隆
O-200 16:30 地質環境情報データベースの活用と現状
.....佐藤賢司・杉山 寛・楠田 隆

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-165 礫層地帯の裸地におけるガリー浸食を伴った土地荒廃のモデリング
.....桂田祐介
P-166 塩水楔観測システムの提案
.....徳岡隆夫・三瓶良和・西村清和・須崎 聡・松田滋夫・久保田俊輔・鈴木重教・上野博芳
P-167 サロマ湖1000年間の湖底環境仁科健二
P-168 金沢大学植物園における空中微生物の挙動
.....横山精士・田崎和江
P-169 現代の環境汚染 広域地下水ヒ素汚染 におけるヒ素の供給源について.....久保田喜裕・石山 豊・横田大樹
P-170 法地質学的資料の簡易検査法の評価
.....杉田律子・丸茂義輝
P-171 広島県西条盆地におけるため池堆積物の磁気的性質と走磁性バクテリア.....佐藤高晴・足立千枝

18. 環境地質 地震地質・地殻変動と動的課題および防災

世話人: 香村一夫 (riegc@ppp.bekkoame.ne.jp)・高浜信行・小荒井衛

11日(月) 14:00 16:30 第8会場

- 座長: 201~205 宮田隆夫, 206~210 紺谷吉弘
O-201 14:00 碓氷川・烏川流域の河成段丘とその変動
.....島津康行・大塚富男
O-202 14:15 新潟県小千谷 川口町地域のネオテクトニクス
.....今井秀浩・上條仁志・高浜信行・ト部厚志
O-203 14:30 千葉市大金沢の関東口・M層を切る断層・地質構造.....古野邦雄・風岡 修・香川 淳・森崎正昭・佐藤賢司・酒井 豊・香村一夫・加藤晶子・楠田 隆・楡井 久
O-204 14:45 京都府宇治市菟道地域の黄栗断層.....紺谷吉弘
O-205 15:00 1923年関東地震時の地震断層である延命寺断層の運動履歴.....風岡 修・古野邦雄・香村一夫・香川 淳・森崎正昭・佐藤賢司・酒井 豊・楠田 隆・加藤晶子・楡井 久

- O-206 15:15 神戸市石屋川・都賀川間における伏在活断層の地中レーダー探査.....宮田隆夫・横道 崇
O-207 15:30 谷埋め盛土地盤における層序と震動特性
.....香村一夫・楠田 隆・楡井 久
O-208 15:45 千葉県強震観測網で観測されたコーダ波の減衰性.....酒井 豊・楠田 隆・加藤晶子・浅尾一巳・岩井久美子
O-209 16:00 千葉県中部を震源とする地震の最大加速度分布 千葉県地震情報ネットワークによる観測を中心として加藤晶子・酒井 豊・楠田 隆・浅尾一巳・岩井久美子
O-210 16:15 茨城県南西部~茨城県沖周辺で発生する地震による震度階分布と地質構造.....楠田 隆・酒井 豊・加藤晶子・竹之内耕・楡井 久

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-172 礫質堆積物の液状化・流動化現象
.....浅田恵里・北村晃寿
P-173 日本列島を構成する岩石の密度とその分布
.....巖谷敏光・鹿野和彦

19. 活構造

世話人: 吉岡敏和 (yoshioka@gsj.go.jp)・齋藤実篤

11日(月) 9:00 10:45 第5会場

- 座長: 211~214 長谷川修一, 215~217 吉岡敏和
O-211 9:00 日本海東縁の歪集中帯...岡村行信・大竹政和・平 朝彦・太田陽子・石川有三・鷺谷 威・加藤幸弘・下川浩一・粟田泰夫・倉本真一
O-212 9:15 新潟県沿岸地域における後期更新世以降の地殻変動速度と地質構造.....仲川隆夫
O-213 9:30 岐阜県下呂町湯ヶ峰の地形・地質と阿寺断層系の活動.....安江健一
O-214 9:45 近畿地方北部の活断層の最新活動時期によるセグメンテーションと断層の平面形態
.....吉岡敏和・杉山雄一
O-215 10:00 有馬 高槻構造線活断層系・六甲断層帯の第四紀後期の活動性.....丸山 正・林 愛明
O-216 10:15 中央構造線活断層系鳴門断層における断層ガウジの微細構造.....森野道夫・原 郁夫・岡田篤正・中田 高・松波孝治・日下雅義・村田明広・水野清秀・谷 寛文・能見忠歳・竹野恵美・池田小織
O-217 10:30 活断層は中期中新世花崗岩体が嫌い?
.....長谷川修一

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-174 跡津川断層系, 茂住祐延断層の活動履歴
.....ハスパートル・竹内 章・伊藤谷生・迫垣内薫・武部晃充・新見 健・木下博久・野原 壮
P-175 伊那谷の造地形断層.....松島信幸
P-176 敦賀地域の活断層.....杉山雄一・吉岡敏和・寒川 旭
P-177 伊勢湾の地質構造.....安間 恵・岩淵 洋・西川 公

- 青砥澄夫・加藤 勲
- P-178 和歌山沖中央構造線海底活断層の分布形態と活動履歴
..... 新見 健・木下博久・井上 基・七山 太・
佃 栄吉・水野清秀・北田奈緒子・斎藤礼子・
竹村恵二・井上直人
- P-179 八代海北部地域における日奈久断層系海底活断層の完新
世活動履歴の復元..... 山崎隆弘・岡村 眞・松岡裕美
- P-180 オホーツク海, 北海道南域及び東北弧前弧海域堆積盆地
の後期中新世以降の構造発達史..... 本座栄一
- P-181 日本海東縁の地質構造発達史..... 倉本真一
- P-182 日本海南部における鮮新世以降の応力場変遷: 九州西方
山陰・北陸海域..... 伊藤康人・荒戸裕之
- P-183 南西諸島海域のネオテクトニクス
..... 木村政昭・Wang Yugang・八木秀憲
- P-184 南海トラフとその陸側斜面の地質構造 付加プリズム・
前弧海盆の構造発達 芦寿一郎・
岡村行信・倉本真一・徳山英一
- P-185 伊豆・小笠原海嶺北域のテクトニクス 島弧内リフトと
衝突帯 徳山英一・徐 垣・
芦寿一郎・倉本真一・森田澄人

20. 砕屑物の組成・組織と続成作用

世話人: 君波和雄 (kimi@sci.yamaguchi-u.ac.jp)・徐 垣・
竹内 誠

10日(日) 9:00 11:00 第9会場

- 座長: 218-221 君波和雄, 222-225 寺岡易司
- O-218 9:00 重鉱物組成と砕屑性ザクロ石組成から推定され
る紀伊半島四万十帯白亜系砂岩の供給源
..... 別所孝範
- O-219 9:15 四万十帯における白亜紀末期~古第三紀初期の
砂岩組成とその意義..... 小柳津篤・君波和雄
- O-220 9:30 四万十帯と西南日本中軸帯の白亜系-古第三系
砂岩の比較..... 寺岡易司
- O-221 9:45 砂質岩・泥質岩の化学組成からみた四国東部の
三波川変成帯および秩父累帯南帯・四万十帯北
帯の関連..... 石濱茂崇・君波和雄
- O-222 10:00 九州黒瀬川帯の中・古生代砂岩の化学的特徴と
日本列島の造構体系..... 宮本隆実・原 郁夫
- O-223 10:15 (招待) Use of whole-rock geochemistry in clas-
tic sedimentary suites B.P. Roser
- O-224 10:30 台湾南部 Kenting メランジにおける帯磁率異方
性を用いた微細変形構造解析
..... 久光敏夫・三尾栄治・徐 垣
- O-225 10:45 帯磁率異方性を用いた堆積物(岩)の圧密・変
形歪みの解析..... 徐 垣・久光敏夫
- 10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場
- P-186 北海道, 北部日高帯の堆積岩類の地球化学的特徴とその
意義..... 小笠原正徳
- P-187 岡山県吉備高原地域の地球化学図
..... 関 達也・山口一裕・能美洋介・浅田 稔・

- 米沢 剛・高田実弥
- P-188 砂岩組成と堆積物の特徴からみた秩父帯南帯と四万十帯
北帯..... 酒井 彰
- P-189 未固結堆積物の帯磁率異方性と微細組織の深度変化
ODP Leg 174B Site 1074A
..... 平野 聡・小川勇二郎・川村喜一郎
- P-190 Fluvial-deltaic sedimentation of the Middle Jurassic sys-
tem in the Murihiku Terrane, South Island, New Zealand
..... Atsushi Noda, Makoto Takeuchi
and Mamoru Adachi

21. 炭酸塩岩の起源と環境

世話人: 松本 良 (ryo@geol.s.u.tokyo.ac.jp)・辻 喜弘・
山本 聡

10日(日) 14:00 17:00 第9会場

- 座長: 226-230 松本 良, 231-234 辻 喜弘,
235-237 山本 聡
- O-226 14:00 (招待) Bio-Sedimentary Response of Carbonate
Systems to Mass Extinctions: Examples from
the Lower Triassic of Central Iran
..... P.G. Milroy
- O-227 14:15 イラン・アバデ 三疊系基底のいわゆる throm-
bolite について
..... 角和善隆・上野勝美・松本 良
- O-228 14:30 Stratigraphy and Geochemistry of the Upper
Devonian Carbonates in Central Iran
..... Mohamad Hosein M. Gharai
- O-229 14:45 飛騨外縁帯のデボン系石灰岩にみられるマイク
ロバリアイト..... 江崎洋一・足立奈津子
- O-230 15:00 北部イランの中部カンブリア系, 海綿マウンド
の堆積相..... 狩野彰宏・町山栄章・松本 良
- O-231 15:15 中東の超巨大油田での炭酸塩岩層における早期
水付き現象とその地質学的要因..... 五月女順一
- O-232 15:30 インドネシア, アルンガス田の炭酸塩岩貯留岩
の堆積モデル..... 松田文彰・Clif Jordan
- O-233 15:45 琉球列島と那国島の最終間氷期段丘のサンゴ骨
格の酸素・炭素同位体比記録と海洋古環境
..... 鈴木 淳・M.K. Gagan・P. DeDekker・
大村明雄・雪野 出・川幡穂高
- O-234 16:00 アラビア湾浅瀬礫湖内 lime mud と竹富島コン
ドイ浜潮間帯 lime mud の成因比較 ... 山本 聡
- O-235 16:15 トウファを堆積させる沢水の安定同位体組成
..... 松岡 淳・大場忠道・渡邊 剛・狩野彰宏
- O-236 16:30 ドロマイト形成を伴うカキガイ化石殻体チョー
ク層の続成変質
..... 鈴木清一・積山佳史・疋田吉識・都郷義寛
- O-237 16:45 足柄層群畑沢累層中の炭酸塩ノジュール
..... 中村貴子・山本 圭一
- 10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場
- P-191 カナダ・ハーン累層(1.9 Ga)のストロマトライトの縞
の時系列解析..... 岡庭輝幸・高野雅夫・

川上紳一・磯崎行雄・熊澤峰夫

- P-192 イランの最上部原生界から三疊系の生層序と化学層序炭素同位体層序及びセリウム異常の変動
..... 松本 良・角和善隆
- P-193 カンブリア・オールドビス系の石灰岩固結へのバクテリアの役割 石灰質偏平礫レキ岩の例
..... 伊藤民平・松本 良
- P-194 秋吉石灰岩層群にみいだされた潮間帯～潮上帯堆積物
..... 井川敏恵
- P-195 Abu Dhabi 沖合の上部Thaman 層群（下部白亜系）中の酸素・炭素同位体比組成
..... 石橋正敏・真保恵美子・波多野佳子
- P-196 堆積過程復元シミュレーターによる炭酸塩岩油層モデル復元..... 斎藤 道典・松田文彰・岩橋龍太郎・小田 浩
- P-197 有孔虫化石群集解析にもとづく石灰質堆積物の堆積環境の検討..... 高田裕行
- P-198 パラオ海溝に沈む巨大石灰岩体の形成環境と定置
..... 町山栄章・北里 洋・藤岡換太郎
- P-199 陸水性続成作用に伴う炭素・酸素同位体組成の時間変化とそのメカニズム..... 熊井教壽・松田博貴
- P-200 更新統琉球層群における石灰岩中の不整合面の形態の差異とその特徴について..... 次重克敏
- P-201 更新統浅海成炭酸塩堆積物（琉球層群）に保存された浮遊性有孔虫殻の“初生的”酸素・炭素同位体組成
..... 坂井三郎・本山 功
- P-202 第四系琉球層群の地層から読み取れる沖縄県と那国島における過去30万年以降の構造運動
..... 山田茂昭・松田博貴
- P-203 宮古島西方浅海域の炭酸塩堆積物の堆積相と形成環境について..... 大嶋一精
- P-204 琉球列島のサンゴ礁の海はいつ誕生したか？ 下部更新統知念層の堆積相と堆積時代を基に
..... 松田博貴・平塚美友紀・山田茂昭
- P-205 沖縄県南大東島の鮮新 更新統炭酸塩岩の堆積相とドロマイトの分布..... 橋本直明・松田博貴
- P-206 縞状トッファの方解石密度に記録された降水量変化..... 藤井秀憲・末岡正嗣・井原拓二・狩野彰宏

22. 堆積作用

世話人：宮田雄一郎 (miyata@sci.yamaguchi-u.ac.jp)・池原 研

11日(月) 9:00 10:00 第9会場

- 座長：238-241 宮田雄一郎
- O-238 9:00 水路実験で確認された、動的条件不変のもとで起こるデルタ形態の急変..... 武藤鉄司
- O-239 9:15 1998年夏、那珂川洪水による堆積物
..... 牧野泰彦・増田孝裕・松本 現・藤曲和摩
- O-240 9:30 三保半島沖表層堆積物の分布..... 坂本雄一・滝野義幸・中西のぶ江・根元謙次
- O-241 9:45 千島海溝沿岸域において発見された先史・歴史津波？堆積物..... 七山 太

11日(月) 9:00 ~ 16:00 ポスター会場

- P-207 デューン領域でできる遷移的なベッドフォームに起因する小型斜交葉理内の粒子配列..... 遠藤徳孝
- P-208 フォーセットにおけるなだれのメカニズムと数値シミュレーション 木村 真・宮田雄一郎
- P-209 乱泥流堆積物の分布変化による sediment wave の形態
..... 久保雄介
- P-210 2次移動火山砕屑物に認められる自己流動化流 鮮新統佐布里テフラ層の例 中山勝博
- P-211 山陰 北陸沖縁辺台地の堆積作用
..... 片山 肇・池原 研・佐藤幹夫
- P-212 新潟県大潟海岸の堆積過程と海岸侵食 鉱物組成による堆積過程の検討 白井 亨
- P-213 阿讃山脈東部に分布する和泉層群の礫岩層とその堆積機構..... 坂本隆彦・森永 宏・別所孝範
- P-214 神戸層群白川累層および藍那累層の堆積環境
..... 木村一成
- P-215 宮崎県日南層群の砂泥互層中にみられる流体噴出構造
..... 姉川学利・宮田雄一郎

23. 堆積相と堆積システム

世話人：立石雅昭 (sedta9-4@scux.sc.niigata-u.ac.jp)・高野 修・伊藤 慎

11日(火) 10:00 17:00 第9会場

- 座長：242-245 高野 修, 246-249 八木下晃司, 250-253 前島 渉, 254-257 立石雅昭
- O-242 10:00 沿岸域における砂の集積能とストーム流の発生：新第三紀北但層群村岡累層の例
..... 前島 渉・木元高子・中条武司
- O-243 10:15 浅海域における砂の集積過程とストームによる再動作用：四国南西部中新統三崎層群の例
..... 中条武司・井上 基・前島 渉
- O-244 10:30 ハンモック状斜交層理のサイズ分布と地球環境の変遷..... 石垣朝子・伊藤 慎
- O-245 10:45 インド東部タルチール・ゴンドワナ堆積盆における後期古生代氷河の消滅と堆積作用
..... 林美明子・前島 渉・中条武司・Rajashree Das・K. L. Pandya
- O-246 14:00 堆積システムの3次元的变化と堆積シーケンスの形成..... 伊藤 慎
- O-247 14:15 深海底堆積物に認められるシーケンス境界の変化：房総半島更新統上総層群を例として
..... 高野壮太郎
- O-248 14:30 砂質海底扇状地堆積物を構成する堆積システムの時空的变化：房総半島鮮新統清澄層を例として..... 斎藤高浩
- O-249 14:45 前弧海盆に発達した海底谷充填物の堆積の特徴 新第三系宮崎層群宮崎相の例から
..... 清水康博
- O-250 15:00 北部フォッサマグナ高井 美ヶ原・水内帯における後期中新世の堆積環境
..... 山田伊久子・小坂共栄

- O-251 15:15 海進期の陸棚における堆積作用：房総半島，中部更新統柿ノ木台層を例として.....堀川恵司
- O-252 15:30 掛川層群中に見られるシーケンス境界
.....柴 正博・横山謙二・大石 徹・
高原寛和・渡邊恭太郎・有働文雄・
赤尾竜介・加瀬哲也
- O-253 15:45 第3オーダー堆積シーケンスと気候変動の関連
新潟県西頸城地域鮮新統の例
.....大村亜希子・保柳康一・亀尾浩司
- O-254 16:00 海進期の内湾堆積物の時空的变化：房総半島上部更新統木下層を例として.....西川 徹
- O-255 16:30 上部白亜系久慈層群（三陸沿岸）の玉川層～国丹層（Santonian）の連続露頭に見られる海水準変動による岩相変化
.....八木下晃司・高野 修
- O-256 16:15 蛇行河川のavulsionと海水準変動：上部更新統常総層を例として.....杉本英也・
高橋康明・丹羽広海・西川 徹・伊藤 慎
- O-257 16:45 蛇行河川堆積物の不均質性と透水性：上部更新統常総層を例として.....久留景吾
- 11日（月）9:00 16:00 ポスター会場
- P-216 伊豆半島鮮新統白浜層群原田層のサンドリッジ堆積物
.....荒谷 忠・酒井哲弥
- P-217 北九州北部に分布する漸新統芦屋層群上部の波浪と潮汐が卓越する堆積サイクル.....坂倉範彦
- P-218 Forced regressive clastic sedimentation related with unroofing of Himalayas and foreland thrusting, in the western Arakan Miocene Basin, Myanmar
.....Kyri Khin・W. Soh・T. Sakai
- P-219 Forced regressionに伴う低海水準期堆積体の発達とシーケンス層序学的境界の表現に関する幾つかの事例
.....坂井 卓
- P-220 長門，黒瀬川構造体のジュラ～白亜紀前期堆積盆の堆積シーケンスの発達と石英質砂岩の起源
.....太田 亨・坂井 卓
- P-221 ベトナム南部ドンナイ川流域中位段丘における潮汐堆積物の構造と立体像.....北沢俊幸・立石雅昭
- P-222 長崎県大瀬戸地域における古第三系堆積盆縁辺域のシーケンス層序.....石下洋平・坂井 卓
- P-223 下北半島に分布する中部更新統田名部層の堆積相
.....鎌田耕太郎・石田磨妃・岡部理奈・奈良正義
- P-224 海退期に形成された上方細粒化から粗粒化を示す海浜外浜サクセッション：九十九里平野の完新統
.....田村 亨・増田富士雄
- P-225 三陸沿岸・上部白亜系（Santonian）種市層の海水準変動に伴う岩相変化.....黒淵まどか・八木下晃司
- P-226 大阪市西成区北津守コアの海成粘土層に記録された堆積物供給システムの変動.....宮原伐折羅・増田富士雄
- P-227 掛川層群上部のシーケンス層序
.....横山謙二・柴 正博・渡邊恭太郎・有働文雄・
佐々木昭仁・赤尾竜介・加瀬哲也
- P-228 岩手県川崎村，南部北上帯のペルム系薄衣式礫岩の堆積と堆積盆進化.....平田夏美

- P-229 相対的海水準下降期における堆積作用 男鹿半島中部更新統の報告例と他地域との対比白井正明
- P-230 白亜系手取層群桑島層に発達する河川卓越型三角州
.....岡崎浩子・伊左治鎮司
- P-231 関東平野中央部（大宮・野田地域）地下浅部の堆積相とシーケンス層序.....中澤 努・遠藤秀典
- P-232 豊浦層群および来馬層群における黒色頁岩の堆積環境の再検討.....石浜佐栄子・松本 良

24. 石油地質

世話人：秋葉文雄（dtakiba@rc.japex.co.jp）・鈴木宇耕・
荒戸裕之

10日（日）9:00 10:00 第3会場

- 座長：258-261 秋葉文雄
- O-258 9:00 基礎試錐「夕張」における流体包有物の検討
.....大久保進・武田信従・並川貴俊
- O-259 9:15 八溝山地に分布するジュラ紀堆積岩の輝炭反射率の広域変化
.....大平寛人・高梨真由子・平井明夫
- O-260 9:30 石油探鉱データに基づく日本海南部北陸～山陰沖海域の構造発達史と埋積作用
.....荒戸裕之・伊藤康人
- O-261 9:45 炭化水素トラップのサブサイズミックな断層予測技術の応用：概念および手法
.....鈴木宇耕・佐藤大地・Rasoul Sorkhabi・
鈴木清志・高橋美紀

10日（日）9:00 16:00 ポスター会場

- P-233 ジルコン結晶の外面・内部面でのフィッション・トラック年代値に基づく熱履歴復元
.....小田 浩・加藤 進・松井良一・檀原 徹
- P-234 熱分解顕微FTIR法によるケロジェンのアルキル鎖切断における低い活性化エネルギーのもつ意義
.....秋山雅彦・森田宣史・続木直英・奥井明彦
- P-235 九州北西部，五島灘周辺の含炭堆積盆地 東シナ海堆積盆地との比較岩田尊夫
- P-236 断層シール能力の石油探鉱への応用：頁岩スミアーの定量化Rasoul Sorkhabi・鈴木宇耕・佐藤大地

25. 情報地質

世話人：能美洋介（noumi@big.ous.ac.jp）・坂本正徳・
ベンカテッシュラガワン

11日（月）9:00 16:00 ポスター会場

- P-237 日本列島地殻モデル構築のための標準岩石データセットとGeomap Zによるデータベースのプロトタイプ
.....奥山(楠瀬)康子・雷 興林・楠瀬勤一郎・
長 秋雄・富樫茂子・今井 登
- P-238 新生代後期の沈降量の分布
.....高木俊男・藤原 治・川崎輝雄・三箇智二
- P-239 最小二乗法を用いた微量元素の部分融解モデル計算

		西岡芳晴
P-240	地質図作成システムCIGMAの利用効果	坂本正徳・塩野清治・升本眞二・ベンカテッシュラガワン
P-241	地形図からDEMを作る一手法	能美洋介・塩野清治・升本眞二・ベンカテッシュラガワン
P-242	(招待) 5mメッシュによる地質・地形と植生	中村康則・波田善夫・能美洋介
P-243	数値地図より作成した斜度図・開度図からの地質情報抽出	蟹澤聡史・横山隆三
P-244	5万分の1地質図幅「熊田」の出版と数値地質図	奥村公男・川畑 晶・中島和敏・長谷川巧
P-245	(招待) ダム地質情報解析システムの開発	福原正斗・谷 茂
P-246	3次元地質モデリングのための空間情報システムの開発	ベンカテッシュラガワン
P-247	(招待) 携帯電話を使った防災情報システム	増田宏己・神原規也
P-248	数値化論理による溶結凝灰岩分布地域における道路斜面の危険度評価	日外勝仁・水戸義忠・相澤泰造・平山拓哉

26. 地学教育・地学史

世話人：佐瀬和義 (Fax 03-3976-0872)・
府川宗雄 (Fax 0463-93-7268)

10日(日) 10:00 17:00 第3会場

座長：262-265	会田信行, 266-269	阿部国広,
270-273	府川宗雄, 274-277	佐瀬和義
O-262	10:00	初等教育学系大学における地学教育の現状と課題 小学校教員養成課程の大学生に関する調査報告
		中井睦美
O-263	10:15	探求の過程を重視した地学野外実習
		高橋 修・濱中正男・山崎良雄
O-264	10:30	教材に利用した地質調査所発行5万分の1地質図 二本松および東京西南部図幅を例に
		府川宗雄
O-265	10:45	1998年栃木県那須町余笹川水害について 自然災害の教材化
		伴 敦志
O-266	14:00	高校生の紫外線生活暴露量調査について
		三津野真澄・小野雅司
O-267	14:15	博物館と学校の連携による化石資料のインタラクティブ活用
		田口公則・大島光春・樽 創・今村義郎
O-268	14:30	博物館における新しい地球科学普及法
		小出良幸
O-269	14:45	地質調査所のサイエンス・キャンプ
		有田正史・徳橋秀一
O-270	15:00	生涯学習社会において定年者は如何にして地学教育普及に貢献するかを考察する
		神戸信和
O-271	15:15	現場に軸足を置いた地質現象の扱い 北海道の例
		中川 充
O-272	15:30	東北地方を横断する地質断面図の歴史と現状の問題点
		鈴木耐元・ネオテクトニクス研究会

O-273	15:45	戦前の中学校での地学教育の4つの節目
		倉林三郎
O-274	16:00	ライマンのフィールドノート
		金 光男
O-275	16:15	“GEOLOGISTS and the HISTORY of GEOLOGY”に掲載された日本人ジオロジスト
		会田信行
O-276	16:30	ヴェルナーとゲーテにおける岩石の生成
		沓掛俊夫
O-277	16:45	おうむ貝, 最初の記載, Rumphius 1705
		清水大吉郎
10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場		
P-249		日本地質学会後援「青少年のための科学の祭典」への取り組み
		阿部国広・神戸信和・三田直樹・鈴木邦夫
P-250		インターネットホームページを使用した自然科学教育: 「宇宙・地球の誕生と自然の構造」
		本田 裕・自然科学教育グループ
P-251		新学習指導要領の批判と地域を学ぶ地学教育
		嵩本 格
P-252		パーソナルコンピューターを使用した干渉色図表の作成
		加藤丈典
P-253		岡本ミネラルコレクションデータベース ファイルメーカー Pro版
		坂野靖行・豊 遙秋・春名 誠・柳沢幸夫
P-254		地域博物館の共催展示「伊豆・小笠原弧の形成と活断層」の開催
		蟹江康光・今永 勇

27. テクトニクスと堆積作用
日本アルプスから深海底へ

世話人：斎藤文紀 (地調・海洋 yoshi@gsj.go.jp)・
芦寿一郎・北里 洋

10日(日) 9:15 11:00 第8会場

座長：278-281	斎藤文紀, 282-284	芦寿一郎
O-278	9:15	物質輸送と地層形成・日本アルプスから深海底へ
		斎藤文紀
O-279	9:30	東海沖海域における海底での土砂輸送
		池原 研
O-280	9:45	相模湾における現行堆積過程
		北里 洋・中塚 武・嶋永元裕・加藤義久・岡田喜裕・神田稔太・山岡明雄・増澤敏行・鈴木光次・白山義久
O-281	10:00	(招待) 相模湾・相模トラフにおける懸濁・沈降粒子の挙動 有機物をトレーサーとして
		中塚 武
O-282	10:15	過去90万年間の濃尾平野の地下層序
		須貝俊彦・鄭 重・杉山雄一・水野清秀・上砂正一
O-283	10:30	堆積盆テクトニクスの変化に伴う堆積システムの変遷 北部フォッサマグナ新潟～信越堆積盆の中新世～更新世の堆積作用とテクトニクス
		高野 修
O-284	10:45	長野県木崎湖の湖底堆積物とそれに記録された

最新期の環境変動.....公文富士夫・井出泰之

28. ブルームの冬

世話人：磯崎行雄・川上紳一・川幡穂高

11日(月) 9:00 10:30 第7会場

- 座長：285-286 高野雅夫, 287-290 磯崎行雄
O-285 9:00 ブルームの冬 大量絶滅・グローバル環境激変シナリオ磯崎行雄
O-286 9:15 太平洋における過去1億2000万年間の炭素の沈積.....川幡穂高
O-287 9:30 シアノバクテリアの大発生(地層からの記録) 太古代/原生代境界の黒色頁岩と縞状鉄鉱層シーケンス.....清川昌一
O-288 9:45 Carbon and Sulfur Isotope Record of the Latest Neoproterozoic OceanHiroto Kimura, Keiko H. Hattori and Jiang Zhiwen
O-289 10:00 原生代後期におけるSnowball Earthの急激な温暖化について.....吉岡秀佳・東條文治・川上紳一・岡庭輝幸・高野雅夫
O-290 10:15 (招待) 全球凍結現象における物理化学過程と時間スケール.....田近英一

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-255 P-T境界海山頂部石灰岩に認められる大量絶滅とグローバル環境太田彩乃・磯崎行雄
P-256 P/T境界を含む層状石灰岩層の高分解能化学柱状図高野雅夫
P-257 ロシア南部ゴルニアルタイ山地の原生代/顕生代境界頃の石灰岩：岩相の特徴と全岩Pb-Pb同位体年代内尾優子・磯崎行雄・能田成・太田努・石川晃・宇都宮敦・M. M. Buslov・丸山茂徳
P-258 原生代後期の氷河堆積物を覆うcap carbonateに刻まれた堆積サイクルと地球温暖化.....東條文治・川上紳一・吉岡秀佳・岡庭輝幸・高野雅夫

29. 北海道中生界の地史イベント

世話人：安藤寿男 (ando@mito.ipc.ibaraki.ac.jp)・木村学・宮下純夫・川村信人

10月10日(土) 14:00 16:30 第5会場

- 座長：291-294 安藤寿男, 295-297 榊原正幸, 298-300 高嶋礼詩
O-291 14:00 北海道古第三系ニセウ層西縁境界断層香束卓郎・伊藤谷生
O-292 14:15 サハリン北端部のテクトニクス.....亀田純・木村学・橋本善孝・芳野極・早坂康隆・坂島俊彦・新井孝志・O. A. Melnikov
O-293 14:30 北海道中軸部, 白亜紀付加体から復元された空知海台の形成年代および岩石化学的性質榊原正幸・堀利栄・木村学・池田倫治・甲本智之・加藤宏海

- O-294 14:45 北海道夕張山地に分布する空知層群の地質と岩石学的特徴.....高嶋礼詩・吉田武義
O-295 15:00 根室層群の堆積環境.....成瀬元
O-296 15:15 浅海 河川成砂岩相の堆積シーケンスからみた白亜紀蝦夷海盆の堆積史.....安藤寿男
O-297 15:30 奔別地域の下部白亜系蝦夷層群とその古生物地理学的意義.....二上政夫・伊藤慎・松川正樹・斎木健一・竹谷陽二郎・永田秀尚・長谷川卓・小島郁生・ジム=ハガット
O-298 15:45 北海道石狩炭田地域の白亜紀アンモナイト群集.....川辺文久
O-299 16:00 北海道北部の函淵層群より産出したマストリヒチアン(白亜紀後期)のイノセラムスについて.....利光誠一
O-300 16:15 IGCP434「白亜紀の炭素循環と生物多様性の変動」の発足に当たって.....平野弘道

10日(日) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-259 北部北海道中川町の上白亜系の大曲層における石灰岩レンズの成長様式積山佳史・鈴木清一・疋田吉織・松田敏孝
P-260 北部北海道中川町の上白亜系より産出した化学合成生物群集.....疋田吉織・鈴木清一・積山佳史・松田敏孝
P-261 北海道石狩平野南部の大深度坑井から得られた最初期白亜紀放散虫群集とその意義鈴木紀毅・栗田裕司・高嶋礼詩
P-262 北海道大夕張地域の蝦夷層群における白亜紀「中期」の放散虫群集.....三次徳二
P-263 日高町周辺の中部蝦夷層群「基底礫岩」鳴島勤・川村信人・植田勇人
P-264 蝦夷層群下部「Orbitolina石灰岩」はどこで堆積したか佐野晋一・高嶋礼詩

30. 中部近畿の地質と応用地質

世話人 斎藤真 (saitomkt@gsj.go.jp)・小嶋智・宮地良典

11日(月) 14:00 17:00 第1会場

- 座長：301-304 宮地良典, 305-308 斎藤真, 309-312 小嶋智
O-301 14:00 (招待) 名古屋をめぐる河川と運河高木不折
O-302 14:15 伊勢湾口道路と伊勢湾断層, 伊勢湾口断層(仮称).....金折裕司・水谷伸治郎・大場穂高・坂幸恭
O-303 14:30 大阪平野上町台地南部における上町層の層序と層相.....石井陽子・中条武司・銭祥富
O-304 14:45 石川県金沢市東部東原町~戸室山周辺地域の地質.....富井康博・前田崇志・塚脇真二
O-305 15:00 石川県金沢市北東部上涌波~田上地域の地質とくに下部更新統大桑層の岩相層序について吉岡勉
O-306 15:15 福井県敦賀湾東岸に産する礫岩について木戸聡

- O-307 15:30 飛弾外縁帯伊勢地域の中部古生界の層序と年代
.....栗原敏之
- O-308 15:45 手取層群分布域南東部の石徹白亜層群の礫岩から産出した放散虫化石とその地質学的な意義
.....松川正樹・高橋 修
- O-309 16:00 福井県南条山地の中生層に発達する碎屑性岩脈群.....梅田美由紀・田賀秀子・阪本直樹
- O-310 16:15 愛知・静岡県境付近に分布する擾乱帯の地質
.....宇井啓高
- O-311 16:30 紀伊半島西部における有田川構造線の地体構造上の意味について
.....中村洋子・山北 聡・伊藤谷生
- O-312 16:45 鈴鹿山脈北部のテクトニクス.....松葉千年

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-265 北アルプス北部,「立山」図幅地域に分布する船津花崗岩類.....高橋 浩
- P-266 北アルプス,「立山」図幅地域の白亜紀~第三紀火成活動.....原山 智
- P-267 白亜紀末のバイモータルボルカニズム 岐阜県大雨見山層群の流紋岩類と高K玄武岩質安山岩
.....町田嗣樹・原山 智
- P-268 富山県小矢部市南西部における上部新生界層序
.....塚脇真二・清水 徹
- P-269 福井県嶺北地域の活断層
.....山本博文・福井県地域活断層調査検討委員会
- P-270 美濃帯西部,伊吹山石灰岩周辺の中生代付加コンプレックスの構造と年代.....江川千洋・鈴木洋平・大塚 勉
- P-271 美濃帯西部,5万分の1横山地域の地質構造
.....斎藤 眞・沢田順弘
- P-272 付加構造に起因する大規模斜面崩壊:美濃帯南部の根尾白谷を中心として.....小嶋 智・西岡 勲・矢入憲二
- P-273 紀伊半島東部外帯の基本構造 粥見南方,鳥羽地域を例として庄司勝信・大杉博敏・
本田 裕・小倉義雄・徳田 満
- P-274 紀伊半島中央部,奈良県川上村の秩父累帯(その2)
.....加藤 潔・島村哲也・岡田光博・坂 幸恭
- P-275 愛知県中央部の地球化学図: Sr同位体比と元素の分布
.....田中 剛・浅原良浩・川邊岩夫・山本綱志・
平原靖大・三村耕一・劉 永忠・伊藤貴盛・三浦典子・
太田充恒・高橋 浩・谷水雅治・仙田量子・高木真理・
加地拓哉・近藤正史・倉田有里子・柴田信之介・
高間智宏・竹邊勝道・田中万也・森 康則・
山下瑠佳・小笠原岳大・木村理恵
- P-276 最新地盤情報から見た濃尾平野臨海部の地下地質(1)詳細層序.....内園立男・五藤幸晴・藤田芳邦・
犬飼隆義・玉腰幸士・安江勝夫・濃尾地盤研究委員会
- P-277 最新地盤情報から見た濃尾平野臨海部の地下地質(2)実務への応用を目的としたコア観察
.....野澤竜二郎・小松幹雄・板橋一雄・片平 宏・
楠本和彦・西川勝広・千葉正己・河合秀高・
濃尾地盤研究委員会
- P-278 最新地盤情報から見た濃尾平野臨海部の地下地質(3)テフラ・珪藻分析に基づく成果牧野内猛・

森 忍・竹村恵二・檀原 徹・坪田邦治・
松澤 宏・濃尾地盤研究委員会

- P-279 最新地盤情報から見た濃尾平野臨海部の地下地質(4)帯磁率・電気伝導度の層序解析への応用
.....伊藤 孝・内園立男・長谷川英明・吉村優治・
濃尾地盤研究委員会
- P-280 高分解能S波反射法による「天白河口断層」の表層構造解析.....稲崎富士
- P-281 名古屋市及び周辺地域の地質情報とGIS脇田浩二・
アリア:ジョイ=ダイゴ・稲崎富士・田口雄作
- P-282 岐阜県南宮山周辺の東海層群牧田累層と東海層群上部のフィッシュン・トラック年代.....吉田史郎
- P-283 1/20万地質図幅の数値化と凡例統一の試み 中部・近畿の例宮地良典・星住英夫・巖谷敏光・
兼子尚知・鹿野和彦・栗本史雄・宮崎純一・宮崎一博・
西岡芳晴・尾崎正紀・斎藤 眞・吉岡敏和
- P-284 奈良盆地北部に分布する大阪層群の堆積盆地の変遷と断層運動.....尾崎正紀・宮地良典
- P-285 琵琶湖南湖における4mボーリングコア層序
.....里口保文・宮本真二
- P-286 大阪平野南部の高位段丘堆積層について.....錢 祥富
- P-287 二上層群玉手山凝灰岩と室生火山岩のジルコンの特徴とFT年代岩野英樹・檀原 徹
- P-288 中新統二上層群のフィッシュン・トラック年代
.....星 博幸・岩野英樹・檀原 徹
- P-289 紀伊半島大峯酸性岩類のK-Ar年代と化学組成
.....角井朝昭・新正裕尚

31. 環境地質 環境修復を含めた地質汚染調査・対策と微生物による重金属の除去および廃棄物・残土の諸問題

世話人: 田崎和江 (kazueta@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)・
上砂正一

11日(月) 10:00 11:00 第8会場

- 座長: 313-314 田崎和江, 315-316 上砂正一
- O-313 10:00 地質汚染浄化対策と処理水の有効利用について
.....上砂正一・島田孝昭・上垣内純子
- O-314 10:15 地質汚染の浄化目標値から完全浄化過程へ.....
.....楡井 久・楠田 隆・香村一夫
- O-315 10:30 河北漏の水質浄化.....鈴木七重・田崎和江
- O-316 10:45 フィールドサイエンスからミクロのエコシステムまで 汚染源をさぐる田崎和江

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-290 ヘビノネゴザにおける重金属の濃集作用
.....長谷川香織・田崎和江
- P-291 薩摩硫黄島にみられるモダンストロマトライト
.....四ヶ浦弘・田崎和江
- P-292 平湯鉱山におけるSとFeを含むバイオマットの生成環境.....佐々木直哉・田崎和江
- P-293 炭酸塩鉱物の起源について
.....安多 剛・加藤裕将・田崎和江

- P-294 高温環境における硫黄のバイオミネラリゼーション
.....大野源広・田崎和江
- P-295 硫酸酸性泉に生息する微生物が作るシリカの動態
.....朝田隆二・田崎和江

32. 氷期 間氷期サイクルに伴う
古環境変動

世話人：北村晃寿 (seakita@ipc.shizuoka.ac.jp)・岡田 誠

11日(月) 16:00 17:00 第7会場

- 座長：317-320 北村晃寿
- O-317 16:00 花粉化石からみた関東地方における最終氷期の古環境変動.....榎井 尊
- O-318 16:15 氷河変動を示すバイカル湖湖底堆積物
.....長谷義隆・河室公康・石田直人
- O-319 16:30 ヒマラヤの山間盆地堆積物に記録されたモンスーン変動.....藤井理恵・酒井治孝
- O-320 16:45 後期新生代の東南極氷床と沿岸環境変動 昭和基地周辺での現状と展望
.....五十嵐厚夫・三浦英樹

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-296 第四紀氷河性海面変動と琉球層群の堆積サイクル
.....小澤智生・黒田登美雄・中井久美子・前川健太・古川博恭
- P-297 前期更新世末期の間氷期における水深変動の復元 西南北海道瀬棚層上部にみられる古環境変動
.....能條 歩・鈴木明彦
- P-298 氷期 間氷期サイクルに伴う古環境変動とそれに対する生物の応答 日本海陸棚の場合北村晃寿
- P-299 下部鮮新統笠岡層上部の堆積相と貝形虫化石群集の変化
.....山田 桂・入月俊明

33. 地下生物圏と初期続成

世話人：徐 垣 (soh@geo.kyushu-u.ac.jp)・北里 洋・浦辺徹郎

10月11日(月) 14:00 16:00 第7会場

- 座長：321-324 北里 洋, 325-328 徐 垣
- O-321 14:00 (招待)地球最大・最後の生物圏 地下生物圏を探る.....長沼 毅
- O-322 14:15 地下生物圏研究のフィールドとしてのマリアナ島弧海溝 背弧系 地質学者と地球科学者の提

案.....和田秀樹・加藤和浩・佐藤 暢・広野徹郎・藤岡換太郎

- O-323 14:30 (招待)地下微生物による石油生産
.....今中忠之
- O-324 14:45 海底熱水系で生成する石油様炭化水素と熱水噴出孔下の地下生物群集.....山中寿朗
- O-325 15:00 (招待)深海微生物から地殻内微生物への挑戦 深海高水圧環境より、地底下超高压環境へ
.....加藤千明
- O-326 15:15 走磁性バクテリア起源の強磁性鉱物 磁石化石としての重要性山崎俊嗣
- O-327 15:30 地球表層・地下環境下でのバイオミネラリゼーションと鉱物学的特徴.....赤井純治
- O-328 15:45 西オーストラリア、ノースポール地域の35億年前の炭質物に富む珪質岩脈群とバクテリア化石.....上野雄一郎・磯崎行雄・丸山茂徳・塚本尚義

34. 大陸衝突型・付加型造山帯の
オフィオライトと緑色岩

世話人：石渡 明 (geoishw@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)・宮下純夫

11日(日) 9:00 9:45 第6会場

- 座長：329-331 石渡 明
- O-329 9:00 大陸衝突帯・付加型造山帯のオフィオライトと緑色岩.....石渡 明
- O-330 9:15 四国西部四万十帯北帯、久礼メランジ玄武岩類の産状と化学組成.....麻木孝郎・吉田武義
- O-331 9:30 オマーンオフィオライト北部Fizh地域の後期貫入岩体(Khabiyat岩体)
.....足立佳子・宮下純夫

11日(月) 9:00 16:00 ポスター会場

- P-300 北部北上山地葛巻付近に分布する緑色岩類・堆積岩類の地質学的・岩石学的性質について
.....和田元子・土谷信高
- P-301 福井県小浜地域の丹波帯および滋賀県霊仙石灰岩体の緑色岩の岩石学的比較研究.....武藤俊充・石渡 明
- P-302 兵庫県朝来町地域夜久野オフィオライトの下部斑れい岩に産するミグマタイトについて.....早坂康隆・隅田祥光
- P-303 ヤップ島変成オフィオライトの構造地質と岩石化学
.....吉川 潤・早坂康隆

入会の仕方

入会ご希望の方は下の申込書に必要事項を記入し学会事務局へお送り下さい。

申込書はコピーしてお使い下さい。入会に際しては正会員か院生会員の紹介が必要です。

近くに会員がいない場合はその由お申し出下さい。なお会費は前納制となっています。年

会費は正会員：10,000円、院生会員：8,000円、学生会員：5,000円です。

日本地質学会入会申込書 Application form for the Geological Society of Japan	
*会員番号	*会員種別 <input type="checkbox"/> 正会員 <input type="checkbox"/> 院生会員 <input type="checkbox"/> 学生会員
氏名 (ふりがな) Name in Japanese	ローマ字表記 Name
____年 Year ____月 Mo. ____日 Day 生 born on	Sex: <input type="checkbox"/> 男 Male <input type="checkbox"/> 女 Female
学位 Degree: <input type="checkbox"/> 博士 Dr. <input type="checkbox"/> 修士 Master <input type="checkbox"/> 技術士 Engineer <input type="checkbox"/> その他 Other _____	
専門 (下欄から3つまで) Specialties (less than 4 items) 1. _____ 2. _____ 3. _____	
学歴 Academic career: ____学校 High School _____年卒業 Year completed ____大学 University _____学部 Faculty _____年卒業 (見込み) Year completed 修士 Master: _____大学 Univ. _____研究科 Fac. _____年修了 (見込み) Year completed 博士 Doctor: _____大学 Univ. _____研究科 Fac. _____年修了 (見込み) Year completed	
自宅住所 Home address: (郵便番号 Zip code _____)	
電話 Phone: _____ 電子メール E-mail: _____	ファックス FAX: _____
所属機関名・住所 Affiliation with address: (郵便番号 Zip code _____)	
電話 Phone: _____ 電子メール E-mail: _____	ファックス FAX: _____
連絡先 Correspondence: <input type="checkbox"/> 自宅 Home <input type="checkbox"/> 所属機関 Office	
紹介者名 (正・院生会員) Recommended by (name of member) _____	印 Signature _____
*受付 (_____年 _____月 _____日)	*入金 (_____年 _____月 _____日) 振替・現金・銀行・他
*承認 (_____年 _____月 _____日)	*送本 (_____巻 _____号)

太枠内のみにご記入下さい。 (*Official use only)

専門分野 (番号で) 01: 層位 02: 堆積・堆積岩 03: 古生物 04: 構造地質 05: 火山・火山岩
06: 深成岩 07: 変成岩 08: 鉱床地質 (金属・非金属) 09: 鉱床 10: 鉱物 11: 燃料地質 12: 地熱
13: 第四紀 14: 環境地質 15: 都市地質 16: 土质地質 17: 土質工学 18: 水文地質 19: 探査地質
20: 土木工学 21: 情報地質 22: 地震地質 23: 海洋地質 24: 地球物理 25: 地球化学
26: 地質年代学 27: 地理 28: 地学教育 29: 考古学 30: その他 40: 地球惑星学

日本地質学会 *News*

Vol.2 No.8 August 1999

The Geological Society of Japan *News*

日本地質学会 / 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6階

編集委員長 高橋正樹

電話 03-5823-1150 Fax 03-5823-1156

E-mail : geosocjp@ra2.so-net.ne.jp

ホームページ <http://www.soc.nacsis.ac.jp/gsj/>

Contents

日本地質学会第106年年会プログラム.....巻頭

表紙写真解説：宮城県気仙沼市鹿折鉱山産 自然金 (GSJ M14585) 豊 逢秋.....1

博物館紹介²³ 釧路市立博物館 山代淳一.....2-3

日高山脈館オープンのお知らせ 小野昌子.....4

博物館だより 夏季特別展.....5

信州新町化石博物館 特別展「三葉虫の世界～出現・繁栄から絶滅まで～」/

立山カルデラ砂防博物館「立山に産する玉滴石 オパールの世界」

地球調査・診断の現場から 応用地質30年を振り返って

梅沢俊一.....6-9

地学英語雑感 地学でよく使う表現 4 嶋崎吉彦.....10

紹介.....11-12

竹松 伸：マンガン団塊 - その生成機構と役割/

糸魚川淳二：新しい自然史博物館

ご案内.....12-13

自然史学会連合・日本学術会議50周年記念・合同シンポジウム「博物館の21世紀 ナチュラルヒストリーの未来 /地質調査所ニュース5・6月号のご案内

各賞・研究助成.....13

平成12年度笹川科学研究助成募集要項

公募.....13-14

北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻の教官公募/
静岡大学教育学部の地学担当教官公募/千葉大学教官の公募/
財団法人三瓶フィールドミュージアム財団 平成12年度職員採用について

報告.....15

日本学術会議第17期第6回鉱床学専門委員会議事録

ご案内(追加).....15

地質図の凡例を標準化するためのアンケート調査にご協力をお願いいたします

環境地質研究委員会：第9回環境地質学シンポジウムの開催と講演論文募集のお知らせ/女性科学者の未来を考える研究委員会：第11回 国際女性技術者・科学者会議の報告

院生コーナー.....18

研究室紹介 No.9 信州大学理学部物質循環学教室地球システム解析講座

支部コーナー.....19

北海道支部：巡検報告 ともに学ぶ自然教室 地形・地層の見方、学び方

執行委員会だより.....19

1999年度第6回執行委員会/1999年度第1回臨時評議員会のお知らせ

追悼.....20-22

熊谷直一名誉会員を悼む

西村 進

名誉会員 高井冬二先生のご逝去を悼む

鎮西清高

田中耕平さんのご逝去を悼む

今泉眞之・井口 隆

学会記事.....23-33

1999年度第2回定例評議員会議事抄録

出版物在庫案内

表紙写真解説

宮城県気仙沼市鹿折鉱山産 自然金 (GSJ M14585)

南部北上山地の中・古生層中には含金石英脈を稼した金鉱床が多く分布し、一部は砂金鉱床として古くから知られ、平泉の中尊寺金色堂に代表される「黄金文化」の基礎となった。鹿折鉱山は、気仙沼市の北方9キロに位置し、1652年頃から本格的な開発が始まり、1901年から1910年がこの鉱山の全盛期で、その後1942年の金山整備令により廃鉱となった。鉱床は二疊紀、三疊紀の砂岩、粘板岩、石灰岩中に層理にほぼ平行した石英脈で、脈巾の平均は50センチ、延長200メートルの比較的小規模のものであった。石英は白色で脈の構造のはっきりしない塊状、緻密なもので部分的に黄鉄鉱、黄銅鉱、硫鉄鉱等をともない、肉眼的な金粒を含む。このような鉱脈鉱床を「老脈」と称するのに対し、第三紀またはそれ以後の火成活動にともなう浅熱水性金銀鉱床を「幼脈」と呼称する。これらの鉱床の特徴は、「銀黒」と

呼ばれる銀の硫化物を主とする黒色の縞を脈中にもち、微細な金(エレクトラム)がこの部分に特に多く含まれるものである。1904年には2.25キログラム(金量1.875キログラム)の大塊を産し、「モンスターゴールド」(Nugget "Monster")として同年アメリカセントルイスで行われた万国博覧会に出展され表彰されている。

ここに示した自然金標本は「モンスターゴールド」の一部といわれ、全重量362.5グラム(金量148.6グラム)の我国最大のもので、1980年地質調査所の元燃料部長であった徳永重元氏から寄贈され、以来地質標本館に展示されている。

本年8月4日から17日まで気仙沼市「リアスアーク美術館」で「おかえりなさい モンスターゴールド」展が催され95年ぶりに里帰りした自然金標本を見るために多くの見学者が訪れた。また、これを機に鹿折金山への道が市によって整備され案内板等が設置されている。

(写真・解説 地質調査所地質標本館 豊 逢秋)

広告取扱：株式会社廣業社

印刷・製本：創文印刷工業株式会社

〒104-0061 東京都中央区銀座8-2-9 電話 03-3571-0997 (代) Fax 03-3571-2055

建物右側は、新博物館と一体となる構想のもと昭和52年に建設された釧路市埋蔵文化財センター。その後、昭和58年11月3日、釧路市立博物館と改称されオープンした。

釧路市立博物館 KUSHIROCITY MUSEUM

釧路市立博物館学芸員 山代淳一

釧路市立博物館は、ヒブナの生息地として国の天然記念物に指定されている春採湖を見下ろす高台にあります。湖周辺には、

国の指定史跡、擦文時代の春採台地竅穴群やアイヌ時代の鶴ヶ岱チャランケチャシが残されています。また、湖畔には300種近い植物や100種を超える野鳥が観察されることから自然観察や歴史探訪、或いは憩いの場として最適の環境として、市民に親しまれています。

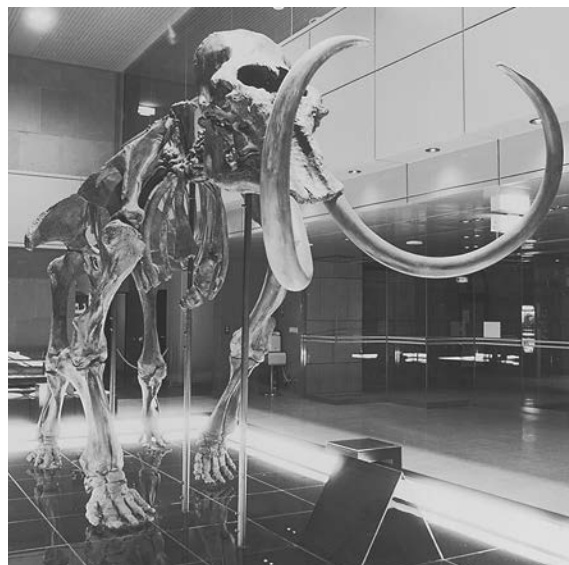
釧路市立博物館は、昭和11年7月14日に釧路市立郷土博物館として市内幣舞町に設立されました。以来、市立函館博物館、市立旭川郷土博物館（現旭川市博物館）、網走市立郷土博物館とともに、北海道における博物館の草分け的存在として活動しています。二度の移転を繰り返した後、昭和58年11月3日、現在地に移転新築し、釧路市立博物館と改称されました。

建物は地上四階・地下一階で、中央のドームを境に左右対象となり、右側を占める釧路市埋蔵文化財調査センターと接しています。館内には展示室・収蔵庫のほかに、滅菌消毒室、保存処理室、講堂、市民研究室、工作室、実験室、図書室などの諸施設が整えられ、博物館活動に備えられています。

建物のデザイン

博物館の建物は、春採公園という立地環境と博物館展示のメインテーマを表現した設計がなされています。例えば、楕円形の円盤を階段状に積み上げたデザインは、博物館が位置する標高約30mの台地の等高線を表しています。また、建物後方の垂直の面は、太平洋に面して切り立つ海食崖をイメージしています。さらに、円形を基調とした左右対象の造形は、タンチョウが翼を広げて来館者を迎えてくれる姿を想像させます。

地元出身の建築家、毛綱毅曠氏によるこ



氷期の使者マンモス

博物館ロビーに展示されているマンモスは、ソビエトでみつかった化石をもとにつくられたレプリカで、体長3.5m、体高2.9m、牙の長さが2.5mである。

の作品は、日本建築学会賞に輝きました。また、館内の展示は、通産大臣によるディスプレイ産業大賞を受賞しています。

常設展示

博物館入口には、釧路市と博物館の位置を示す世界地図と模擬水準点が置かれ、正面玄関を通り館内に入ると、吹き抜けのロビーにマンモスの骨格標本が展示されています。この標本はソビエトで発見されたものを型取りしたレプリカですが、釧路近辺にも存在していたといわれる氷河期を象徴する展示物です。展示室は一、二、四階の三層に分かれ、メインテーマをジオラマや



地学展示室

釧路の大地のコーナーでは、主に地形の移り変わり、石炭・火山について、イラスト、地史年表、化石を用いて紹介している。



ダイオ・ネイチャー・ドーム

釧路湿原とタンチョウをテーマとする全天候型ジオラマ。

ドームを二分し、一方に初夏の湿原に憩うタンチョウの親子、他方は冬の湿原でのタンチョウの求愛のダンスが展示されている。



クシロムカシバク

釧路町十町瀬の古第三紀層（約3,800万年前）より発見された、新種の哺乳類上あご化石。この化石は、当時北アメリカ大陸と日本がアジア経由で陸つづきであったことを示す証拠となっている。

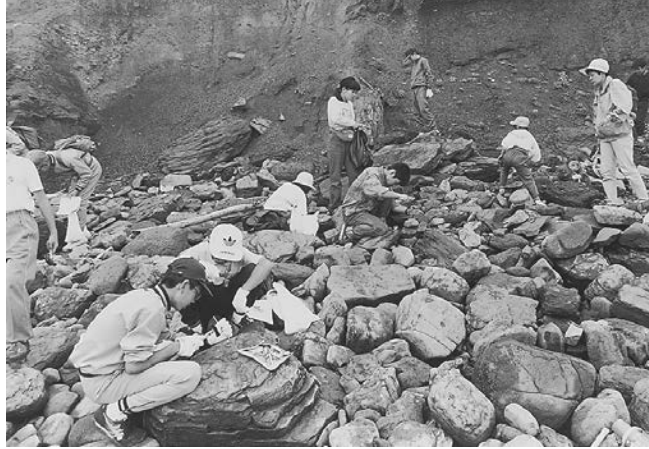
大型展示で展開するテーマ通りと、サブテーマやより詳細な情報を紹介するセクション通りの展示導線が設けられています。

一階は、大地・湿原・海をメインテーマとして、「釧路の大地」、「釧路の生物」、「釧路の海」の自然科学部門で統一されています。釧路の大地のコーナーでは、主に地形の移り変わり、石炭、火山についてイラスト、地史年表、化石を用いて紹介しています。最初に目に止まるのは、釧路管内の地形模型ですが、普段何気なく生活している大地の海岸線、湿原と丘陵、カルデラなどの形状が一目で分かります。この大地の地史は約7,000万年前の白亜紀末期から始まります。その生いたちの様子が8枚の古地図と年代別に展示されたアンモナイトや約3,800万年前の新種の哺乳類上顎化石、クシロムカシバクなどの化石、岩石によって語られています。

二階は大地ができ、自然が広がる中で展開する人々の歴史をテーマとして「先史時代の人々」、「釧路の近世・近代」のコーナーが設けられています。四階は生活のすべてを神々と結び「サコロベの人々」、そして、建物中央のダイオ・ネイチャー・ドームと名付けられた半球体の展示は、「湿原とタンチョウ」をテーマとする全天候型ジオラマです。ドームを二分し、一方に初夏の湿原に憩うタンチョウの親子、他方は雪原の広がる冬の湿原でのタンチョウの求愛のダンスがディスプレイされています。これら三つの展示空間は、自然と人々の有機的なつながりを表現した二重ラセン階段で結ばれています。

サウンド・スケープ

常設展示室には、聴覚に訴える展示として、サウンドスケープと呼ばれる立体環境



夏休み子ども化石観察会。
釧路町昆布森海岸で実施。
海岸に露出する古第三紀層より、キンギョガイ、カキ、シジミなどが採集された。



クリーニング教室。
特展に合わせて、母岩からアンモナイトを取り出す小学生対象のクリーニング教室を実施。2日間で50名参加。

音楽を取り入れています。これは展示テーマの情景や時間的環境などをシンセサイザーで表現したもので、展示室ごとにテーマが与えられています。

展示コーナーにより、「湿原を吹きぬける風と水の流れ」、「ひろがる北の海」、「時の流れ」、「コタンを吹きぬける風や梢からこぼれる陽の光」、「湿原とタンチョウ」など、異なったテーマの音楽が流れ、見学者に五感でうったえる展示となっています。

特別展示

博物館では常設展の他に、毎年数回の企画展・特別展を行っています。

昨年地学関係では、北海道で産出したアンモナイトを紹介する化石展「アンモナイトの世界」が開催されました。アンモナイトは釧路地方からも産出されますが、道央が主な産地のため、千歳市で活動する千歳化石会から多数の貴重な化石を借用させていただきました。特展会場では、様々な形態のアンモナイトが展示された他、大型アンモナイトに直接触れられるコーナーなども設けられました。また、開催初日と翌日に小学生を対象とした、母岩からアンモナイトを取り出すクリーニング教室も実施し、こちらも好評を得ることができました。

その他の特展としては、市内在住の方の資料をお借りして展示する、特別展「私の博物館」など6回が実施されました。また、市内の学校やコミュニティセンターを会場

として、巡回展「移動博物館」が年3回実施されています。

教育・普及

当館では、講演会、各種講座、自然・歴史観察会、体験学習会など年間40件を超える事業を開催しています。一方、各学芸員（地学・動物・魚類・昆虫・歴史）の調査研究の成果は、博物館々報、博物館紀要、調査報告書、収蔵標本目録などで報告され、あわせて学芸員講座などでも紹介されています。尚、これらの諸事業を博物館と共催で行っている博物館友の会は、昭和46年に発足しています。

<利用案内>

開館時間：午前9時30分～午後5時

（入館は午後4時30分まで）

休館日：月曜日、国民の休日、年末年始（12月31日～1月5日）

入館料：一般・大学生：360円、高校生：200円、小・中学生：100円 団体割引：15～200名未満 1割、200～300名未満 1.5割、300名以上 2割

交通：JR 釧路駅からバスで約15分、科学館通り下車、徒歩5分

所在地：085-0822 釧路市春湖台1-7

電話 0154-41-5809

Fax 0154-42-6000



化石展「アンモナイトの世界」
北海道産アンモナイトや爬虫類化石約120点を展示。



日高山脈館オープンのお知らせ

6/26(土)、北海道日高町に日高山脈館がオープンしました。

日高町は沙流川が流れ、町の94%を森林が占める「せせらぎと木もれびの里」です。北海道中軸部、日高山脈の西麓に位置しており、町内で以下のようなさまざまな地質を見学することができます。

1. 日高変成帯

町の東部を通る日高山脈は、日高変成帯(主帯)が西側のポロシリオフィオライト帯(西帯)に衝突し、めくれあがってきた(例えば小松ほか、1982)と考えられて

います。

最近パイロサイズ調査の結果から地殻のデラミネーションが推定されており(例えば伊藤ほか、1998)、この夏から日高町付近を通る北海道横断の大規模な人工地震探査も予定されています。

かんらん岩、はんれい岩や花こう岩などのほかに、角閃岩・グラニュライトなどの変成岩が分布しています。日本初のピリディン片岩も発見されています。

2. 神居古潭帯

町の西部には神居古潭帯の蛇紋岩や変成岩が分布します。岩内岳のかんらん岩は現在も大規模に採掘されています。かつてはクロム鉱や石綿なども採掘されていました。また「日高ヒスイ」(chromian diopside)を産出したことでも有名です。

3. イドンナップ帯、蝦夷累層群

日高変成帯と神居古潭帯の間には、イドンナップ帯と蝦夷累層群が分布します。イドンナップ帯は白亜紀～古第三紀の付加体です。蝦夷累層群は白亜紀の前弧海盆堆積物で、アンモナイトやイノセラムスを産出します。

このような「地質博物館」あるいは「自然史博物館」としての材料が豊富な町の地理的優位性を生かし、日高山脈をメインの題材にして作られたのが日高山脈館です。内容は

1F: 日高山脈インフォメーション

- ・山に魅せられた人たちの足跡 特に伊藤秀五郎さんを取り上げて
- ・登山、森林ウォークの主なルート案内
- ・日高山脈北部のジオラマ(1/30,000)

2F: 日高山脈の成り立ち

- ・日高町の地質図(開館にあたって再調査、修正=続行中)
- ・町内に分布する地質がどのようにしてできたかを解説(日高変成帯を中心に)
- ・町内で見られる石を展示、一部は顕微鏡で観察可能
- ・プレートテクトニクス(付加体)模型

3F: 日高山脈の自然

- ・氷河地形の紹介(幌尻岳ジオラマ)
- ・日高町の産業(鉱業・林業): 鉱床サンプル展示(主に番場コレクションより)
- ・高山植物の写真パネル
- ・北海道でよく見られる樹木の立木サンプル・ナキウサギ模型

4F: 展望台

- ・近くの山並みと日高町中心部が見渡せます。

1F奥: 調査員研究室&薄片室となっています。

地質調査の際には以下のようにご利用いただけます。

1. 調査中、または終了直後に薄片製作ができる(無料): 大カッター、研磨機2台、ガラス板などを備えた薄片室があります。消耗品類は山脈館で用意してあります。詳しくはお問い合わせください。その場で記載したい方には、Nikon ECLIPSE(反射装置付き偏光顕微鏡)とNikon SMZ 800(実体顕微鏡)をお貸しします。

2. 今どのあたりに誰が調査に入っているかわかる: 調査に来られた方に、2Fの地形図ボード(「地質みどころマップ」)へ名前・所属と調査範囲を書き込んでもらいます。できればごく簡単な研究紹介(発表済みのもので可)をつけていただくと尚よし。熊出没情報などもここに記入します。

3. 文献の閲覧・マッピング・パソコン作業などが可能: 調査員研究室に地質関係の書籍、雑誌類、論文などをそろえる予定です。

作業用の机がありますので、マッピングなどの作業も可能。パソコン作業をしたい方は、少々古めですがデスクトップパソコンをご利用いただけます(Office 97、プリンター、スキャナあり)。またノートパソコンとネットワークカードをお持ちなら、山脈館のルーターに繋がります。

日高町に来られる、また近くを通過することがありましたら、ぜひお立ち寄りください。札幌と帯広を結ぶ国道274号線沿い、道の駅「樹海ロードひだか」の隣です。お待ちしております。

なお日高山脈館のHPも7/1より運用中です。まだまだ整備中ですが、順次更新の予定です。こちらませひご覧の上、ご意見ご感想などお寄せいただければ幸いです。

(日高山脈館 小野昌子)

hidaka3@ruby.ocn.ne.jp または hmc@town.hidaka.hokkaido.jp

http://www.town.hidaka.hokkaido.jp/hmc
〒079-2301 北海道沙流郡日高町字日高297-12

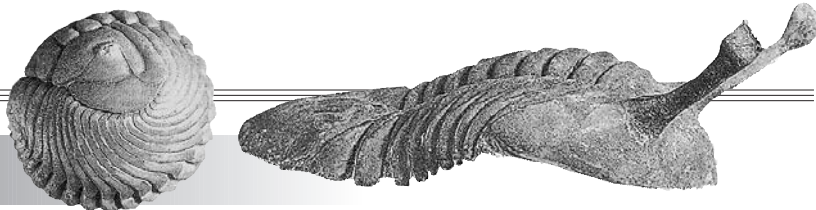
電話 01457-6-9033

Fax 01457-6-3855(教育委員会)

<月曜日は休館日です。日高町教育委員会電話01457-6-3858までご連絡ください。>



信州新町化石博物館



特別展

「三葉虫の世界～出現・繁栄から絶滅まで～」

信州新町化石博物館では特別展として三葉虫の化石をとりあげ、特別展を開催します。

三葉虫はカニや昆虫などの節足動物に含まれ、カブトガニに近縁であるといわれていますが、古生代末期に絶滅してしまった生物です。三葉虫という名前は体が中軸部と両葉の3葉に別れることに由来します。

古生代の始まりは『カンブリア紀爆発』によって地球上のあらゆる生物のデザインが現われたといわれ、三葉虫も代表的な生物としてあげられています。発見された化石は10,000種にのぼるといわれ、古生代初期には示準化石となった種もあり、海の生物の主演となりました。しかし、頭足類や

丸くなったまま化石になった三葉虫
プリオメラ フィスケリ

柄のような目を持つ三葉虫
アサフス コワルスキ

魚類などの台頭によって捕食圧が高まり種数が減少し、古生代末に起こった地球上最大規模の大量絶滅により三葉虫は地球上から姿を消してしまいます。

今回の特別展では三葉虫化石や生痕化石、そして捕食したと考えられる他の生物化石を交えながら古生代の代表的な生物の一つである『三葉虫』という生き物にクローズアップして紹介します。

会期：1999年7月29日(木)～10月11日(月)

開館時間：午前9時から午後5時まで(入館は午後4時30分)

会場：信州新町化石博物館企画展示室

電話：026-262-3500

住所：〒381-2404 長野県上水内郡信州新町上条

<http://www.ne.jp/asahi/shinmachi/museum/>

入館料：高校生以上500円(400円)・小中学生250円(200円) 内は20名以上
交通：国道19号線 長野から30分・松本から1時間

長野自動車道 豊科I.C.50分・更埴I.C.40分、上信越自動車道 長野I.C.30分

JR長野駅 長野バスターミナルより 川中島バス 新町・大原行き 美術館前下車

立山カルデラ砂防博物館

第3回企画展

「立山に産する玉滴石 オパールの世界」

会期：1999年7月20日(火)～9月26日(日)

会場：立山カルデラ砂防博物館

企画展示室

富山地方鉄道立山線立山駅から徒歩1分

電話 076-481-1160

〒930-1405 立山町芦峯寺字ブナ坂68

<http://www.tatecal.or.jp/index.html>

開館時間：9:30～17:00

休館日：毎週月曜日

企画展観覧料：無料

入館料：大人400円、大・高生320円、小・中生200円

企画展解説書「立山に産する玉滴石 オパールの世界」

展示概要

立山カルデラ内にある約70の熱水の池「新湯」からは、明治時代、約1mmの透明で丸い「玉滴石」が多く産しました。玉滴石は熱水に溶けていたシリカが地上で微小粒子となって析出し、それが多数集まってできたもので、鉱物学上、オパールに分類されます。

この企画展では、神秘のお湯の池「新湯」とそこに産する「玉滴石」を紹介するとともに、国内外に産する貴重なオパール標本を展示します。

主な展示物

1. 立山産玉滴石
2. 魚卵状オパール：秋田産プリコ石、鹿児島産魚卵状珪石
3. 国内産オパール：福島県宝塚産、石川県赤瀬産、岐阜県蛭川村産
4. 世界のオパール：オーストラリア産、メキシコ産、アメリカ・ネバダ産・ペルー産、チェコ産
5. 宝飾品



玉滴石を産する新湯



玉滴石

地球調査・診断の 現場から

応用地質30年を振り返って

梅沢俊一

(梅沢地質コンサルタント)

私にとって昨年(1998年)は、地質や応用地質(主として土木地質)の仕事に関係して30年目の年である。今まで、実に色々な内容の仕事に関わってきた。特に応用地質の分野では、斜面、砂防、トンネル、道路、ダム、地すべり、建築基礎、宅地造成などの土木地質や環境地質、学術ポージングの仕事が多かった。最近は活断層の調査に関わっている。30年目の節目にあたり、地質や応用地質について日頃思っている感想を述べてみたい。これから急峻な山岳地帯の地表踏査などは、体力と気力の衰えから数年後には間違いなく現場に出られなくなるから、ここで自分が携わってきた仕事を一定程度総括してみたいのである。これから、同じ道を歩まれようとする若い会員の方々の参考になれば幸いです。

地質巡検の思い出

1992年の夏にカナダおよびアメリカ東部地域の地学巡検に参加した。また、1996年には第30回万国地質学会議(IGC)に参加し、中国の大地を自分の眼と足で実感した。いずれも日本のような島弧の地質とはまったく違っていた。地質体の規模の桁外れの大きさや大地の広がりには、言葉に表現できないほど驚き、感動した。カナダ、モントリオール市郊外、Mt. Saint Hilaireの青いソーダライトを含む霞石閃長岩の巨大な岩体(写真1)や中国新疆ウイグル自治区の北端に位置する、可可托海のリチウム鉱山(写真2)のリチア輝石の電信柱みたいな巨大な結晶(写真3)にびっくり仰天した。

写真2. 中国新疆ウイグル自治区可可托海No.3ペグマタイト露天掘全景。



写真1. Mt. Saint Hilaireの複合閃長岩体
幅3~4kmの貫入岩体で、稀産鉱物の世界的産地として知られている。
Canada, Montreal 郊外。

この時ほど、今まで地質をやってきて本当に良かったと感激したことはなかった。今までの色々な苦勞や嫌な思い出が吹っ飛んでしまった。手元には彼の地で採集した鉱物の標本がある。今もときどき、鉱物を取り出しては眺めて、地球が生み出した宝石を手にして静かな感動を味わっている。

応用地質(主として土木地質)

1. 斜面調査とその問題点

数年前に発生した福井県の国道脇の斜面の岩盤崩落を契機に、全国の国道、県道で道路防災のための点検調査が始まった。この調査は現況斜面の安定度を診断し、崩壊の危険度をランク分けするもので、崩壊・崩落しやすい地形および地質情報を得ることを主眼にしている。しかし、斜面の地形発達史や崩壊のメカニズムの時空的変遷などの視点が欠落しているために、現況では安定斜面として評価されても当該斜面が将来にわたっても安定を保っているかどうか、また、地形・地質および過去の崩壊履歴からみて、「やや不安定」と判定された斜面が今後どうなるのかなどについての評価が具体的に言及できていない。

また、崩壊の時期、規模など道路防災のために最も重要な情報について、不確定な事しか言及できないでいる。斜面安定度の

評価は、「評点制」によるものと斜面の現況と推移を歴史的にみる視点を重視した「斜面の健康診断」による評価を総合して判断しなければならないと考える。対象の違いはあっても、「斜面の現状」と「人間の健康」を見る眼の基本は同一のものであり、この意味から言えば、医者も地質技術者も同一のことをしているわけである。まさしく地質技術者は、「地球の診断者」である。

2. 砂防調査の考え方

砂防調査でも「斜面」と同様に、地形発達史や地質構造発達史の視点をもって調査に臨むことが大切である。このことに関連して、ある地域での溪流調査では下記の内容を重視して調査に取り組んだ。

微地形認定による古土石流堆積物の確認と層序関係

扇状地堆積物の堆積構造からみた古流向解析

完新世テフラの確認と分布

上記の内容は溪床堆積物の起源と地史を

写真3. 可可托海No.3ペグマタイト。

巨大なSpodumeneの結晶。
人物は左から筆者、朱炳玉氏(中国側案内者)。

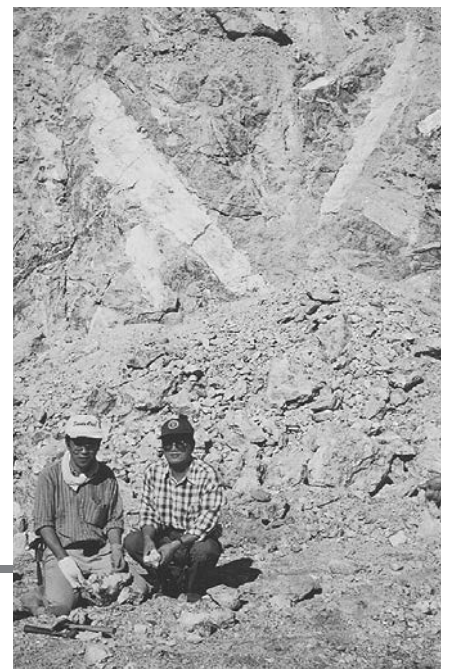




写真4. 細粒花崗閃緑岩体にみられる風化形態の例。
写真左はD級、右はCM～CH級岩盤。茨城県笠間市福原西方。



写真5. 葉山層群森戸層の泥岩
全体に破碎状をなし、浸水すると脆弱化著しい。
横須賀市秋谷にて。

把握し、現況の溪流が現在に至るまでどのような変遷を経てきたのか、また、将来どのような姿になるのかを予測することに関係する。これらの事柄は砂防計画のベースプランがたてられる時に重要である。テフラの認定は溪流の変遷に時間軸が設定できるのであり、地質技術者のもっとも得意とするところである。

3. トンネル調査の留意点

地山の地質的評価をするにあたって、留意すべき点は次のとおりである。

中・古生界の地層と岩石からなる地域では、メランジュ、オリストリスなど地層の連続性が著しく不均一な地質体が分布することが多いので、調査結果の解釈には細心の注意が必要である。

新第三紀および第四紀火山岩類や火山砕屑岩類からなる地域では、火砕タービダイト、火砕デブライトなどの二次堆積起源の地層が分布し、一次堆積起源の火山砕屑岩類と識別する必要がある。このことは、今後必要な調査の内容に関係すると思われる。いずれにしても、地層と岩石を堆積ユニットやシーケンス層序的にみなければならない。

第四紀更新世の地層からなる地域では、特に地下水や谷埋め堆積物の分布および性状について把握しておく必要がある。

4. 地すべり調査の留意点

地すべりは、かつて活動した経歴をもつ地すべり地が多い。調査では、その経歴の詳細を探る事が必要である。すなわち、地すべり活動を地史的時空的視点からみることが大切で、地すべり活動が将来どのように推移するかを予測することを調査の目的とするので、地すべり地の背後の地形異常(二重山稜・凹地・溝状地形など)に注意を払うべきである。この事は地すべりの有

効な対策工を選定することに関わってくるので、調査の根幹をなすものである。最新の測定機器を使って結果を出したからといって、その結果の持つ地質的かつ工学的意義と地すべり対策に有効な答えが曖昧であれば、地すべり調査の意味がなくなってしまうのである。大切なことは、「ものの見方と考え方」である。

5. 道路建設に役立つ調査

道路建設にあたって、地質調査のもっとも重要な成果とは何か、を考えてみなければならない。道路建設には切土、盛土、トンネル、構造物(橋梁など)や環境調査などクリアしなければならない問題が山ほどある。調査報告書をまとめるに当たっては、土木工学や土質工学の知識と考え方が不可欠なために、地質の方はともすれば付足しのような位置づけをされる場合が多い。しかし、道路建設の現場では土木工学や土質工学では解決しない地学的問題に直面することがあり、この時こそ、地質技術者の登場となる。

その一例として、橋梁の支持地盤(完新世砂丘堆積物)の評価をN値だけではなく、堆積物の堆積学的性質に着目して地盤の評価をおこなった例を下記に示す。

・砂丘堆積物の堆積学的特性(砂粒子の円磨度・球形度など)とN値の関係

このことを把握するために、砂粒子を実体顕微鏡で観察し円磨度・球形度を求め、N値との相関を調べた。その結果、通常的地質断面図に円磨度・球形度の値を重ねたグラフを書き、支持地盤のN値のばらつきの原因を堆積学的に解明した。このことを参考にして、橋梁基礎について有効な提言とすることができた。

そのほか、切土法面の安定を検討するにあたり、調査地域も含めた周辺地域の自然・人工斜面の実態調査をおこない、法面の安定に関する診断書(カルテ)を作成し、

その結果を参考にして計画道路の切土法面の勾配や保護工について適切なコメントをすることができた。また、岩の風化形態と岩質の変化が問題となる場合が多いので、周辺地域の踏査の実施が不可欠である。(写真4)

6. 宅地造成工事での問題と調査例

造成工事などで問題となったいくつかの事例を下記に示す。

三浦半島に分布する新第三紀葉山層群森戸層の泥岩

地中ではN値が50以上の軟岩であるが、掘削によって浸水したり地表に露出すると、異常なまでに強度劣化する特殊軟岩である(写真5)。

三浦半島に分布する新第三紀逗子層分布地域に認められる古期地すべり

地層の層理にほぼ平行なすべり面が認められ、掘削によってすべりが再活動した。このすべりは新期の地すべり活動によって生じた地すべり土塊の再滑動ではなく、安定した地山の逗子層が滑動したものである(蟹江ほか、1996)。また、これとは違って逗子層中には逗子層を構成する泥岩の岩塊からなるルズな堆積物が存在している(梅沢ほか、1993)。この不安定な地盤を地山の逗子層とみなして切土したところ、法面の崩壊現象が発生した。

造成盛土地盤に建てられた家屋が変状し、その原因調査をおこなった。変状は造成後10年経過して発生した。調査は盛土の不攪乱試料を採取し、定荷重圧密試験などをおこない、家屋変状の原因を盛土の不同沈下によるものと判断した。片切片盛地盤の造成工事では、盛土の締め固めが不十分になる傾向があり、現場では十分な施工管理が求められる。調査の段階では、造成前の「古い地形図」をフルに活用して旧地形の状態を把握して

第1表．沖積低地（完新世）用のボーリング柱状図の様式（例）

深 度 尺	柱 状 図	地 質 名	層 相 単 元	コ ア				堆積構造	観 察 記 録	堆 積 層 分	14 年 代	掘 削 方 法	
				色 調 (a)	破 断 面 (b)	相 対 密 度	含 有 物						
							腐植物 木片						貝化石 生痕

おく必要がある。

7. 地質図の編集

足掛け5年かけて関東甲信地方の土木地質図（縮尺 1:200,000）の編集作業に参加した。既存の地質図をはじめとして資料の収集と整理が、言語を絶する程の大変な作業となった。関係するすべての資料を集めたのちに、地質図の校正がまた精緻・困難を極めた。地図会社の工場に地質図校正のために2年程通ったが、地質境界線の校正には極度の心労を伴い、精根尽き果てた。しかし、完成したときの喜びはひとしおで、感無量とはこのことを云うのである。まさに“手作り”そのものである。おかげで関東甲信地方の地層名の大半を知ることができた。この仕事は生涯決して忘れることはない。

8. 影響予測調査の事例

トンネル掘削による地表変位影響予測調査

安山岩（溶岩）からなる山地の斜面上に庭園があり、大小さまざまな安山岩の転石（庭石）および岩塊（自然）が庭園に数多く存在した。この庭園の直下にトンネル（土盛り10～30m）を施工する計画があり、トンネル掘削時の発破振動による地表変位（陥没・転石の倒壊および移動など）が問題となった。そこで筆者は調査項目・内容とまとめの方法を以下のように考え、報告書を作成した。

- ・調査手法 地表踏査（縮尺 1:500）
- ・調査項目
 - a) 転石の分布と現況の安定度（大きさ、形状、斜面への坐り具合・不安定転石の分布・密集の程度など）（第1図）
 - b) 地形・地質（斜面の勾配および形態・表土の厚さ・露岩の岩質と分布範囲・地山の安山岩の割れ目の状態と方向・風化の程度など）

・調査の内容

- a) 転石や岩塊の大きさ（とくに長軸方向）や形状（長柱状・扁平状など）を詳細に計測した。
- b) 転石や岩塊の斜面への坐り具合と安定度を目視で観察し、その状態を記載した。

・調査結果のまとめ

- a) 30cm以上の大きさの転石を選び、転石台帳を作成した。その数は300個を超えた。
- b) 転石分布および現況安定度図（縮尺 1:500）を作成した。

転石は平面に投影した形状をスケッチし、平面図に記入した。転石の現況安定度は、斜面への坐り具合や地上の露出部分などの不安定性を区分し、安定度をA～Cにランク分けした。

・考察および検討

土盛りと転石現況安定度の関係を検討し、地表変位や転石の倒壊および移動が予測される範囲を示した斜面影響予測図を作成した。

・問題点と今後の課題

- a) トンネル掘削の実際の発破振動と転石の変位の関係が不明である。
- b) 発破振動と転石変位のシュミレーションの実施。

この仕事は、現地調査に一週間、まとめに二週間を要した。調査は厳冬期で寒風が吹き荒れて大変な思いをしたが、眼前に展開する富士山の素晴らしい景観が印象的であった。

橋梁深礎杭施工による源泉（温泉）への影響予測調査

源泉（温泉）に近接して橋梁が建設されることになり、深礎杭の施工による源泉への影響（枯湯・湯温・湧水量など）が問題となった。

・調査の内容

- a) 地表地質調査（縮尺 1:1000）

- b) ボーリング 66～130 コアボーリング

- c) 連続揚水試験 揚水井（130, 深度23m）7日間連続揚水（ $Q = 8\text{ l/min}$ ）観測井（66, 深度20m）

- d) 湯量・湯温・PH・電気伝導度、電気検層・温度検層および気温測定
測定箇所：揚水井、源泉、観測井、沢源泉と揚水井の水平距離43m

・結果

- i) $Q = 8\text{ l/min}$ の連続揚水量では、源泉の湯温に若干の変化（湯温低下）がみられた。

- ii) 源泉の湯量には有意な変化はみられなかった。

・考察および検討

- i) 源泉の湯温低下は、連続揚水（ $Q = 8\text{ l/min}$ ）によるものではなく季節変動（自然）によるものと判断した。
- ii) $Q = 8\text{ l/min}$ の連続揚水の条件下では、深礎杭施工による源泉（温泉）への影響はないものと判断した。

・問題点

- i) $Q = 8\text{ l/min}$ の連続揚水量は、揚水井の限界揚水量である。したがって、これ以上の揚水は不可能なため、検討結果はあくまで $Q = 8\text{ l/min}$ の条件付きである。 $Q = 8\text{ l/min}$ を越えた場合の影響の有無は不明である。
- ii) 調査は冬期に実施したが、これ以外の季節ではどうなのかは不明である。

- iii) 予想もしていない所に段丘堆積物の分布が確認された（写真6）。

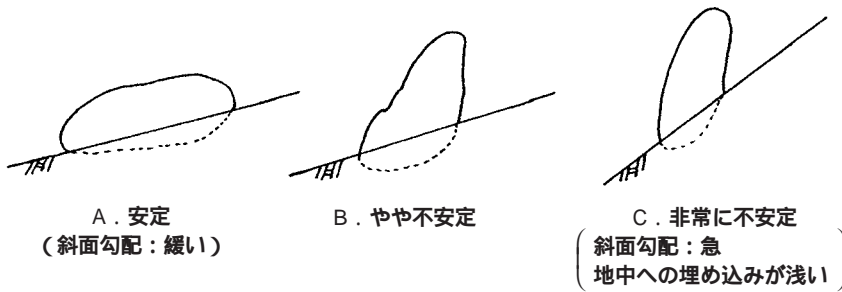
この調査も厳冬期におこなった。現場は北関東の奥深い山地であるため、残雪が1mを越えており現場の作業は困難を極めた。また、測定は2時間間隔、揚水ポンプを動かす発電機の燃料補給は4時間間隔なために、測定および作業は深夜にも及んだ。真夜中に鹿が出てきて、暗闇のなかに光る眼が不気味であった。

9. 学術ボーリング

1980年から1997年まで、下記の研究課題の一環としてボーリング（コアボーリング）をおこなった。

切土法面の雨水浸透に関する研究
対象法面：第四紀更新世の段丘堆積物からなる切土法面

層相解析、土壌水分計の埋設など
第四紀完新世の海面変動および古環境の変遷に関する研究
調査：コアボーリング（86）沖積



第1図．転石の斜面への座り具合と安定度．



写真 6．段丘堆積物
山間部の急斜面に貼り付くように分布する．
写真中央～下方は基盤の閃緑岩．

低地

層相解析，微化石（有孔虫・珪藻・介形虫・花粉）分析，¹⁴C年代測定

二疊紀-三疊紀境界部石灰岩の古生物学・堆積学的研究

調査：コアボーリング（86），山地

ボーリングコアの層相・組織の肉眼観察

の調査では，コアの観察と記載内容が重要となった。沖積低地のボーリングでは，従来の柱状図の様式を改めて調査内容と目的に合致した観察項目を並記した柱状図を作成した（第1表）。

a) 暗灰～黒色 海成粘土
淡緑灰色 淡水成粘土（梅沢，1986, 1987）

b) 粘土・シルトのコアを両手で持って二つ折りにした時の破断面の形状
・平滑な場合：淡水成環境の堆積物 鋭敏比がやや大きい
・凹凸がある場合：海成（閉塞された環境）の堆積物 鋭敏比が小さい

なお，上記(a)(b)の事実は珪藻や有孔虫分析の結果から裏付けされている（米倉ほか，1985）。

沖積層のコアを連続的に観察する機会は極めて少ない。しかし，上記のように簡単な記載内容でも注意してコアを観察すれば，粘土の工学的性質がわかり地盤の性質や掘削による地盤の変形・挙動などの検討の際に大いに参考になるのである。

10. 活断層調査

三浦半島に存在する活断層の調査（ボーリング・地表踏査・トレンチ調査）に従事した。地震防災の一環として実施される活断層調査で求められるものは，活断層の最新活動時期 活動間隔である。この答えはトレンチ調査をおこなうことで得

られる。調査の内容は壁面の地層を詳細に観察し，地層の層相・層序，堆積物の変形の状態，断層の有無と詳細な性状などを把握することである。

トレンチ壁面を観察するにあたって，もっとも基本的なことは次のとおりである。

断層かそうでないか

地震イベントの認定と解釈

の場合，断層に似ているがそうでない例をあげると，イ) 地すべり ロ) 堆積層の滑動 ハ) 圧密の差によるズレ ニ) 堆積時の“面なし断層” ホ) チャンネル構造（削り込み）などである。の場合，イベントの認定基準はイ) 地層の切断 ロ) 地震による液状化 ハ) 断層によって相対的に低下した側で厚い堆積物などである。

しかし，実際のトレンチ壁面の観察では，を識別・解釈することは非常に難しいケースが多く，現場では大変な苦勞を伴ったが，興味深い仕事であった。

11. 30年を振り返って

応用地質の仕事に関わって30年が経過した。今まで重大な事故や怪けに遇わず，よくここまでやってこれたと思う。30年を振り返って，思うことは次のとおりである。

工期に間に合わせるために，100時間を超える残業と連夜の徹夜を数えきれないほど経験してきた。知人のなかには，それが原因で過労死した人もいる。

そのために，自分の体と家庭を犠牲にしてきた。家族には本当に申し訳ないと思っている。

地質の仕事はなんといっても，a) 足で稼ぐこと b) 手作りであることが基本であるから，今後もこの考えを改めるつもりはまったくない。

今まで，なんとか仕事をやってこれたのは自分ひとりの努力ではない。同業の仲間・知人の方々のアドバイスや協力・激励があったからこそ，困難な

仕事をなんとか乗り越えられたのである。自分が悩んだり困っているときに，いろいろ助けていただいた方々には感謝の気持ちで一杯です。

地質技術者にとって必要なことは，「現場で汗をかけ！血を湧かせ！そして涙を流せ！」です。

企業（会社）でいちばん大切なのは，人との協力・つながりである。だから，私のモットーは「社会の基本は共同と連帯である」である。これがすべてである。

地質技術者（コンサルタント）の仕事は，医者が患者を診断し適切な処置をして傷や病気を直し，命を助けることを任務としていることに似ている。医者は対象が人間であるが，コンサルタントの対象は私たちが住むこの地球なのである。だから，コンサルタントの社会的役割はきわめて大きく，重要な仕事に携わっているのである。

文 献

- 梅沢俊一，1986，コア観察による沖積層の特徴と工学的性質。日本地質学会第93年学术大会演旨，507。
- 梅沢俊一，1987，ボーリングコアの肉眼観察による沖積層の特徴（その2）。日本地質学会第94年学术大会演旨，544。
- 梅沢俊一・田中竹延・蟹江康光・柳田 誠，1993，三浦半島北部で発見された更新世中期に滑動した地すべり性堆積物。日本地質学会第100年学术大会演旨，314。
- 蟹江康光・三浦半島地盤研究会・柳田 誠・田中竹延，1996，三浦層群返子層の分布地域で滑動した層面すべり。地質雑，102，762-764。
- 米倉伸之・池田安隆・鹿島 薫・松原彰子，1985，駿河湾周辺の海岸低地における沖積層掘削調査「最終氷期以降の自然環境の変動」昭和58，59年度東京大学特定研究経費成果報告書，東京大学理学部，35-80。

嶋崎吉彦

前回に引き続き、混同しやすい言葉について述べる。

Beside と besides

この両語は同源であり非常に似ているが、使い方は全く異なる。混同されることが珍しくないようなので、此処に述べる。“Beside”は「...のそばに、かたわらに」などを意味する比較的単純な言葉である。例えば “There was an old mill beside the river.” 一方 “besides” は「...に加えて、その上」「...以外に」つまり “in addition to” ならびに “except” に近い両方の意味を持つ。“It is rather late to go out, besides, I am tired.” 多少曖昧になるおそれがあるので、正確な科学的文章には、“in addition to” を好み “besides” を避ける人もいるようである。

Can, could と may, might

我々にはこれらの語は、まことに使い方が判りにくい言葉である。まず “Suggestions” に出ている例文を以下借用する。

- “You may take your annual leave whenever you wish.” (許可)
- “You cannot take your annual leave now.” (不許可, “can” が多く使われているが、この場合 “may” の方が歴史的には正しい)
- “A stream in quasi-equilibrium can form a braided channel.” (能力)
- “I can do it.” (人間の実行する能力)
- “The mineral may be bertrandite.” (現在の可能性)
- “The mineral can be bertrandite.” (“may” と同じ、但しより強い表現)
- “The mineral might be bertrandite.” (“may” と同じ、但しより弱い表現)
- “Your map may have been mislaid.” (過去の可能性)
- “Your map might have been mislaid.” (過去の弱い可能性)
- “We can expect snow in the San Juans in September.” (“may” より強い可能性)
- “That cannot be zeunerite.” (“may not” より遙かに強い否定)
- “I would have denied it if I could.” (“if I had been able.” 過去の能力)

“Could” と “might” はそれぞれ “can” と “may” の過去形であるが、これら四語は仮定法の助動詞として、上の例文のように使われる。また “could” は可能性を表わして使われることは “may, can, might” に比べて少ない。

Center, middle, と midst

この三語は、地学で非常に頻りに使う表現である。しかし我々は余り考えずに漠然と使っていることが多いのではなからうか、特に “center” と “middle” は地学関連の文献によく出てくる言葉で、区別なく使っていることが多い。まず “center” は物体・地域・その他の真の中心または、それに非常に近い「点」を指す。一方 “middle” は「点」ではなく “center” 周辺の「空間」を指し、また地質時代の “early・middle・late” のように、ある幅の時間帯を意味することもある。“Midst” は “middle” に似ているが、多くの場合周囲に人間や物体などで囲まれている状態を示す。以上の表現は注意して使うべきであろう。

Continual と continuous

小さな辞書には、この両語を同意語としてあるものがあるが、これは間違いである。まず “continual” は時間だけに用い、継続的または比較的短い間隔で断続的に起き、終わりが見えず永続するようと思われる状態を表す。“Continuous” は時間・空間双方に用いる。そして時間的あるいは空間的に限定された範囲の中で、途切れることなく連続している状態を示す。

Fewer, less と lesser

“Fewer” と “less” はしばしば混同されるが、この両語は意味が異なる。“Fewer” は勿論 “few” の比較級であるから、個数の違いを示す。例えば、“This rock contains fewer crystals of pyrite than the other.” 一方 “less” は度量衡、価値などの少ない状況を示す。例えば、“This water contains less sodium than that one.” したがって “less than ten liters” であるが、“fewer than ten apples” となる。“Lesser” は “less” の比較級であることはいうまでもないが、重要性や

意義が比較の対象より低いことを示すのに使うことが多い。

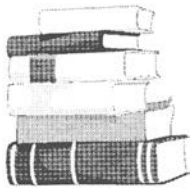
Imply, infer と estimate

“Imply” は日本の地学屋はあまり使わない言葉であるが、英語圏人は比較的良く使う表現で、“infer” としばしば混同するようである。一方日本の我々は、この “infer” と “estimate” を混同する。以下これについて述べる。“Imply” は「間接的にいう」「ヒントする」「示唆する」という意味である。“His silence often implies approval.” などは例文である。“Infer” は、「推理、推論、推定」つまりヒント、根拠、や事実などをもとに “reasoning” によって結論を導くことであり、我々もよく使う。例えば、“Thus the heat for thermal springs in Nepal is inferred to be transported by deeply circulating ground water along faults and fractures associated with the Main Central Thrust and Main Boundary Thrust.” あるいは “From the mode of occurrence, size, and quality, the economic value of Siwalik coal have been inferred to be small or negligible in this area.” また “estimate” は確かに “infer” と同じように「推定」と訳すことがあるが、これは数値に関する「推定、算出、概算、見積もり、など」であって、例えば地下構造のような地学的推論に使う表現ではない。例文 “I estimated that the trip would take five hours.” “The estimated reserves are 2.5 million tons.”

In と within

“In” は場所などを示す前置詞であることは此処に言うまでもないが、また一定の時間、距離、量などの終了・限界点を示す。例えば “He will return in a week.” は “at the end of a week” 「一週間後に帰る。」という意味である。一方 “within” は “He will return within a week.”, “in less than a week” 「一週間以内(一週間経たない内に)に帰る。」のように、一定値の範囲内を意味する。

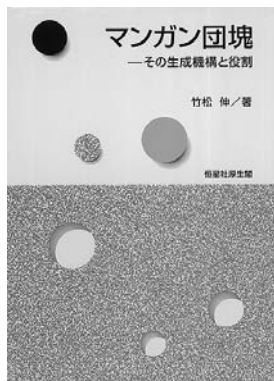
次回で地学でよく使う表現は終了したいと思っている。



紹介

マンガン団塊 その生成機構と役割

竹松 伸著



〔恒星社厚生閣 1998年発行, 188ページ, 定価3,200円+税 ISBN4-7699-0864-4〕

本書は、著者が日本海洋学会の機関誌「海の研究」に1994年から1996年にかけて、4編にわたって発表した総説に加筆・修正したものである。下の、主要目次をご覧ください。本書の大凡の構造が理解できると思う。

目次

- 第1章 形態、内部構造および分布
- 第2章 鉱物組成
- 第3章 化学組成
- 第4章 東海大学海洋科学博物館地下水給水系にみるマンガン酸化物
- 第5章 生成機構への生物の関与
- 第6章 海洋環境における鉄・マンガン酸化物の役割

著者は、前書き(はじめに)の中で、マンガン団塊の研究は我が国においても一段落しているが、適当な日本語の解説書が見当たらないことや、マンガン団塊やクラストの起源に関して諸説紛々であることを、本書執筆の動機とされている。しかし、私が一読したところ、これは決して教養的な解説書ではない、少なくともマンガン酸化物の鉱物学や化学について初歩的な見識しか持ち合わせていない私には理解できない箇所もあるし、マンガン団塊の産状を海底の写真や船上のサンプルとして観察したことのない読者には、「第1章 形態、内部構造および分布」のある部分も、極めて難解だろうと思われる。そのような意

味で、本書はまさに専門書であり、著者のこの分野での研究の集大成だと思う。幸いにして、著者は各章の末尾にまとめの節を設けているので、それを一読してから部分的に本文に戻るのが、本書の正統的な読み方といえそう。

マンガン団塊の生成については、いくつかの謎があり、その解明も著者の意図するところであった。しかし、マンガン団塊は一般的に回転しながら成長するのか、あるいは、周囲の泥質堆積物の堆積速度の方が団塊の成長速度より桁違いに大きいのに、団塊が埋没してしまわないのは何故か、などの謎は、その解答を実証できるものではないので、理論的な整理がつかない限り(だから謎として残っているのだが)、永遠に残るのではないだろうか。謎というのは、適切ではないかもしれないが、「第5章 生成機構への生物の関与」で述べられた、底生の有孔虫やバクテリアの役割に関するまとめが、本書の中でもっとも歯切れのよいものとの印象を受けた。その他に2, 3気づいたことを述べてみたい。

第1章のまとめで、マンガン団塊の年輪構造が普遍的なものであると受けとれる記述があり、年輪が、団塊を覆う堆積物の周期的な除去によって形成されるとしている。しかし、堆積物の被覆度の変化、あるいは、海底付近の流れの強さや、酸化還元電位の変化などには、いろいろな段階があるはずで、海水起源で鉄濃度の高いMn酸化物と、続成起源でマンガン濃度の高いMn酸化物が交互に成長して年輪をつくるというような単純な図式で一般化されるものではないと思う。

第3章のまとめで、海山産のクラストへの白金の濃集について、白金濃度の高いクラストが酸素極小層に相当する深さに存在することを還元的な環境での濃縮に結びつける一方で、コバルトやセリウムの酸化的濃縮に対してそれが不自然であると主張している。しかし、白金濃度の高いクラストは、古い時代(たしか800万年より古い)に限られ、コバルトとは逆の関係にあるといわれているが、現在の酸素極小層の深度との関係を単純に適用する必要はないのではないかと思う。

第4章のまとめで、団塊およびクラスト中の遷移元素濃度は、鉱物によって支配されているという仮説は、適当でない。との、記述がある。これは、本文との関連でいえば、10Aと7AにX線回折のピークを持つ2種類のmanganatesの間の話である。一方、通常、マンガン団塊に関連して化学組成との関係が議論される鉱物種は、海水起源の主要鉱物であるMnO₂と続成起源の主要鉱物であるbuseriteであり、私の誤解かもしれないが、少し視点の違う問題ではないかと感じた。

最後に、第6章のまとめで、深海堆積物と沿岸堆積物の化学組成の違い(とくに微量元素濃度)を論じ、海底堆積物の化学組成は、頁岩(すなわち沿岸堆積物)の化学組成をもったアルミノケイ酸塩とその堆積物と共存する鉄・マンガン団塊の化学組成をもった鉄

マンガン酸化物との混合物として表すことができる。と、している。しかし、深海堆積物には、時としてFeスメクタイトが含まれ、そのような時には粘土鉱物自体が陸源のアルミノケイ酸塩では代表されない。また、Feスメクタイトは生物起源のシリカを母材の一部にして形成される可能性があり、火山岩の熱水変質による同様の鉱物の生成もあり得る。そのようなわけで、著者の掲げる図式がモデルとして成立するかどうか吟味すべきであると思う。

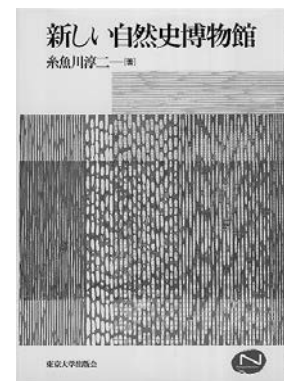
私自身が、上記の問題のいくつかに深い興味をもって関連する研究を行ったこともあり、各章のまとめから入ったものの、本文をかなり詳しく読破する気力を失わなかった。それは、とりもなおさず本書が読者を引き付けるなにかをもっていることの裏返しでもあろう。

少し批判的なことを書きすぎたかもしれないが、著者の長年にわたるこの分野の研究の実績と適切なまとめのご努力に敬意を表し、「マンガン団塊」という特異な自然の産物から我々がいかに多くのことを学んできたかをするために、多くの方が本書をひもとかれることをお勧めします。

(中尾征三)

新しい自然史博物館

糸魚川淳二著



〔東京大学出版会 1999年6月発行, A5判, 299ページ, 定価3,800円+税 ISBN4-13-060175〕

評者の大学では数年前から理科系の学生を対象に学芸員資格取得コースの講義を開講しているが、受講生は毎年100名を上回り、年々増え続ける傾向にある。そこで、学生になぜこのコースを受講するのか聞いてみた。もちろん資格が取れる、ということも大きな魅力になっているようだが、ある工科大の学生が言うには、「高校時代にちょっと理科や数学ができたばかりに先生から今の学科を勧められて入ってしまった。本当は化石を研究して古生物学者になりたかった」そうだ。博

博物館実習ではじめて化石に触れることができるとてもうれしい、とも言っていた。半分はお世辞だとしても、なにか心にひっかかるものがある。もちろん、彼らの考えている化石の研究と学問としての古生物学とはかなりの隔りがある。まして、それを地球規模の環境問題などへと繋げるには、まだまだ道のりが遠い気がする。しかし、自然や地球に対する潜在的な関心は重要であり、決してその芽をつむべきではない。また、一般の市民とても同様で、コンピュータでコントロールされるバーチャルな世界に少々飽きてきて、本物の自然に触れてみたい、自然のことをもっと知りたい、という素朴な願いが以前にも増して強くなってきたように思える。

今、取り組まなければならない課題は、こうしたモチベーションをいかに具体化し、自然と人間との共生にむけて新しい自然観を構築していくか、ということであろう。本書は、こうした課題について博物館が果たすべき役割を明快に示すとともに、そのためにどのような博物館が必要なのか、あるいは博物館がどのように変わらなければならないかを提言している。

本書は著者が1993年に著した「日本の自然史博物館」(東京大学出版会)の続編でもあるが、この間の学界や社会情勢の変化もふまえて前著以上に著者の豊富な経験に裏づけされた斬新な考えが随所に盛り込まれている。

まず、第1章では自然史研究と自然史博物館の歴史を概観し、多くのデータを示しながら最近の博物館事情について述べている。そして、かつて個別の現象記載をおもな仕事としていたナチュラルヒストリー(博物学)が、

自然の多様性を統合的な手法によって研究する「自然史学」として今やよみがえったことを強調し、それを行うセンターとして自然史博物館を位置づけている。

第2章ではさらに詳しく自然史博物館の「ひと」、「もの」、「建物」についての問題を現状分析し、学芸員の位置づけや博物館が行う研究の柱としての自然史学に言及している。また、展示を中心に博物館のあり方を、見る側から「楽しむ」レベル、「理解する」レベル、「考える」レベルの3段階に分けることを提案している。

第3章では科学館や動植物園、ピジターセンター等の類似施設との共通点と相違点を述べ、自然史博物館の役割をより鮮明に提示している。

第4章は海外の博物館紹介である。前著ではほとんど触れられていなかっただけに読者にとっては新鮮であり、日本の自然史博物館を考える上で示唆的な内容を含んでいる。とくに、ヨーロッパの博物館に共通して言える「伝統」と「革新」という「両極性の共存」、アメリカのそれに見られる多様性とユニークさ等、博物館にもそれぞれの国の歴史やポリシーが反映していることが判る。

第5章は新しい型の自然史博物館づくりについて言及している。とくに、村おこし・町おこし等に関連して各地で展開されている日本型のエコミュージアムづくりの運動が試行錯誤の段階にあることから、著者の鋭い現状分析と問題点の指摘は今後おおいに参考になるものと思われる。

そして最後の第6章が自然史博物館の改革について述べており、本書の核心部分といえる。まず、いくつかの自然史博物館について

施設面積や職員数、予算、展示内容とその方法、等々について、その博物館の目的に見合ったものであるか、著者の目を通してチェックされる。また、理想を掲げて出発したものの計画倒れになってしまった、あるいは挫折しそうな状態にある博物館について、なぜそうなったのか、分析している。多くの場合、それは博物館を抱える自治体の首長の交代や気変わり、議会の都合等によるとのことであり、評者の周りを見てやはりそうか、という感じがした。

では、誰でもその必要性について納得でき、魅力ある博物館をつくるにはどうしたらよいか?著者はまず博物館の評価・点検の必要性を説き、具体的に評価基準を示している。次にいくつかの活気がある博物館の事例をあげ、その理由を述べている。最後に、第2章で言及した展示から見た博物館の3段階論をさらに発展させ、「もの」「楽しみ」型のA類、「展示」「理解」型のB類、「包括」「思考」型のC類にわけて自然史博物館の進化論を展開している。著者の長年の古生物学研究からの発想であろうが、博物館を「包括的」視点からとらえる上で重要な指摘である。

本書は博物館関係者はもちろん、博物館をかかえる自治体のしかるべき方にも是非、読んでいただきたい本である。また、博物館に対する興味の有無に関わらず、この本の巻末に掲載されているチェックリストを参考に博物館の実態とあるべき姿を考えていただきたいと思う。そうすることが、何よりもまず日本の自然史博物館の質の向上と、新しい自然観に裏づけされた自然史学の発展に寄与することになると思うからである。

(高安克己)



ご案内

国会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します。

自然史学会連合・日本学術会議50周年記念・合同シンポジウム

「博物館の21世紀 ナチュラルヒストリーの未来」

主催：自然史学会連合・日本学術会議ミュージアム小委員会

後援：国立科学博物館

日時：10月16日(土)午後1時から4時30分

会場：国立科学博物館新宿分館・研修館4階講堂

テーマ：間もなく訪れる21世紀に向けて、ナチュラルヒストリーと博物館の未来像を模索します。博物館、標本、研究者、アカ

デミズムと行政、学問と社会教育など、多様な視点から、現状の認識と将来への課題を考えます。

プログラム

13:10~

国立科学博物館を考える

甲能直樹(国立科学博物館地学研究部)

13:35~

大学博物館とは何か?

林良博(東京大学農学生命科学研究科)

14:00~

21世紀の大学博物館と自然史標本

本川雅治(京都大学総合博物館)

14:25~

休憩

14:45~

地域博物館では、一体何を研究しているのだろうか?

山崎晃司(茨城県自然博物館)

15:10~

自然史科学における遺伝子と画像

森脇和郎(総合研究大学院大学)・今井弘民(国立遺伝学研究所)・鶴川義

弘(宮城教育大学)

15:35~

博物館での自然史学習 ハンズオン思潮を基本に

濱田隆士(神奈川県立生命の星・地球博物館)

16:00~

総合討論

参加申込みは不要です

問い合わせ先:

自然史学会連合事務局

遠藤秀紀・松浦啓一・加瀬友喜・馬場悠男・森田利仁

〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館動物研究部

電話 03-3364-2311, 03-3364-7127

Fax 03-3364-7104

E-mail: endo@kahaku.go.jp

地質調査所編集による 地質ニュース5, 6月号が, 地中レーダ (Ground Penetrating Radar) による調査・研究例を特集していますのでご案内いたします。目次は以下のとおりです。

(<http://www.gsj.go.jp/PSV/Cnews/CnewsJP.html>でもご覧いただけます)

1999年5月号 特集: GPR (地中レーダ) [1]
GPRを用いた地下イメージング研究-特集号概略 (倉本真一)/土木地質調査におけるGPRの適用例 (笠井弘幸ほか)/考古学および雪氷学における地中レーダ探査

法 (酒井英男ほか)/レーダ探査による河床部探査実験 (利岡徹馬)/ボアホールレーダ (佐藤源之)/表層地盤構造の再現性 高分解能S波反射法探査と地下レーダ探査の比較 (稲崎富士ほか)/ステップ式連続波レーダ探査装置を用いた地中レーダ探査 (鈴木敬一ほか)/GPRにおけるデータ処理法 (西山英一郎ほか)/岩石の種類・間隙率・含水比と電気特性の関係 (鈴木敬一ほか)

1999年6月号 特集: GPR (地中レーダ) [2]
以下の3篇が掲載されています。

GPRと反射法地震探査を併用した活断層調査 (阿部信太郎ほか)/地中レーダによる神戸市街の埋もれた活断層の調査 (宮田隆夫)/GPRを用いた3次元反射法による活断層調査 (阿部信太郎)

地質ニュース (発行: 実業公報社, 電話 03-3265-0951) は, 東京の霞が関政府刊行物サービスセンターおよびつくば市の友朋堂書店本店に常備してあるほか, 最寄りの書店でも注文により購入 (定価785円) できます。

各賞・研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします。推薦ご希望の方は締切日半月前までに, 執行委員会までお申し込み下さい。

平成12年度笹川科学研究助成募集要項

趣旨: 「笹川科学研究助成」は, 21世紀に向かって真に質の高い社会の実現のため萌芽性, 新規性および独創性のある内容をもった研究を奨励し, 振興することを主旨とし, 他からの研究助成が受け難い研究を全国的に掘り起こすとともに, 意欲に満ちた優れた若手研究者の育成ならびにその研究に対する助成を目的とします。

対象となる領域ならびに申請区分: 人文学, 社会科学および自然科学 (医学を除く), またはそれらの境界領域に関する研究。な

お, 本年度は上記領域を次の申請区分に分けます。

- 1) 一般科学研究
- 2) 学芸員・図書館司書が行う研究
- 3) 海洋・船舶科学研究

研究計画および助成額: 研究計画は, 単年度 (平成12年4月1日から平成13年2月10日まで) 内で研究が終了し, 成果をとりまとめられるものとします。

助成額は, 1研究課題あたり年間100万円を限度とします。

申請者の資格: 平成12年4月1日, 現在35才以下の者で, 次の条件を満たす者。ただし, 大学院生, 学芸員および図書館司書などにあつては, その限りではありません。

- 1) 平成12年4月1日現在, 大学院修士課程ならびに博士 (前期・後期) 課程に在籍する者および進学予定者
- 2) 大学院生と同等以上の能力を有する者
- 3) 大学, 研究所, 研究機関, 教育機関等において研究活動に従事する者
- 4) 博物館 (含む類似施設) で学芸業務

に従事している学芸員等および図書館で情報処理等に関し, 研究活動に従事する司書等。

申請の方法: 所定の「平成12年度笹川科学研究助成交付申請書」を用いて申請。

募集期間: 平成11年9月1日 (水) から平成11年10月29日 (金) 必着。

決定通知: 助成の決定は, 平成12年4月中に通知します。

助成の対象となる研究費: 平成12年4月1日から平成13年2月10日まで, 研究の実施に直接必要な経費とします。

交付方法: 本研究助成金の交付は, 個人名義あてとなります。

連絡先: 応募方法 (申請書の取り寄せなど) などについては, 下記へご連絡ください。財団法人 日本科学協会 笹川科学研究助成係

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-11-2

日本財団第2ビル3階

電話 03-3502-1931 Fax 03-3580-8157

E-mail: LDG01360@nifty.ne.jp

公募

教官公募等の求人ニュース原稿につきましては, 採用結果をお知らせいただけますようお願い致します。



北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻の教官公募

職種・人員: 地球惑星物質圏科学講座 助教授 1名

専攻分野: 地球化学またはそれに関連する諸分野。今後の新しい分野の開拓に意欲的な方を歓迎します。

着任予定時期: 2000年4月1日

応募書類:

イ) 履歴書 (内外の学会活動, 受賞歴, 参加しているプロジェクト研究歴, 各種研究

費受領歴, 学位審査履歴 (主査・副査のほか実質的指導を含む), 非常勤講師の経歴, 公的機関の委員の履歴なども記載すること)

ロ) これまでの研究経過 (2,000字程度)

ハ) 研究業績目録 (和文のものは和文で表記すること)

- A. 査読のある原著論文
- B. 査読なし論文, 総説など
- C. 著書
- D. 解説, 報告などその他の出版物で特に参考になるもの

ニ) 主な原著論文別刷または著書 10篇 (複写可)

ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負 (2,000字程度)

応募締め切り: 1999年11月1日 (月) 必着
* 封筒の表に「教官公募関係」と明示し, 簡易書留にて郵送すること。

書類の送付及び問い合わせ先:

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学

専攻 岡田尚武

電話 011-706-3537 (ダイヤル・イン)

Fax 011-746-0394

電子メール: oka@cosmos.sci.hokudai.ac.jp

静岡大学教育学部の地学担当教官公募

職名・人員: 助教授または講師・1名

所属講座: 理科教育講座

専攻分野: 地質古生物学

担当授業科目: 地学実験, 地質学野外実習, 地球環境論, 地球史等 (学部) 地学特論等 (大学院)

応募資格:

- (1) 学歴 大学院博士課程修了 (見込みを含む) またはこれと同等の学力を有する者
- (2) 年齢 35歳以下 (平成12年4月1日現在)
- (3) 地質学を基礎とした古生物学を専門とし, 地質学野外指導ができる者

(4) その他 静岡市または静岡市周辺地域に居住できる者

提出書類:

- (1) 履歴書(市販の用紙可. なお, MS-DOS Text ファイルも添付すること.)
- (2) 業績一覧表(別紙書式により記載のこと. なお, MS-DOS Text ファイルも添付すること.)
- (3) 著書・論文等の業績については, 現物またはコピーを添付のこと. また論文については, 外部審査のあるもの(学会誌・論文集など)とないもの(紀要・商業誌など)を分類し, 表紙に明記すること.
- (4) 教育・研究計画書(2,000字以内. 今後の研究と教育学部の教育についての所見を述べて下さい.)
- (5) 卒業・修了証明書
- (6) 成績証明書(大学院のものに限る)
- (7) 写真(上半身, 脱帽, 名刺判)

選考方法: 静岡大学教育学部教員人事内規の定めに基づき審査の上, 教授会で決定する.

採用予定日: 平成12年4月1日

応募締切日: 平成11年10月29日(必着)

応募書類の送付先: 〒422-8529 静岡市大谷836 静岡大学教育学部長 宛

「地学担当教官応募書類在中」と朱書きで表記し, 書留郵便または郵便小包(ゆうパック)で送付のこと.

問い合わせ先:

静岡大学教育学部地学教室 藤吉 瞭

電話 054-238-4634(ダイヤルイン)

Fax 054-238-4640

E-mail: edafuji@ipc.shizuoka.ac.jp

その他:

- (1) 必要に応じて面接を行う場合があります. ただし, その際の旅費は自己負担となります.
- (2) 審査結果については, 選考が終了次第本人宛て通知いたします.

千葉大学教官の公募

本年4月に学内共同教育研究施設としての千葉大学海洋バイオシステム研究センター(本部: 千葉県安房郡天津小湊町内浦1)が発足しました. この新組織のセンターでは, 以下の要領で教員を募集することになりました. 関係各位への周知方をよろしく願いたします. 古海洋バイオシステム研究分野は, 古生物系とそうでない分野とで構成されています. 本人事は後者に関わる人事です. なお, この組織は平成11年度から10年間の時限の

組織です.

担当分野: 千葉大学海洋バイオシステム研究センター・古海洋バイオシステム研究分野
職 種: 助教授 1名

研究分野: 南房総およびその周辺海域におけるテクトニクス

上記の研究を行っている方, あるいは今後行おうという意欲のある方, そして千葉大学の関連分野と協力して研究を進める方.

応募資格: 博士の学位を持つ45才程度までの方.

着任時期: 決定後なるべく早い時期

勤務地: 千葉県安房郡天津小湊町内浦1,

千葉大学海洋バイオシステム研究センター
応募書類:

- a) 履歴書(様式1)
- b) 研究業績調書(様式2)
様式1, 2はホームページ(http://www-es.s.chiba-u.ac.jp/koubo_990802.html)を参照, または問い合わせてください.
- c) 主要な論文の別刷り, 或いはそのコピー
- d) 推薦状
- e) これまでの教育・研究実績(科学研究費・各種助成金等の受け入れ実績があれば, それを含めて下さい)と千葉大学赴任後の教育・研究の計画・抱負などを具体的に詳しくA4用紙3枚程度に記述して下さい.

応募締切: 1999年10月15日(金)必着

書類送付先: 〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学総務部研究協力課研究支援室御中
応募書類は必ず書留郵便にて送付し, 封筒に「古海洋バイオシステム研究分野応募書類」と朱筆して下さい.

問い合わせ先:

〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学理学部 気付 海洋バイオシステム研究センター 山口寿之

電話 043-290-2832 Fax 043-290-2859

E-mail: tyamaguc@earth.s.chiba-u.ac.jp

助教授着任時の組織および教員名:

現海洋バイオシステム研究分野 宮崎教授
菊池助教授 平野助手
古海洋バイオシステム研究分野 山口教授
(古生物系)(本人事) 助教授 亀尾助手
(古生物系)

財団法人三瓶フィールドミュージアム財団 平成12年度職員採用について

出願受付期間: 平成11年8月1日(日)~9月30日(木)

受付時間は, 午前9時30分~午後5時まで, 郵送は締め切り日消印であっても, 後日着は不可となります.

採用予定人員および職務内容: 1名

財団における業務のうち, 地学に関連する業務など.

受験資格:

- 1) 地学に精通している者(地質を中心とし, 地学系の他分野にも精通する者)
- 2) 昭和25年4月2日から昭和53年4月1日までに生まれた者(平成12年4月1日現在で満22歳から満50歳までの者)
- 3) 学芸員資格を有する者または所定の期間までに当該資格を取得する見込みのある者

試験の日時, 試験場および合格発表:

第1次試験: 10月24日(日) 受付時間9:20~9:40 試験期間 10:00~15:30 大田市民会館 合格発表 11月5日(金)

第2次試験: 11月中旬に実施予定(第一次試験合格通知で連絡) 試験2日後に発表

試験種目および内容:

第1次試験: 一般教養試験 財団職員として必要な一般的知識および知能について大学卒業程度の筆記試験を行います; 適性検査 職務遂行に必要な適性検査; 専門論文試験 専門知識および能力についてのテーマに基づいた論文試験

第2次試験(面接): 専門試験 専門的知識および能力についての口述試験; 人物試験 職務遂行能力などを見る目的での個別面接試験

受験手続き: 所定用紙にて, 財団事務局(三瓶自然館)に提出. 郵送する場合は封筒表に「職員申込」と朱書きし, 書留送付.

合格から採用まで:

- 1) 合格者は平成12年4月1日に採用予定.
- 2) 採用後1年間, 島根県庁環境生活部景観自然課(松江市)に研修勤務.
- 3) 勤務条件は財団規程に基づく(給与等は概ね島根県職員に準ずる.)

問い合わせ先: 財団法人三瓶フィールドミュージアム財団

〒694-0003 大田市三瓶町多根1121番8

島根県立三瓶自然館 職員採用係

担当: 龍・石田

電話 08548-6-0216



報告

本会委員会以外の研究会・委員会等よりのお知らせを掲載します。

日本学術会議第17期第6回 鉱床学専門委員会議事録

日時：1999年6月15日（火）15：45～17：00

場所：日本学術会議第4部会議室（6階）

出席者：島崎英彦（委員長）、石渡 明、上野宏共、渡辺 洵、松枝大治（以上5名、欠席：溝田忠人、中嶋 悟、千葉 仁、根建心員）

*：鉱物学研究連絡委員会・鉱床学専門委員会合同会議に引き続いて、鉱床学専門委員会が行われた。

議事

1) 対外報告（案）について

これまで検討を行ってきた対外報告（案）「我が国における鉱床学の研究・教育の推進について」がほぼ完成した。多少の修正を施して出来るだけ早急に完成し、研連報告書として提出することになった。また、関係諸学

会誌にも本報告書を掲載して貰うこととした。なお、先行して行われた鉱物学研究連絡委員会・鉱床学専門委員会合同委員会で、本報告書を連名で提出することが了解されている。

諸報告

1) 科学研究費について

これまで文部省が行ってきた科研費審査業務を、本年度から日本学術振興会へ一部移管することに伴い、一段・二段審査委員数がほぼ倍増することになった。学術振興会では、今後審査委員の推薦は学会からではなく、日本学術会議の研究連絡委員会より推薦して欲しいとしている。この件に関して、本年度は6月29日開催予定の五学会連合の会議で調整し、世話役の研連をそこで決定する事になる見通しである。なお、出来るだけ従来のやり方をこわさないようにとの申し入れは行っている。

2) 理学データベース・ネットワーク構築について

この件に関しては、直前に行われた合同会議で配付された資料を基に意見交換を行った。主な意見等は以下のようである。

・各学会が、刊行雑誌の初刊からの発表論文名・キーワード等を整理してデータベース化する（地質調査所などでは実績が

ある）。

・博物館・資料館関係では標本データベース化が始まっており、大学博物館相互のネットワークシステムの構築が始まっている。

・岩石・鉱石・鉱物などの化学分析値に関するデータベース化が必要である。当面は、河村雄行鉱物研連委員からの情報を得ながら対応していくことにした。

3) 中嶋 悟（東工大）委員より鉱床学専門委員会委員の辞退願いが出され、委員を交代することで了承された。

4) その他

・国内における大学総合博物館関係の整備状況の説明があった。

・Resource Geologyの国内外からの投稿件数が少なく、周囲にも投稿を勧めて欲しい旨の要望があった。

・既に行われた地物関係の雑誌統合および来年に予定されている鉱物学会と岩鉱学会の雑誌統合の状況が紹介された。

今回の鉱床学専門委員会は、11月12日（金）合同会議後を予定。

（文責 松枝大治）

ご案内（追加）

地質図の凡例を標準化するためのアンケート調査にご協力を！

地質調査所では、地質図が誰でも理解できるようにすることを目指して、地質図に用いる凡例を標準情報化するための検討を行っております。この作業は、通商産業省工業技術院標準部の支援を得て行われるもので、「標準情報（TR）制度」のもとで、地質図を表現するために用いられる記号、色、模様などの標準化、および地層・岩体の名称などの表現の標準化を図るための資料を提供し、標準となるものを提案することを目的としております。

このたび、この作業の一貫として、ISO710「詳細な地図、平面および地質断面図に用いる図式記号」（Graphical symbols for use on detailed maps, plans and geological cross-sections）の翻訳を行いました。これは、標準情報（TR）「地質凡例基準の標準情報」の資料となるものです。ISO710は、「地質凡例基準の標準情報化」に関連した唯一の国際規格であり、「地質凡例基準の標準情報化」にあたっては、これをひとつの基礎として作業を進めたいと考えています。しかし、この規格については、国内では専門家にさえ知られていないという実態があります。そこで、地質調査所のホームページ上で、その翻訳を公開し、これについての皆様方のご意見を広く求めることにしました。下記URLにアクセスして閲覧の上、ご意見をお寄せ下さい。

ISO710「詳細な地図、平面及び地質断面図に用いる図式記号」のURL：<http://www.gsj.go.jp/GSJ/ISO.html>

なお、ホームページをご覧いただけない方、詳細を知りたい方は下記宛お問い合わせ下さい。

〒305-8567 茨城県つくば市東1丁目1-3

地質調査所地質部気付 地質凡例基準の標準情報化に関する研究グループ

電話：0298-54-3651

ファックス：0298-54-3653

（地質凡例基準の標準情報化に関する研究グループ 代表：鹿野和彦）

委員会だより

環境地質研究委員会

第9回環境地質学シンポジウムの開催と講演論文募集のお知らせ

6月号でご紹介しましたように、環境地質研究委員会では、日本情報地質学会と日本鉱物学会（ともに交渉中）との共催で下記のシンポジウムを開催します。

このシンポジウムは、環境地質に携わる方々から広く調査研究発表を募り、投稿された論文について、それらの内容から数セッションに区分したプログラムを組みます。そして、講演にはできる限り時間を配分するようにし、各セッション終了ごとに討議を実施します。

本シンポジウムは独自会計で実施しており、地質学会会員・非会員を問わず、関係者の積極的参加を期待します。

記

期 日：1999年11月25日（木）26日（金）

会 場：早稲田大学国際会議場会議室

（JR山手線・西武新宿線「高田馬場」駅から都営バス「早大正門」行で「西早稲田」下車、徒歩3分・地下鉄東西線「早稲田」駅下車、徒歩10分）

講演論文内容：地球環境・湖沼の成因と環境・海洋環境・海水準変動および潮位変動・地層の液状化と流動化・地盤沈下・地質汚染（地下水汚染、地層汚染、地下空気汚染、底質汚染）・廃棄物（廃棄物堆積構造、廃棄物層基底問題、廃棄物層からなる地盤の有効利用とそのメンテナンスなど）・水文地質環境・現世堆積物（人工地層など）・地震地質および地殻変動（活断層、異常震域など）・震（振）動地質（各種地層における波の伝播特性など）・都市地質・防災地質・斜面崩壊・火山災害・災害予測・地質環境計測とその測定手法（地盤沈下観測、地下水位観測、地下水質測定、測地、地震動観測など）・地質環境被害と保険・法地質学・地下水益管理・環境影響評価と環境資源管理・地下地質環境の大規模利用とそのメンテナンス（大規模宅地造成、ゴルフ場開発など）・地質環境へのリモ・トセンシングの応用・地質環境に対するシミュレーション・環境教育・環境倫理など。

講演申込み要領：

1) 申込み方法：講演は同一発表者2題まで受け付けます。下記

女性科学者の未来を考える研究委員会

第11回 国際女性技術者・科学者会議の報告

田崎和江（金沢大学）

アメリカのMaddox博士のキーノートレクチャー“Women in Science and Engineering. Change, Choices and Successes”での“Women has their time come?”の質問に対して、“Yes, time has come”は誠にたくましく、うれしく、力強い言葉であった。彼女は日本が最下位である、世界の女性科学者の数のグラフを示した。いったい日本の大学での理学部、薬学部、医学部、工学部を卒業した女性はどこへ行ってしまったのであろうか。修士、博士課程をでた女性研究者もどこへ行ってしまったのであろうか。高学歴の日本、ハイテクノロジー日本、21世紀の日本の科学技術は誰がになるのでしょうか。ちなみに、アメリカでは大学は給料が安いので、男性研究者は企業に就職するため、女性研究者にとって、かえって大学のポストが得られやすいという。彼女が示したグラフの中に、国別

様式にて、1999年9月10日までに、Fax、あるいは葉書にて申し込んでください。発表講演数1題の場合は下表1欄に、2題の場合は1,2欄それぞれに記入してください。（講演申込様式）

第8回環境地質学シンポジウム発表申込書

1	題名	
	発表者	(連名可)
	内容	(簡単に)...プログラム作成のとき、参考とする
2	題名	
	発表者	(連名可)
	内容	(簡単に)...プログラム作成のとき、参考とする
原稿用紙送付先		〒
住所		
氏名		

- 2) 申込書受領後、講演論文原稿用紙および執筆要領を送付します。
- 3) 講演論文は、環境地質研究委員会所定の原稿用紙に4枚または6枚(5枚は不可)でまとめ、1999年10月10日までに提出してください。
- 4) 論文は、邦文または英文で書いてください。なお、邦文論文については、英文要旨1枚をつけるとともに、図・表のキャプションは英文で書いてください。
- 5) 講演論文集は、原稿をそのままB5判にオフセット印刷します。
- 6) なお、論文講演者には、別刷り50部を進呈します。

講演申込み先：

日本地質学会環境地質研究委員会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル
電話 03-5823-1150, Fax 03-5823-1156

会費(予定)：

- 1) 講演および参加
 - 1 題講演の場合 4,500円
 - 2 題講演の場合 5,000円
 (これらには、参加費・論文集代・別刷り代を含みます)
- 2) 参加のみ参加費(論文集代含む) 4,500円

や性別のデータではなく、白人、黒人、黄色人種というような分け方があり、二重のハンディを負っているであろう彼女の講演タイトル<科学と技術の中の女性：変化、選択そして成功>は非常に感銘を覚えた。交流会の席でも彼女と話が合い、周囲の女性とで記念写真をとった(写真)。

第11回国際女性技術者・科学者会議が7月24-27日、千葉市の幕張メッセ国際会議場で行われた。この会議は3年に1度の開催で、前回はハンガリーで開催され、日本で開かれるのは今回初めてである。<日本女性技術者フォーラム>、<日本学術会議>、<日本女性科学者の会>の共催であり、今回のテーマは<地球環境のための科学と技術>である。この会議には、約40の参加国から約1,000名の参加者を得て盛会であった。歓迎パーティーには、ベトナム人は

アオサイ、インド人はサリーをはじめ、タイ、ナイジェリア、メキシコ、コンゴ、キューバ、ウガンダの女性科学者はそれぞれの民族衣装で参加し、国際学会らしい華やかさであった。アメリカやオーストラリアに10年-20年滞在し、研究している日本女性にも会い、海外での厳しい研究職の状況などの情報交換を行った。生物、化学、医学、薬学の研究者が多いなか、オーストラリアの原子力研究所のJane Gerardo-Abayaさんが同位体をやっている地質屋ときき、話が弾んだ。

この会の目的は、女性技術者、科学者が日頃の研究成果を国際交流の中で発表すること、相互理解と社会への啓蒙をはかること、さらに、女性技術者、科学者の地位を確立することにある。21世紀の科学と技術についてのキーノートレクチャー（吉川弘之、石井道子、数野美つ子）の数々は最近の研究動向と女性科学者、技術者の現状と将来を知り、かつ、外国の女性研究者の考え方をよく知るよい機会であった。例えば、日本とアメリカの医学部の人数（1997年は各々学部生（30%、43%）女性の助手（15%、45%）、女性の講師（7%、34%）、女性の教授（2%、10%）である。一方、日本地質学会、＜女性科学者の未来を考える研究委員会＞でとったアンケートによれば、日本の女性地球科学者の数は、医学部のそれと比較すると、一桁さらに低い。20世紀は＜未来を考える＞研究委員会であったが、21世紀は＜考えるだけでなく、実行ある＞のみである。私が日本に帰ってきた10年前と現在を比較すると、あちこちの国立、私立大学理学部に女性研究者が就職できている（例えば、千葉、愛媛、山形、東京、新潟、金沢、神戸など）。また、地質学会、合同学会、地震学会等には、保育所が設けられるようになった。理学部に入学する女子学生もコンスタントに増加している。これらのことを考えれば、まさに＜明るい未来＞である。

私は、“Education and ethics”のセッションで“Women proceed environmental science education”というタイトルで、1997年に起きたナホトカ号の重油流出事故の体験、研究、科学者としての責任について述べた。事故の後、その経験を＜環境教育＞にいかし、学生、院生とともに、本＜家庭でできる地球環境実験＞、＜環境よもやま話＞を出版した。また、＜理科の出前＞と称して、地域の子供や社会人に重油汚染した砂礫の浄化法、重油分解細菌によるバイオ



レメディエーション、NO₂の測定法などの普及活動についても報告した。

また、8月21日（土）10-16時、中央大学駿河台記念館670号室にて、第10回女性研究者問題全国シンポジウム＜21世紀の科学、技術を男女共同で拓くために＞が開催されます。

なお、標記集会には個人として参加した。

環境地質研究委員会：書籍、論文集（郵便振替 00130-5-701805 日本地質学会環境地質研究委員会）

- 第1回地球環境フォーラム“環境地質学からみた地球環境の諸問題” 地球環境研究100年の系譜（30ページ、B5判、定価1,000円、送料190円）
- 第2回地球環境フォーラム“地域から地球環境問題を考える”（46ページ、B5判、定価1,000円、送料270円）
- 第2回環境地質学シンポジウム講演論文集（336ページ、B5判、定価2,000円、送料380円）
- 第3回環境地質学シンポジウム講演論文集（432ページ、B5判、定価2,000円、送料380円）
- 第4回環境地質学シンポジウム講演論文集（392ページ、B5判、定価2,000円、送料380円）
- 第5回環境地質学シンポジウム論文集（446ページ、B5判、定価3,000円、送料380円）
- 第6回環境地質学シンポジウム論文集（422ページ、B5判、定価3,000円、送料380円）
- 第7回環境地質学シンポジウム論文集（432ページ、B5判、定価3,500円、送料380円）
- 第8回環境地質学シンポジウム論文集（368ページ、B5判、定価4,000円、送料380円）
- 佐藤傳蔵著“地文学”完全復刻版（185+4ページ、B5判、定価1,000円、送料400円）
- 東京ガス田上の地質環境と地下開発 地下開発におけるガス問題をいかに克服するか（70ページ、B5判、定価1,000円、送料240円）
- 誰がだすべきか？「地質汚染調査・対策費」を その1 有機塩素系化合物地質汚染を例として（129ページ、+付録38、B5判、定価1,000円、送料310円）
- シンポジウム“地質汚染（その2）”（97ページ、B5判、定価1,000円、送料240円）
- シンポジウム“地質汚染 水質汚濁防止法の改正を有効なものに”（59ページ、B5判、定価1,000円、送料240円）
- シンポジウム“地質汚染 残土処理と地質環境”（91ページ、B5判、定価1,000円、送料240円）
- シンポジウム“地質汚染 地球環境の持続的開発と廃棄物最終処分場の閉鎖条件について”（46ページ、B5判、定価1,000円、送料200円）
- 国際シンポジウム“環境保全と鉱物資源の活用”（84ページ、A4判、定価2,000円、送料390円）

委員会だより

環境地質研究委員会

第9回環境地質学シンポジウムの開催と講演論文募集のお知らせ

6月号でご紹介しましたように、環境地質研究委員会では、日本情報地質学会と日本鉱物学会（ともに交渉中）との共催で下記のシンポジウムを開催します。

このシンポジウムは、環境地質に携わる方々から広く調査研究発表を募り、投稿された論文について、それらの内容から数セッションに区分したプログラムを組みます。そして、講演にはできる限り時間を配分するようにし、各セッション終了ごとに討議を実施します。

本シンポジウムは独自会計で実施しており、地質学会会員・非会員を問わず、関係者の積極的参加を期待します。

記

期 日：1999年11月25日（木）26日（金）

会 場：早稲田大学国際会議場会議室

（JR山手線・西武新宿線「高田馬場」駅から都営バス「早大正門」行で「西早稲田」下車、徒歩3分・地下鉄東西線「早稲田」駅下車、徒歩10分）

講演論文内容：地球環境・湖沼の成因と環境・海洋環境・海水準変動および潮位変動・地層の液状化と流動化・地盤沈下・地質汚染（地下水汚染、地層汚染、地下空気汚染、底質汚染）・廃棄物（廃棄物堆積構造、廃棄物層基底問題、廃棄物層からなる地盤の有効利用とそのメンテナンスなど）・水文地質環境・現世堆積物（人工地層など）・地震地質および地殻変動（活断層、異常震域など）・震（振）動地質（各種地層における波の伝播特性など）・都市地質・防災地質・斜面崩壊・火山災害・災害予測・地質環境計測とその測定手法（地盤沈下観測、地下水位観測、地下水質測定、測地、地震動観測など）・地質環境被害と保険・法地質学・地下水益管理・環境影響評価と環境資源管理・地下地質環境の大規模利用とそのメンテナンス（大規模宅地造成、ゴルフ場開発など）・地質環境へのリモ・トセンシングの応用・地質環境に対するシミュレーション・環境教育・環境倫理など。

講演申込み要領：

1) 申込み方法：講演は同一発表者2題まで受け付けます。下記

女性科学者の未来を考える研究委員会

第11回 国際女性技術者・科学者会議の報告

田崎和江（金沢大学）

アメリカのMaddox博士のキーノートレクチャー“Women in Science and Engineering. Change, Choices and Successes”での“Women has their time come?”の質問に対して、“Yes, time has come”は誠にたくましく、うれしく、力強い言葉であった。彼女は日本が最下位である、世界の女性科学者の数のグラフを示した。いったい日本の大学での理学部、薬学部、医学部、工学部を卒業した女性はどこへ行ってしまったのであろうか。修士、博士課程をでた女性研究者もどこへ行ってしまったのであろうか。高学歴の日本、ハイテクロジー日本、21世紀の日本の科学技術は誰がになるのでしょうか。ちなみに、アメリカでは大学は給料が安いので、男性研究者は企業に就職するため、女性研究者にとって、かえって大学のポストが得られやすいという。彼女が示したグラフの中に、国別

様式にて、1999年9月10日までに、Fax、あるいは葉書にて申し込んでください。発表講演数1題の場合は下表1欄に、2題の場合は1,2欄それぞれに記入してください。（講演申込様式）

第8回環境地質学シンポジウム発表申込書

1	題名	
	発表者	(連名可)
	内容	(簡単に)...プログラム作成のとき、参考とする
2	題名	
	発表者	(連名可)
	内容	(簡単に)...プログラム作成のとき、参考とする
原稿用紙送付先		〒
住所		
氏名		

- 2) 申込書受領後、講演論文原稿用紙および執筆要領を送付します。
- 3) 講演論文は、環境地質研究委員会所定の原稿用紙に4枚または6枚(5枚は不可)でまとめ、1999年10月10日までに提出してください。
- 4) 論文は、邦文または英文で書いてください。なお、邦文論文については、英文要旨1枚をつけるとともに、図・表のキャプションは英文で書いてください。
- 5) 講演論文集は、原稿をそのままB5判にオフセット印刷します。
- 6) なお、論文講演者には、別刷り50部を進呈します。

講演申込み先：

日本地質学会環境地質研究委員会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル
電話 03-5823-1150, Fax 03-5823-1156

会費(予定)：

- 1) 講演および参加
 - 1 題講演の場合 4,500円
 - 2 題講演の場合 5,000円
 (これらには、参加費・論文集代・別刷り代を含みます)
- 2) 参加のみ参加費(論文集代含む) 4,500円

や性別のデータではなく、白人、黒人、黄色人種というような分け方があり、二重のハンディを負っているであろう彼女の講演タイトル<科学と技術の中の女性：変化、選択そして成功>は非常に感銘を覚えた。交流会の席でも彼女と話が合い、周囲の女性とで記念写真をとった(写真)。

第11回国際女性技術者・科学者会議が7月24-27日、千葉市の幕張メッセ国際会議場で行われた。この会議は3年に1度の開催で、前回はハンガリーで開催され、日本で開かれるのは今回初めてである。<日本女性技術者フォーラム>、<日本学会会議>、<日本女性科学者の会>の共催であり、今回のテーマは<地球環境のための科学と技術>である。この会議には、約40の参加国から約1,000名の参加者を得て盛会であった。歓迎パーティーには、ベトナム人は

アオサイ、インド人はサリーをはじめ、タイ、ナイジェリア、メキシコ、コンゴ、キューバ、ウガンダの女性科学者はそれぞれの民族衣装で参加し、国際学会らしい華やかさであった。アメリカやオーストラリアに10年-20年滞在し、研究している日本女性にも会い、海外での厳しい研究職の状況などの情報交換を行った。生物、化学、医学、薬学の研究者が多いなか、オーストラリアの原子力研究所のJane Gerardo-Abayaさんが同位体をやっている地質屋ときき、話が弾んだ。

この会の目的は、女性技術者、科学者が日頃の研究成果を国際交流の中で発表すること、相互理解と社会への啓蒙をはかること、さらに、女性技術者、科学者の地位を確立することにある。21世紀の科学と技術についてのキーノートレクチャー（吉川弘之、石井道子、数野美つ子）の数々は最近の研究動向と女性科学者、技術者の現状と将来を知り、かつ、外国の女性研究者の考え方をよく知るよい機会であった。例えば、日本とアメリカの医学部の人数（1997年は各々学部生（30%、43%）女性の助手（15%、45%）、女性の講師（7%、34%）、女性の教授（2%、10%）である。一方、日本地質学会、＜女性科学者の未来を考える研究委員会＞でとったアンケートによれば、日本の女性地球科学者の数は、医学部のそれと比較すると、一桁さらに低い。20世紀は＜未来を考える＞研究委員会であったが、21世紀は＜考えるだけでなく、実行ある＞のみである。私が日本に帰ってきた10年前と現在を比較すると、あちこちの国立、私立大学理学部に女性研究者が就職できている（例えば、千葉、愛媛、山形、東京、新潟、金沢、神戸など）。また、地質学会、合同学会、地震学会等には、保育所が設けられるようになった。理学部に入学する女子学生もコンスタントに増加している。これらのことを考えれば、まさに＜明るい未来＞である。

私は、“Education and ethics”のセッションで“Women proceed environmental science education”というタイトルで、1997年に起きたナホトカ号の重油流出事故の体験、研究、科学者としての責任について述べた。事故の後、その経験を＜環境教育＞にいかし、学生、院生とともに、本＜家庭でできる地球環境実験＞、＜環境よもやま話＞を出版した。また、＜理科の出前＞と称して、地域の子供や社会人に重油汚染した砂礫の浄化法、重油分解細菌によるバイオ



レメディエーション、NO₂の測定法などの普及活動についても報告した。

また、8月21日（土）10-16時、中央大学駿河台記念館670号室にて、第10回女性研究者問題全国シンポジウム＜21世紀の科学、技術を男女共同で拓くために＞が開催されます。

なお、標記集会には個人として参加した。

環境地質研究委員会：書籍、論文集（郵便振替 00130-5-701805 日本地質学会環境地質研究委員会）

- 第1回地球環境フォーラム“環境地質学からみた地球環境の諸問題” 地球環境研究100年の系譜（30ページ、B5判、定価1,000円、送料190円）
- 第2回地球環境フォーラム“地域から地球環境問題を考える”（46ページ、B5判、定価1,000円、送料270円）
- 第2回環境地質学シンポジウム講演論文集（336ページ、B5判、定価2,000円、送料380円）
- 第3回環境地質学シンポジウム講演論文集（432ページ、B5判、定価2,000円、送料380円）
- 第4回環境地質学シンポジウム講演論文集（392ページ、B5判、定価2,000円、送料380円）
- 第5回環境地質学シンポジウム論文集（446ページ、B5判、定価3,000円、送料380円）
- 第6回環境地質学シンポジウム論文集（422ページ、B5判、定価3,000円、送料380円）
- 第7回環境地質学シンポジウム論文集（432ページ、B5判、定価3,500円、送料380円）
- 第8回環境地質学シンポジウム論文集（368ページ、B5判、定価4,000円、送料380円）
- 佐藤傳蔵著“地文学”完全復刻版（185+4ページ、B5判、定価1,000円、送料400円）
- 東京ガス田上の地質環境と地下開発 地下開発におけるガス問題をいかに克服するか（70ページ、B5判、定価1,000円、送料240円）
- 誰がだすべきか？「地質汚染調査・対策費」を その1 有機塩素系化合物地質汚染を例として（129ページ、+付録38、B5判、定価1,000円、送料310円）
- シンポジウム“地質汚染（その2）”（97ページ、B5判、定価1,000円、送料240円）
- シンポジウム“地質汚染 水質汚濁防止法の改正を有効なものに”（59ページ、B5判、定価1,000円、送料240円）
- シンポジウム“地質汚染 残土処理と地質環境”（91ページ、B5判、定価1,000円、送料240円）
- シンポジウム“地質汚染 地球環境の持続的開発と廃棄物最終処分場の閉鎖条件について”（46ページ、B5判、定価1,000円、送料200円）
- 国際シンポジウム“環境保全と鉱物資源の活用”（84ページ、A4判、定価2,000円、送料390円）

研究室紹介 No. 9

信州大学理学部物質循環学教室
地球システム解析講座

ホームページ: <http://science.shinshu-u.ac.jp/environ/index.html>
場所・日時: 地球システム解析学セミナー; 毎週火曜日鈴木研究室
ゼミ; 毎週火曜日夕方, 塚原研究室ゼミ; 毎週水曜日福島研究室
ゼミ; 毎週火曜日午前中, 村越研究室ゼミ; 毎週月, 火, 金曜日
9:30

研究室概要

私たち地球システム解析講座における各研究室の研究内容は、湖沼堆積学、水門循環学・雪氷学、断層流体力学、有機地球化学・陸水学、堆積学・地質学と多岐にわたっています。つまり、1つの狭い学問分野に固執することなく様々な研究分野を学ぶことによって地球規模の物質循環を明らかにしていくことが私たちの目標です。さらに、信州の大自然に囲まれて、のびのびと楽しく研究できるので(本当に!!!)。

それでは、各研究室のみなさんに現状を述べていただきます。

・公文研究室は、博士課程2名、修士課程1名、卒論生2名の計5名から構成されています。研究テーマはそれぞれ異なりますが、湖沼堆積物などのコアサンプルを用いた研究が多いのが現状です。サンプリング、一通りのサンプル処理ができるほかは、粒度分析、XRD、CHNコーダーなどを用いた様々なアプローチの研究が可能です。本人の自主性が重んじられるため、やりたい研究ができると思います(田辺)。

・鈴木研究室では、降水の化学特性からみた水循環における化学物質移動機構の研究や、気温分布からみた都市気候環境の研究が主なテーマです。先生は97年11月~99年3月まで第39次南極観測隊越冬隊員として、昭和基地を拠点に活動していました。南極大陸では、降雪、浅層掘削による氷床コア、ロック用水の採取、分析、試飲を行っていました。最近、ロック用の産地直送南極氷が少なくなってきたのが悩みの種です。4年生3人は、スキーシーズンまでに卒論を書きあげようと現在頑張っています(白肌)。

・塚原研究室では、ガスクロマトグラフ、イオンクロマトグラフを用いて松代群発地震域、長野県西部群発地震域および諏訪断層帯に湧出する流体を採取し分析して、地震と流体の関連を調べています。長野県は全国で2番目に温泉数の多い県であり、温泉水・ガスを採取するフィールドには恵まれています。よって、研究と兼ねて温泉に入るのも我が研究室全員の楽しみとなっています。また、塚原先生は、お寺の住職でいらっしゃるため、大変優しく指導して下さいます(修行の賜物?)。先生の説法は、将来社会で生きていく上で大変重要なものとなるでしょう。なお、塚原研究室は、院生2人、研究生1人、4年生5人で構成されています(新井)。

・福島研究室では、有機物分析を通じての環境解析と陸水の水質形成に関わる地質条件についての研究を行っています。前者ではGCとGC-MSを用いた生物指標(Biomarkers)の検索、後者ではイオンクロマトグラフを用いて長野県の水質マップを作成しています。先生と一緒にサンプリングに行くと必ずと言っていいほど雨が降りますが、なぜでしょうか(依田)。

・理学部の紅一点、村越直美先生研究室には6つの掟があります。1. 賢くなる、2. お金を貯める、3. ものを創れる、4. 卒論に1年以上かけない、5. 毎日研究室に来て作業・勉強をする、6. 約束を守れない人とはおつきあいお断り。これが、最低限守らなくてはならないお約束なのです。朝は9:30のゼミ、午後は3:00のお茶会が設けられ、時には週1回のテニスに誘われることもあります。当研究室は、地層形成プロセスの研究を中心に、堆積構造から過去の堆積環境を推定することを目的としています。今年から、800万円(!)の水路も導入され、実験もより盛んになっていくと思われます。ここでは勉強をしたい人にとっては、無制限に刺激が与えられる場所です。村越先生の号令のもと、勉学に励んでいます(村越研一同)。

院生の研究内容およびコメント

・間中理哉(D2;公文研): 地下水の挙動解析に、堆積システム復元的手法を生かせればと考えています。河成層の水文層序解析に手を焼いています。会社員なのであまり大学に通えず、ゼミでは少し肩身の狭い思いをしています(?)。

・奥澤保(D2;塚原研): 断層帯内を充填する水の研究を行っています。不精者なのであまり大学に通えず、ゼミでは少し肩身の狭い思いをしています(?) → 宗教上の都合(?) で写真を写さ



- せてもらえませんでした(魂を吸い取られるそうです)。
- ・新井崇史(D2;塚原研): 地震発生におけるガスの役割を明らかにしてみたいです。サンプリングと分析に飽きたときに、この研究室紹介を通して各大学研究室対抗ソフトボール大会等が開催されれば、大変うれしく思います。
 - ・Danda Pani Adihikari(D1;公文研): [Study] High resolution analysis of environmental changes in Holocene lake sediments: a comparative study of Japanese Alps and Nepal Himalayas. [Hobby] watching wild life, traveling.
 - ・田辺晋(M2;公文研): メコンデルタのコアを堆積学的に研究しています。将来は世界中、色々な所で研究がしてみたいです。現地に土着化した旅行が好きです。アジアを中心に旅行しています。
 - ・上村ゆう子(M1;村越研) 卒論では下総層群木下層の海進ラグ堆積物について研究しました。修論のテーマは未定(7月13日現在)。MS-DOS用の新しい粒度分析プログラムを作成しましたが、測定・分析に使われているパソコンの2000年問題が不安だ。
 - ・白肌真由美(M1;鈴木研): 「降水中に含まれる化学物質の濃度と気象条件の関係」というテーマで卒業研究を行いました。現在も、雨男F先生の行動に気を配りながら降水サンプル採取に精を出しています。
 - ・古江哲哉(M1;村越研): 現在長期休暇中。もうすぐ復活します。
 - ・依田新(M1;福島研): 水中生物の有機物組成と水質との関係について。趣味はソフトボールと野球観戦です。年2回行われる学科内対抗のソフトボール大会が何よりの楽しみです。
 - ・高橋穂有(研究生;塚原研): 卒論では、長野市松代の湧水ガスについて研究をし、現在も同様のテーマで研究を続けています。

●(後)●

物質循環学科が開設されて4年が立ちました。ようやく、その当時の1年生が修士1年になりました。まだまだわからないことが数多くあります。色々なご意見、お誘いお待ちしております。これからもよろしくお願いたします。

小規模だけれども、独創的な研究をしている魅力的な研究室は、日本全国もっといっぱいあるはず...

今回は、各研究室が合同で、講座全体の紹介をおこなっていただきました。みなさんの所属講座でも、是非検討してみてください(院生ページ編集担当, K.S.)

常時投稿をお待ちしております。院生コーナーの編集は、現在、以下の2人で行っております。e-mailでいただければ幸いです。(顔ぶれが変わりました)

698g5040@mn.waseda.ac.jp 島田耕史 (早大)
massago@geo.titech.ac.jp 真砂英樹 (東工大)

☆ 北海道支部 巡検報告

ともに学ぶ自然教室—地形・地層の見方，学び方—

自然，とくに地学に関係する現象について，みんなでゆっくりと観察して子どもたちや一般の方々にとどのようにして理解してもらえるか，学びあう会を去る7月18日（日）に開催しました。

これは，今年，結成したばかりの北海道地学教育ネットワーク（代表 田中 実；北海道地学教育連絡会，地学団体研究会北海道支部，日本地質学会北海道支部）が初めて主催した巡検で，札幌から近い厚田村望来（もうらい）地域で行われました。参加者はほぼ定員の23名（案内者を除く）でした。

今回の企画には協力後援として札幌市文化庁博物館計画が参加したこともあり，学会とのつながりのない中学校の理科の教員の参加もありました。他に，地質コンサルタントの方や高校生の参加もありました。

巡検といっても，1日でたくさんのポイントを見て歩くのではなく，主として2箇所をじっくり観察し，おまけとして2箇所をちょっと覗くという行程で行いました。観察内容は①段丘地形，砂丘，後背湿地，海岸地形など，②地層の見方，石の見方，具化石などにしぼり，他に石油が自然に湧き出しているところに立ち寄りしました。

各ポイントのうち，とくに「地形」の部分では高台から，地形を観察し，参加者自身が地形区分，成因を考えながら討論して，雄大な自然を自分の目と頭と体でとらえることに重点をおきました。こ



れは子どもたちや一般の方々の立場にたった，自然を見る目を養うこと，自然現象を教科書ぬきで解釈する試みでもあると思います。「地層の見方」では露頭の見方をどのように，丁寧に解説するかに重点をおき，それぞれの段階で地層のいろいろな側面をとらえてみることを試みてみました。また，ここでは海岸に打ち上げられたメノウや石炭，安山岩などを採取して，露頭の地層との比較も行いました。もちろんこれらの岩石はおみやげにもなったわけです。

これからも年に1回程度の巡検を行う予定ですし，他に教材に関する取り組みも検討しています。自然環境問題や防災問題など多くの社会的な課題を互いに理解しあいながら解決しあうためにも，子どもたちや一般の方々にも自然現象のそのまの姿を理解してもらうことが，まず，重要であると思います。

（文責 八幡正弘）

執行委員会だより

99年度第6回執行委員会が7月12日（月）14：00から日本地質学会事務局で行われました。出席者は，足立執行委員長，天野，公文，佐々木，滝田，渡部の各執行委員，水野事務局長でした。今回の主な報告・議題は次のようなものです。

①第106年名古屋大会と第107年総会について

行事委員会より第106年名古屋大会の準備状況が順調に進んでいる点と第107年総会（2000年春，つくば市）の準備状況が報告されました。このなかで，107年総会で新しい試みとして，若手・学生・院生向けの研修の場としてショートコースが企画されており，内容，講師などは公募の予定であることが紹介されました。これに対し，執行委員会では，企画には賛成である，シンポジウムと並列しないよう開催日を検討してほしい，良いテキストがあれば学会として発行したらどうか等の意見がだされました。

②地質学論集について

地質学論集の52，53の発行企画に関連して以下のような議論がありました。論集発行に係わる費用は学会の財政を圧迫し

ている要因の一つでもあるので，ワーキンググループで論集全体について検討してもらうことになりました。

- ・多数の販売部数が見込めない論集の場合販売価格が高額となり，問題である。
- ・販売部数が少ないからといって発行を制限するすべきではなく，学問的に意義があれば逆に発行を保証すべきである。
- ・著者にもページチャージなど応分の負担をしてもらい，販売価格を低く抑えたらどうかなど。

③臨時評議員会について

第106年名古屋大会の時に臨時評議員会を開催することになりました。主要議題は会則細則等の改正問題，各賞問題，名誉会員問題等です。

今年になって，50歳前後の会員の訃報が多くなっています。皆さんご自愛を。

（会員委員長 滝田良基）

1999年度第1回臨時評議員会のお知らせ

標記評議員会を下記のように，10月8日（金）に開催いたします。傍聴ご希望の方は，10月4日（月）正午までに執行委員会宛に，氏名・連絡先を記名した申請書をご提出下さい。

1999年度第1回臨時評議員会

日 時：10月8日（金）午後1時30分より

場 所：KKR名古屋三の丸



熊谷直一名誉会員を悼む

現住所 京都市左京区岩倉大鷲町 1-1
101歳 (明治31年1月1日生)

略歴

- 大正13年3月 京都帝国大学理学部物理学卒業
- 3月 京都帝国大学理学部助手
- 大正15年3月 京都帝国大学理学部講師
- 11月 京都帝国大学理学部助教授
- 昭和15年2月 測地学及び地球物理学本部委員(学術研究会議)
- 8月 理学博士(旧制)授与
- 昭和18年6月 測地学及び地球物理学研究委員会委員(学術研究会議)
- 9月 測地学委員会委員(内閣)
- 昭和20年5月 京都帝国大学理学部教授
- 昭和22年4月 石油開発促進委員会委員(商工省)
- 昭和24年4月 地球物理学研究連絡委員会委員(日本学術会議)
- 昭和25年10月 香川大学教授(兼任)
- 昭和27年4月 測地審議会委員(文部省)
- 昭和27年7月 香川大学教授を免す
- 昭和29年4月~昭和35年4月 測地審議会委員
- 昭和31年12月~昭和32年11月 学科用図書検定調査審議会調査員
- 昭和36年1月 京都大学停年退官
- 1月 京都大学名誉教授
- 昭和39年4月 大谷大学教授
- 昭和43年3月 大谷大学定年退職
- 昭和43年4月1日~昭和46年3月31日 大谷大学教授(非常勤)

平成11年7月2日 逝去

本学会名誉会員熊谷直一先生は、平成11年7月2日101歳の天寿を全うされ急性心不全で逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

先生は大正13年3月京都帝国大学理学部物理学の光学を専攻されて卒業され、そのまま大学院に進学される予定であったところ、故松山基範先生担当の地質学鉱物学教室理論地質学の助手になられ、京都大学在任中は勿論、退官後も地質学における物理学の領域の研究と後輩の指導に一生を捧げられました。

本学会も長年の御活動の貢献により名誉会員に推挙されておられます。

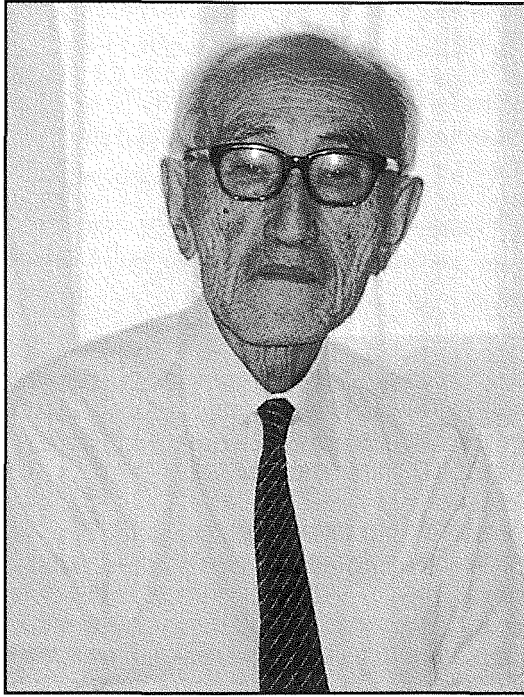
先生の主な研究につきましては、この文章を書いている西村も、修士課程の2年目の1月1日に停年で退官されましたので、以前のことは野外の観測に出たときに節々にお聞きすること、先輩の方々のお話などをお聞きすることと論文を読ませていただき一部推察しているところがあります。その中で先生の研究は次のように大きく三つの分野に分けられると思います。①測地学とくに重力測定によるアジア各地の地殻構造や上部マンツルの構造解析の研究があります。特にその中でも、潜水艦によるマイネツ重力計を用いた日本海溝付近の重力測定とそれらの解析結果は、その後のプレートテクトニクスの研究の重要な資料となりました。②物理探査の研究では、第二次世界大戦の戦前、戦後を通じて、国内外の油田の重力探査に従事し、多くの地域の地下構造の解析をされた。また日本各地の鉄鉱床の磁力探査にも貢献された。さらに晩年重力鉛直勾配の測定方法を考案し、後継者等と国内各地の重力鉛直勾配を測定されました。この一つの応用として桜島火山の周辺で重力と重力鉛直勾配の隔年の測定を試み、火山噴火との関係を調べられました。③岩石物性の研究では、鉱物生成の熱力学的、熱伝導論考察によりマグマの温度推定への先駆的な研究があります。また、先生の卒業研究の応用と発展を試み、月面の反射率の観測結果の解析から、月面の地質(先生は月質と言われていた)を調べる試案をまとめられています。この提案はNASAでも注目されたとお聞きしています。④退官前3年余の頃から、理論地質学の助手時代に初めて野外での観察から層内褶曲の露頭をみて疑問に持っておられた岩石の流動の実験を試みられ、最近まで後継者とともに、生涯の研究とされました。すなわち花崗岩等の巨大な試料を用い40年にわたる長期のたわみの測定を続けられました。それらの成果は地質学、岩石力学等の分野で高く評価されています。

先生の大学における教育・研究の指導は、ただ指示をされるだけでなく、測定などの野外には20年ほど前まで(お年が80歳頃)出て指導された。また解析結果は非常に詳しく聴かれるのが常であった。

先生について一番印象深かったのは、1992年夏万国地質学会が京都の国際会議場で約5千名の内外の研究者を集めて開かれた時、一人の登録会員として参加され、皇太子を迎えた歓迎晩餐会の席上お願いした5分間できっちりとした英語で挨拶をされたのを感じてうかがいました。また白寿のお祝いを京都大学大学院理学部地質学鉱物学教室の主催で卒業生を集めて行ったとき、多くの方々に現在の研究の状態をいねいにきかれていたのに敬服した次第です(添付した写真は白寿の時のものです)。

泉下にあられて暖かい眼差しで、学会の発展と後輩の研究を見守っていただけるものと念じ、謹んでご冥福をお祈りいたします。

平成11年7月25日
(シンクタンク京都自然史研究所
京都大学名誉教授
西村 進)



名誉会員 高井冬二先生のご逝去を悼む

本会名誉会員高井冬二先生は、平成11年6月21日、肺ガンのため逝去されました。享年87歳でした。

高井先生は明治44年12月15日、東京のお生まれで、昭和10年3月東京帝国大学理学部地質学科を卒業、大学院を終えられて、昭和14年7月から同理学部地質学科の助手、17年10月から講師、18年3月から助教授と累進され、昭和30年7月から教授にられました。昭和47年に停年でご退官のあとは財団法人進化生物学研究所の主任研究員を平成7年までお務めになっておられます。

先生のご専門は化石脊椎動物とそれに基礎をおく新生代の年代論でした。初期にはアオモリゾウやその他の化石長鼻類の記載を精力的に進め、また平牧層・戸狩層の中新世ほ乳類化石を記載しておられます。先生の大きなお仕事としてあげられるのは古第三紀の哺乳類化石の研究でありましょう。それまで本格的な記載のなかった東アジアや日本の始新世、漸新世の大型哺乳類化石群について、昭和13年の朝鮮宝山炭田産の哺乳類化石の記載に始まり、宇部炭田や常磐炭田からの資料について詳細に記載し、その生層序学上の意義や、古生物地理学上の意義を論じられました。そしてこれらの化石がユーラシアの同時代の化石群と密接な関係にあることを示し、古

第三紀の日本が大陸と接続していたことを強調しておられます。昭和30年代当時は一般に漸新世と信じられていた常磐炭田の白水層群を哺乳類化石から始新世と主張され、それが正しかったことは近年になって微化石の検討が進んで立証されました。また、中国東北部を中心として大量の化石が知られるジュラ紀の淡水魚 *Lycoptera* の記載は先生の学位論文であり、この魚類の研究の出発点となった業績です。

昭和30年代以後は、人類学者と協力して、化石人類とそれに伴う哺乳動物群の研究に没頭されました。浜北人・三ヶ日人・牛川人など日本各地の化石人類の発見にとどまらず、昭和36年以後、東京大学の事業として数回にわたって実施された西アジア地域での化石人類調査では、副隊長として研究グループの統率と研究の推進に大きな力を発揮されました。この調査ではイスラエルのアムッド洞からきわめて保存の良いネアンデルタール人の頭骨及び骨格を発掘し、大きな報告書を執筆・編集しておられます。退官後は、進化生物学研究所の事業で、南米ボリビアのタリハ盆地の新第三紀ほ乳類化石群の発掘を指揮し、大量の化石資料を発掘して記載され、現地に大きな化石博物館が設立されるのを支援されました。

高井先生は自然史科学の振興、特に自然史博物館の整備に尽力され、東京大学総合研究博物館の前身、総合研究資料館の発足に際し、その設立準備から初期の運営まで中心的役割を果たされました。当時、東大地質学教室に保管されていた横山又次郎先生以来の貴重な古生物標本は、戦争末期の疎開から戻ってきた状態で放置されておりました。この標本の整理・登録業務を、高井先生の総指揮の下に昭和31年以來数年にわたって、当時の地質学教室第4講座の教官・院生が、古生物の専攻であるなしに係わらず全員で毎週1日の午後を費やして行ったことを思い出します。また、先生は日本学術会議自然史科学博物館特別委員会の委員として、あるいは国立科学博物館の評議員として自然史博物館の発展に力を注ぎ、大きな足跡を残されました。

先生は研究室では謹厳実直、寡黙で、遊んでいることを許さない雰囲気をお持ちで、恐いという印象すら感じられましたが、野外にご一緒すると、一転、実に楽しそうにして山を歩かれ、よく話もなさいました。西アジアの調査では我々若者達といつも一緒に発掘現場を飛び回り、周辺の第四系を調査に同行し、町を探訪し風景を楽しみ、珍しい食物を味わったりしておられました。先生と一緒に、気温45℃という中をジープで埃まみれになって死海のほとりを走ったり、塩水を詰めた水筒を下げて砂漠の洞窟の調査をしたことを思い出します。

先生はきわめてご健康で、東京で学会が開かれた折りなどには最近まで出てこられるなどしておられました。五月末より体調を崩され入院、そのまま帰らぬ人となられたよしです。在りし日のお姿をしのびつつ、謹んでご冥福をお祈りします。

(大阪学院大学 鎮西清高)



田中耕平さんのご逝去を悼む

本会会員、田中耕平さんは、平成11年6月25日、不慮の死により逝去されました。享年53歳でした。平成11年4月に、長年活動していた防災科学技術研究所から信州大学農学部に移って、間もないことです。

田中さんは、昭和20年11月東京都に生まれ、昭和43年3月早稲田大学教育学部理学科を卒業しました。引き続き早稲田大学大学院理工学研究科の修士課程に入り、昭和48年3月には同大学院博士課程（資源及び金属工学）を修了しました。博士課程で行った「関東山地の三波川結晶片岩—変成分帯と変成鉱物について」の研究に対し工学博士の学位が授与されました。学位は、工学博士ですが、研究テーマ名から想像できるように、研究内容は変成岩岩石学で、丹念な地質調査と顕微鏡岩石学により変成分帯を行い、鉱物分析から変成度を解析したもので、純粋な地質学の研究です。その後、昭和48年4月から昭和50年12月までは、早稲田大学高等学院講師をしながら、同大理工学研究奨励研究生として、研究を続けました。この時期に、田中さんが何を考えていたのかを、直接伺ったことはないのですが、「地質学を続けるか、まったく別のことを始めるか」で悩んでいたのではと想像します。田中さんの決断は、後者でした。

昭和51年1月に、科学技術庁国立防災科学技術センター第2研究部地表変動防災研究室に採用になり、斜面崩壊・地すべりを対象とした応用地質学の研究を始めることになりました。昭和60年7月には第3研究部地表変動防災研究室長に就任しました。平成2年6月には同センターが組織改組され、防災科学技術研究所防災総合研究部地表変動防災研究室に変わりましたが、平成11年3月まで、一貫して斜面崩壊・地すべりの研究に携わりました。この間、昭和55年5月から1年間、米国地質調査所環境地質部に留学し、地震による斜面崩壊に関する最新の現地調査、解析技術について学びました。この成果は、長野県西部地震の斜面崩壊調査に生かされました。昭和57年～58年には、科学技術庁研究調整局で併任専門官と

して、研究プロジェクトの計画・調整を行い、プロジェクト研究の推進に力を発揮しました。また、平成9年～10年には建設省国土地理院にも併任となり、地形学の研究者との交流を通して、研究者として学問の幅を広げました。平成11年4月には、それまで蓄積した実績を踏まえ、さらにスケールの大きな研究を行うために信州大学農学部に移りました。

田中さんが斜面崩壊・地すべりの研究を始めたころは、これらの研究に粘土鉱物学、斜面水文学、物理探査など、それまで適用されていなかった学問分野が適用され始め、新しい防災研究の展開が図られようとしていた時期でした。そのため、人間の生活に直接関係しない変成岩を対象に、一人で調査・分析し、研究を進めるやり方から、生活に密着した土壌・土層を、さまざまな手法を使い、多くの人と協力して、研究を進めるプロジェクト研究に変更することが要求され、田中さんはこの要求に答えました。プロジェクト研究が成功するためには、優れた研究者が集合するだけでは、うまくいきません。そこには、明確な目標を立て、研究者間のみならず、外部の関係者まで調整できるキーパーソンが必要です。田中さんは、平成2年～66年の科学技術振興調整費「火山地域における土砂災害予測手法の開発に関する国際共同研究—岩屑流発生場に関する研究」において、キーパーソンとして、予算要求、十数機関の研究者間の調整し、国際シンポジウムを開催し、プロジェクトを推進しました。調査結果は、「磐梯火山—防災研究の進展にむけて—」（1995日本語；1997英語）にまとめられています。また、平成7年の兵庫県南部地震では、震災後直ちに調査に着手し、資料収集と現地調査を行い、いち早く結果を「1995年兵庫県南部地震による地表面変化変位量図」（1996）にまとめました。行動力のある学者でもあったのです。

現在、地質学は、これまでにない厳しい状況下におかれています。地質学が市民権を得る学問となるためには、地球環境の保全と自然災害対策など、生活と密着した分野で、その有効性を一般の人に示していく必要があります。そのためには、田中さんのような行動力のあるキーパーソンがますます重要になってくると思われます。田中さんの早すぎる逝去が悔やまれます。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（農業工学研究所 今泉真之・
防災科学技術研究所 井口 隆）

1999年度第2回定例評議 員会議事抄録

1999年8月3日
日本地質学会評議員会議長 小泉 格

日 時：1999年6月26日(土)12:30～18:00

場 所：北とびあ 902会議室

出席者：小松正幸会長、坂 幸恭・徳岡隆夫副会長、小泉 格評議員会議長、足立勝治、足立久男、阿部国広、会田信言行、赤羽貞幸、赤羽久忠(代 那須)、秋葉文雄、天野一男、在田一則、磯崎行雄、板谷徹丸、上砂正一、永広昌之、大友幸子、菊地隆男、久保和也(代 渡部)、公文富士夫、熊井久雄(代 吉川)、小出良幸、小林和宏、佐々木和彦、左瀬和義、酒井治孝(代 磯崎)、柴 正博、柴崎直明(代 松本)、周藤賢治(代 立石)、田結庄良昭(代 赤羽貞)、田崎和江(代 大友)、高橋正樹、高安克己、滝田良基(代 足立勝)、巽 好幸(代 丸山)、立石雅昭、徳橋秀一、鳥海弘光、那須孝梯、新妻信明(代 天野)、楡井 久、野村 哲、別所孝範(代 左瀬)、真砂英樹、マーティン・アンドリュウ、松本俊幸、丸山茂徳、矢野孝雄、湯浅真人、吉川周作、吉田武義、渡部芳夫 各評議員 水野篤行(事務局)

報告事項

1. 執行委員会報告

(1) 第一庶務委員会

天野一男委員長より次の報告があった。

- 1) 次の研究助成等の推薦依頼・募集があった。
 - (1) 平成11年度日本生命財団研究助成 締め切り5月10日。
 - (2) トヨタ財団1999(平成11年度)年度研究助成 締め切り5月20日。
 - (3) 日本学術会議による平成14年度(2002)共同主催国際会議の募集 締め切り2月末日。
 - (4) 1999年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の受賞候補者および研究助成候補者の推薦依頼締め切り：三宅賞1999. 8. 31；研究助成(第1回)1999. 8. 31(第2回)2000. 4月末。
 - (5) 2000年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」受賞候補者および研究助成候補者の推薦依頼 締め切り：猿橋賞1999. 11. 30；研究助成1999. 11月末、2000. 4月末。

- (6) 第7回日産科学賞候補者と第26回日産学術研究助成候補者の推薦 締め切り8月20日。
 - (7) 日本学術協力財団主催学術シンポジウム(平成11年9月1日～12年1月20日に開催分)の企画募集 締め切り6月30日。
 - (8) 平成11年度(第21回)沖縄研究奨励賞の推薦 締め切り9月30日。
 - (9) 1999年度朝日賞の候補者推薦 締め切り8月31日。
 - (10) 平成11年度東レ科学技術賞及び東レ科学技術助成の候補者推薦 締め切り10月8日。
 - (11) 平成12年度カイロ・ナイロビ研究連絡センター派遣研究者の募集 申し込み：9月13日～17日。
- 2) 次の共催・協賛・後援等を承諾した。
- (1) 第43回粘土科学討論会(11. 9. 16～9. 18, 倉敷芸術科学大学)の共催。(4. 7付け)
 - (2) 日本学術会議IGCP Congress(11. 5. 7～5. 13, 神奈川県葉山町)の後援。(4. 9付け)
 - (3) 中部地質情報展「20億年のタイムトラベル」(地質調査所主催, 10. 9～11, 名古屋科学館)の共催。(4. 15付け)
 - (4) (社)日本産業機械工業会ほか主催「99地球環境保護 土壌・地下水浄化技術展」の協賛(9. 8～10, 東京ビッグサイト東京国際展示場)の協賛。(4. 26付け)
 - (5) ゼオライト研究会主催「第15回ゼオライト研究発表会」(10. 21～22, 北見市民会館)の協賛。(4. 28付け)
 - (6) 地盤工学会・日本トンネル技術協会・国際トンネル技術協会主催「IS-Kyoto 2001 Modern Tunneling Science and Technology」(2001. 10. 30～11. 1, 京都国際会館)の後援。(5. 11付け)
 - (7) (財)日本科学技術振興財団主催「99青少年のための科学の祭典」の後援と実験演習協力。(5. 24付け)
- 3) 次の転載等を許可した。
- (1) 三田直樹会員に対して、地質雑、100, 10の口絵写真, 第4図A, B, 第5図(三田ほか)を「オンネトー湯の滝, 足寄町オンネトー湯の滝のマンガン生成緊急調査報告書」(足寄町教育委員会刊)に転載。(3. 29付け)
 - (2) 千葉県中央博物館に対して、地質雑、94, 3, p. 190, 191の第3図(小竹)、同、101, 7, p. 517の第2図(小竹)を同博物館刊、「地学資料 千倉・豊房層群鍵層集(1998年度版)」に転載。(3.

- 20付け)
 - (3) 三田直樹会員に対して、地質雑、100, 10の口絵写真, 第1図, 第4図A, 第5図(三田ほか)を、「プレカンブリアン・パーク「湯の滝」へようこそ—微生物が作るマンガン鉱床が語る地球環境学—」(三田直樹), 地質ニュース(1999年3月刊予定)に転載。(4. 12付け)
 - (4) 長谷川 卓会員に対して、Jour. Geol. Soc. Japan, 101, p. 6, fig. 3(T. Hasegawa)を、Paleontological Research掲載の同会員の論文に転載。(5. 15付け)
 - (5) 宮武 隆氏(非会員)に対して、地質雑、102, p. 903, Fig. 10(a), 11(嶋本ほか)を地学雑誌掲載の同氏の論文「史料地震と震源過程」に転載。(5. 15付け)
 - (6) (社)信濃教育会出版部に対して、地質学会ニュース, 1, 11の表紙写真(中田)を、「平成14年度用小学校理科用教科書(新しい理科6年下)」(同出版部刊)に転載。(5. 21付け)
 - (7) 三浦大助会員に対して、地質雑、71, 494～512の論文第2図(荒牧・羽田)を、同会員の論文, J. Volc. Geotherm. Res. と J. Geophys. Res. に転載。(5. 24付け)
 - (8) 伊藤 慎会員に対して、地質学論集, 45号, p. 114, Fig. 8(北村)を同会員の論文(地質雑, 105, No. 7)に転載。(6. 4付け)
- 4) 4月3, 4日に予定通り新事務所(井桁ビル)への移転を行い、5日より通常業務を開始した。
- 5) 1998年度国立19大学地学系主任会議(担当幹事：神戸大学佐藤博明教授)より1999年3月付けで地質学会宛に、「大学入試センター試験、「化学・地学」の分離に関する要望書」のコピーが送付された。これに関して、執行委員会において地質学会からも要望書を提出することを検討し、その文案を検討することとした。
- 6) 文部省より、申請していた平成11年度科研費「研究成果公開発表(B)」(名古屋大会時の市民講演会)が不採択となった旨の通知があった。
- 7) 4月13日午後日本学術会議において「科研費に関する地質科学関係学懇談会」が開催され、天野第一庶務委員長(科研費問題検討小委員会委員長)と水野事務局長が出席した。平成12年度分から計画されている細目の第1段階審査委員定数倍増にあたっての対応を協議し、次の結論となった。なお申請にあつ

ては下記の定数の2倍の候補者を出すことになる。

「地質学」 地質学会 5名 応用地質小委員会 1名 (ただし、地質学会では審査委員候補者の選出にあたり、応用地質分野を含み、分野のバランスを考慮する。しばらく様子を見て、応用地質関係の申請数が増加の場合には委員定数の比率を変更する)

「層位・古生物学」 古生物学会 4名 地質学会 2名

「岩石・鉱物・鉱床学」 鉱物学会・岩鉱学会・資源地質学会 各2名

また、5月10日付けで日本学術会議第4部の地質科学関係3名(鎮西・青木・斎藤3名)名により、分科「地球科学」の第2段審査委員の定数が従来の3名から6名に倍増されたことに伴う措置について連絡があり、これを了承した。各学会の推薦枠(今年度)は次のとおりである。

日本地質学会1名 日本古生物学会1名 資源地質学会1名 岩鉱学会1名 地球物理関係2名

8) 地質科学総合研連の鎮西清高委員長より5月28日付けで、科研費に関する地質科学関係学会懇談会を6月29日に開催する旨の通知があり、執行委員長で5月31日付けでこの旨を関係学会に連絡した。

9) 地球化学・宇宙化学研連委員長より5月28日付けで、平成12年度科研費審査委員候補者について細目「地球化学」第1段候補者2名以内、分科「地球科学」第2段候補者1名の推薦依頼があった。(締め切り7月12日必着)。

10) 第18期日本学術会議会員推薦のための学術研究団体登録申請書を5月18日付けで日本学術会議に提出した(受付番号:315)。

11) 八尾 昭会員より5月10日付けで執行委員会宛に、大阪市立大学学術情報センターでインターネットにより公開する「日本放散虫文献データベース(JRAD)」に地質学雑誌上の放散虫を扱った論文の英文アブストラクトを掲載することについて、公開を許可してほしいとの要望が提出され、これを了承した。

12) 地理学関連学会連合世話人より5月10日付けで、同連合の第1回総会の報告と同連合への加入の案内があった。意見交換の上、「地質科学連合に関する検討委員会」においても検討してもらうよう依頼することとした。

13) 1998年度研究奨励賞の追加授与について同年度第4回定例評議員会の結論を受け、6月の第2回定例評議員会の冒頭に受賞者に対する授与を行うこととした。

14) 自然史学会連合の斎藤靖二委員よ

り、同地質学会委員を交代し、後任として森田利仁会員(千葉県立中央博物館地質研究科)を推薦したい旨の申し出があり、これを了承した。

15) 地質科学総合研連鎮西清高委員長より6月2日付けで「地質科学関連学協会連合のための第2回会合」を7月23日(金)13:30~16:30に日本学術会議第4部会議室で開催するとの通知があり、本学会の関連委員会の小松正幸委員長に伝えた。

16) 日本学術振興会より、「日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究等)取扱要領について」の通知があった。

17) 学校科目「地学」関連学会連絡協議会に水野事務局長が地質学会委員の一人として参加していたが、阿部国広評議員に交代することを了承した。

以上の諸報告のうち、5)、14)、17)について評議員会として了承した。

(2) 第二庶務委員会

湯浅真人第二庶務委員長より次の報告があった。

1) 地質学論集の売上状況(1999年5月末現在)

No.30 (1988)	No.31 (1988)	No.32 (1989)	No.33 (1989)	No.34 (1990)	No.35 (1990)	No.36 (1990)
1500	1000	1100	1000	1000	1500	1000
1385	797	943	773	832	973	8991
No.37 (1992)	No.38 (1992)	No.39 (1992)	No.40 (1993)	No.41 (1993)	No.42 (1993)	No.43 (1994)
1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
799	794	662	657	722	738	769
No.44 (1995)	No.45 (1995)	No.46 (1996)	No.47 (1997)	No.48 (1997)	No.49 (1998)	No.50 (1998)
1000	1500	1000	1000	1000	1000	1000
501	1278	546	336	508	444	773
No.51 (1998)						
1000						
242						

1) 号数の下の()中は発行年度

2) 第1段は発行部数

3) 第2段は総売上部数

販売部数ののびていないものについては、個々の編集委員会に販売の努力をお願いするが、執行委員会としても販売の努力をしていきたいと考えている。

2) 1998年度第4回定例評議員会で刊行計画が承認された高木・武田(編)の論集標題の表記に誤りがあったので、下記のように訂正する。

正: 古領家帯と黒瀬川帯の構成要素と変遷過程

3) 下記の地質学論集の刊行計画提案書が提出された。(議題へ)

新規刊行計画 小笠原憲四郎・近藤康生(編): タフォノミーと堆積過程—化石層からの情報解読

4) 下記の地質学論集の最終刊行計画案が

本評議員会に提出される見込みである。

・宮下純夫ほか(編): 付加体形成における緑色岩の意義(97年度第4回定例評議員会で企画承認済み)

・加々美寛雄ほか(編): 本州弧下部地殻の酸性マグマの生成(98年度第3回定例評議員会議で企画承認済み)

5) 「木村克己ほか(編): ジュラ紀付加体の起源と形成過程」(98年度第2回定例評議員会で企画承認済み)について、連絡責任者の木村克己会員より6月16日付けで、編集終了まであと2ヶ月あまりの日数が必要で、編集完成見込みが9月との連絡があった。

6) ニュース誌の編集について

本年度第3回(5月)執行委員会において内規の改正案を検討したが、第4回執行委員会においてさらに検討を加え、改訂部分を含み、全文を次のようにすることとした。(改訂された内規)

1. 本委員会は地質学会ニュースの編集を行う。

2. 本委員会は執行委員会のもとに置く。

3. ニュース誌担当執行委員を第二庶務委員長とする。第二庶務委員長は執行委員会の意を受けてニュース誌全般の出版責任を負う。

4. 編集委員長は執行委員会が正会員の中から適当と思われる者を任命する。編集委員長は編集業務を統括する。

5. 本委員会は10名前後の委員をもって構成する。なお、委員の数は適宜増やすことができる。

・委員は委員長の発議により執行委員会が任命する。

・委員は地質学会を構成する各階層を網羅するように選出する。

・委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

・委員の交代にあたっては、基本的に半数交代とする。

6. 必要に応じて幹事を置くことができる。幹事は、委員長の発議に基づき委員の中から執行委員会が任命する。(現行内規)(1998年ニュース誌第1巻第4号掲載)

1. 本委員会は地質学会ニュースの編集を行う。

2. 地質学会ニュースの内容については執行委員会が責任を持つものとする。

3. 本委員会は執行委員会のもとに置く。

4. 委員長には当面副編集委員長あるいは執行委員長があたることとする。

5. 10名前後の委員をもって構成する。なお、委員の数は適宜増やすことができる。

・委員は委員長の発議により執行委

員会が任命する。

- ・委員は地質学会を構成する各階層を網羅するように選出する。
- ・委員の任期は2年とし、再任をさまたげない。ただし、連続再任期間は2期までとする。
- ・委員の交替にあたっては、基本的に半数交代とする。

6. 実務責任者として幹事若干名を置く。また、特に必要な場合には幹事長を置くことができる。

- ・幹事の任期は2年とし、再任を妨げない。
- ・幹事(幹事長)は委員の互選により選出する。

(3) 会計委員会

佐々木和彦会計委員長より次の報告があった。

1) 1999年度5月決算報告

とくに問題なし。なお、1998年度の決算内容のうち、99年度分以降の会費の前受金等の金額を整理したところ、会費前受金20,849,400円、The Island Arc預り金1,404,000円、合計22,253,400円であった。決算における繰越金は16,392,976円であったので、発生主義に基づけば、-5,860,424円の赤字となる。さらに、98年度分の未払い雑誌印刷費、各種賃借料、社会保険料等(金額未整理)があり、おそらく1千万円に近い赤字決算となる。今後の財政建て直し計画の基礎として、さらに検討を進める。

2) 本年度支部補助金(計30万円)を規定に従って次のように配分する。

北海道支部 (5.5%)	45,500円
東北支部 (7.6%)	47,600円
関東支部 (54%)	94,000円
関西支部 (19.9%)	59,900円
西日本支部 (13%)	53,000円

3) 事務所移転に伴う直接経費の処理が6月2日の丸石ビル原状回復費を支払って終了した。残額1,246,003円で、新たに泉州銀行に積立預金口座(事務所移転準備金)を開設した。

4) 日本学術振興会より4月26日付けで、平成11年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(学術定期刊行物)の交付内定通知があった。交付内定額:2,480,000円(前年度よりマイナス44万円)。5月10日付けで交付申請書を日本学術振興会に提出した。

5) 文部省学術情報センターとの間で、3月18日付けで電子図書館サービスの運用に関する申し合わせと覚え書きを交わした。

6) 学術著作権協会より平成9年度複写使用料172,908円分配の、また出版者著作権協議会より平成7、8年度分の著作権使用料として65,000円分配の通知があった。

7) 第106年年会の参加費について(行事委員会報告参照)

8) The Island Arc誌の取り扱い手数料について: 同誌編集事務局より、「The Island Arc誌の申し込み受付と講読料の取扱作業を学会事務局で開始して2年を経て、同作業がほぼルーチンで対応できるようになったことや、出版元のBlackwell Science社の同誌をめぐる厳しい財政状況も考慮して、これまでの取扱手数料7%を2000年の講読取扱分からは、同社の通常の手数料である5%に変更した方がよい」と提案され、検討の結果、とくに問題はないということでした。

(5) 会員委員会

足立勝治執行委員長(滝田良基会員委員長代行)より次の報告があった。

1) 会員の動静(5月末現在)

	賛助	名誉	正会員	院生	学生	合計
1999. 2.28	52	54	4685	540	55	5386
1999.. 5.31	51	54	4649	539	52	5345
増・減	-1	0	-36	-1	-3	-41

2) 次の入会承認を行った(敬称略)。計59名

正会員(16): 熊澤慶伯、坂崎 博、田中 豊、薪苗明義、渡邊正巳、田中亜季、金井哲男、岡崎智鶴子、菅原敏勝(以上9名、4. 19)、横山良哲、斎藤秀康、山田 晃、鈴木雅博、金城善美(以上5名、5. 17)、下柿元めぐみ、三木武行(以上2名、6. 14)

院生会員(38): 黒淵まどか、大塚隆司、惣田 隆、工藤 崇、小山裕幸、佐藤一行、林 宏佳、金成原、郷津知太郎、山田敏弘、森山 豊(以上11名、4. 19)、久保知美、鍵本亜弥、野中広美、藤原みどり、前田英樹、堀川恵司、林 美明子、赤嶺辰之助(以上8名、5. 17)、安藤勸、安原盛明、朝田隆二、横山佳史、富永好明、安多 剛、齋藤史子、タデッセ ユフネ、河村大作、吉川 潤、戸邊恵里、岩崎正吾、山武 裕、横山謙二、岡田耕作、長谷部佐智子、吉玄貴、田中菜摘、辻野泰之(以上19名、6. 14)

学生会員(5): 守山 武、河野知治、尾上哲治(以上3名、5. 17)、竹原真希、根建昭一(以上2名、6. 14)

3) 逝去者(敬称略)計5名 名誉会員(1): 高井冬二 正会員(3): 矢萩賢仁、安藤峰和、大島睦司、鶴田 修

4) 次の退会承認を行った(敬称略)。計10名 賛助会員(1): 三菱マテリアル株式会社(5. 17) 正会員(8): 卜部智美、阿部 宏、小出 潔、西村 進、矢野牧夫、田口聡史(以上6名、4. 19)、安藤五郎(5. 17)、新藤静夫(6. 14) 院生会員(1): 伊藤 光(4. 19)

5) 1996年度以降の会費滞納者(正会員

70名、院生会員8名、計78名)が、今後会費の納入のない限り、第3回定例評議員会において除籍が決定されることとなる。

(6) 編集委員会

鳥海光弘編集委員長より次の報告があった。

1) 地質学雑誌の編集状況(6月14日現在)

105-6 論説5 短報1(校正中)
105-7 論説3 総説1 短報1(入稿済み)

手持ち論文 論説13 短報4 合計17
査読中論文 53
投稿数(1999年) 論説(和文30、英文8) 短報(和文5 英文1) 討論1 合計45(昨年比-20) 口絵5(英文1 和文4)
印刷原稿は105-11まで確保されている(論説15 短報5)。

2) 編集委員会体制について

現在の編集委員は本年6月末で3年の任期が終了する。1999年度以降の編集委員候補者について、検討した。昨年12月からオンライン上での編集体制をとっており、軌道にのっている。オンライン体制では編集委員(幹事)は全国規模で差し支えない。また、これまで長期にわたる編集委員は交代するのが望ましい。さらに、投稿原稿の分野別の多少を考慮して入選を行った。候補者は別記の通りである(後出の執行委員会報告、その他参照)。

(7) 行事委員会

公文富士夫行事委員長より次の報告があった。

1) 第106年年会(名古屋大会、1999年10月9~11日、名古屋大学)

準備は順調に進行している。予告記事をニュース誌に掲載した。7月10日、24日にプログラム編成を行う予定である。

今回は市民講演会の補助金が不採択となり、財政的に苦しくなったので、執行委員会での検討の結果、不足分については受益者負担の原則を導入して大会参加費を値上げし、かつ大会当日の受付事務の合理化を計るために前納制をとることとした。参加費は下記の通りである(カッコ内は当日払いの場合)。

正会員3,000円(5,000円) 名誉会員・院生会員・学生会員1,000円(2,000円) 非会員5,000円(6,000円) ただし、前納して大会に不参加の場合には事務手数料200円を差し引いた残額を会費の一部に充当し(名誉会員を除く会員の場合)、あるいはさらに返送料を差し引いて後日返却する(名誉会員と非会員の場合)

2) 第107年総会・シンポジウム

2000年3月18日(土)~19日(日)に筑波大学大会会館で開催することが決定されている。

3) 第107年年会(松江大会)。

2000年9月29日～10月1日(金～日)に島根大学で開催、引き続き野外見学を行うことが決定されている。

4) 第108年年会(2001年秋)金沢大学に開催の可能性を打診中。

5) 中長期の課題として、下記について検討を進めていく。

・大会運営の経費の賄い方:参加費(十科研費)+講演要旨利益+学会費+寄付(ただし、学会費は、財政問題検討委員会の答申にしたがってゼロに近づけるように考える)

・講演要旨の配布方法:前渡し、CD-ROM化、オンライン化

以上の報告について、講演要旨の提出締め切り期日従来より早まったことに対して、とくに発表に関して守秘義務のある場合には期間が短いことはつらいので、予告を早める等の考慮をして欲しいとの要望があった。

(8) 国際交流委員会

磯崎行雄国際交流委員長より次の報告があった。

・WPGM2000の組織委員(小松正幸会長)、準備委員(玉木賢策会員)、プログラム委員(木村 学会員)が決定された。

・日本学術会議結晶学研連委員長・日本結晶学会会長名により「2005年国際結晶学連大会(IUCr Congress)」の日本誘致の現状の報告と、誘致決定の際における協賛の依頼があり、協賛を承諾した。本評議員会としてもこれを了承した。

(9) その他

・足立勝治執行委員長より下記の本年度常置委員会委員名簿が示され、了承された(ただし、編集委員の任期は2001年まで)。

第一庶務委員会(天野一男) 向山 栄・立石雅昭

第二庶務委員会(湯浅真人) 佐藤幹夫
ニュース誌編集委員会 高橋正樹【編集委員長】・牧野泰彦・香村一夫・渡部芳夫・多田隆治・真砂英樹・島田耕史・足立勝治・上砂正一・梅沢俊一・有田正史・三田直樹・鈴木喜計・阿部国広・蟹江康光・松岡敬二・松島義章・神戸信和

会計委員会(佐々木和彦) 上砂正一・松本俊幸・市川八州夫

会員委員会(滝田良基) 中田節也・鈴木弘明

編集委員会(島海光弘・渡部芳夫) 石井和彦・石渡 明・伊藤康人・入月俊明・榎並正樹・奥村晃史・上岡 晃・鴈澤好博・小竹信宏・佐藤比呂志・佐野弘好・塚原弘昭・辻 隆司・土谷信高・中川光弘・長谷川 卓・平野弘道・松岡 篤・松田博貴・三田村宗樹・村田明広

行事委員会(公文富士夫)(以下カッコ内は分野) 秋葉文雄(石油)・岡田

誠(層序)・安藤寿男(堆積)・後藤仁敏(古生物)・榎並正樹(岩石)・伊藤順一(火山)・木村克己(構造)・斎藤真(地域)・斎藤文紀(過程)・坂本正徳(情報)・未定(応用)・田村嘉之(環境)・西村 昭(海洋)・榎並正樹(開催校)・木村純一(次期開催校)

国際交流委員会(磯崎行雄) 木村学・丸山茂徳・脇田浩二(交渉中)

・足立勝治執行委員長から本年度会計監査候補者として長瀬和雄(再任)・青野道夫(新任)両会員を本評議員会に提案することとしたことが報告された。(議題へ)

2. 研究委員会報告

(1) 南極地質研究委員会

本吉洋一委員より文書により下記の報告が提出された。

1999年4月17日、SEAL計画(東南極リソスフェアの構造と進化研究計画)のワーキンググループの会合を極地研にて開催した。参加者16名。

1) これまでの研究経過について、石塚英男(高知大)、小山内康人(岡山大)、石川正弘(横浜国大)から概要の報告があり、また鈴木里子(総研大)、外田智千(同)からそれぞれの学位論文の内容紹介と討論があった。

2) 第40次隊調査報告:3月28日帰国した本吉洋一(極地研)から調査概要の報告があった。本吉洋一、吉村康隆(高知大)、宮本知治(九州大)、E.S. Grew(メーン大)、C.J. Carson(シドニー大)、D.J. Dunkley(同)の6名は、当初アムンゼン湾トナー島をベースにして西エンダービーランド一帯で約2ヵ月間の調査を行なう予定であったが、強風によりヘリコプターが損傷を受けたため、当初の計画は縮小を余儀なくされた。かわってリュツォ・ホルム湾のルンドボクスヘッタ、スカレピークハルセン、スカルブスネス、ラングホブデで約2週間の調査を行なった。

3) 将来計画:SEAL計画の最初の3年間で調査されたナピア岩体のユニークさならびに今後に残された問題点が鮮明になってきたことをうけ、ひきつづき調査を継続すべきとの意見が人勢を占めた。ただし、40次隊の教訓から、調査方法については今後実行可能な方式を検討していくこととした。

(2) 環境地質研究委員会

香村一夫委員より文書による下記の報告が提出された。

<シンポジウムの開催予定>

(1) 「廃棄物処分・残土処分・地質汚染」に関する国際シンポジウム

日本学術振興会鉱物新活用第111委員会主催 当委員会共催

日 程:1999年7月27日

会 場:住友海上リスク総研大ホール

(東京)

(2) 第9回環境地質学シンポジウム

日 程:1999年11月25日26日

会 場:早稲田大学国際会議場

日本情報地質学会、日本鉱物学会と共催予定(交渉中)

(1)(2)の詳細は、地質学会ニュース誌1999年6月号に掲載。

<その他>

(1) リーフレット「水循環と地質環境(仮題)」草案原稿の最終チェック中。

(2) 「上総堀りと自噴井の記念碑」建立に関して、

建立実行委員会と協力事業。今夏建立予定。

(3) Tectonic Map of Asia (CGMW) 研究委員会

渡辺暉夫委員長より文書により下記の報告が提出された。

本委員会は1995年にモスクワ大学のLeonov教授の呼びかけに応じて、日本および周辺海域のTectonic Mapの編集を中心にAsiaのTectonic Map作りに協力することで作られたものである。1996年のIGC北京大会でLeonov教授とあったが、「全体の進展が遅れているので、至急DATAを送れ」とのことであった。渡辺はとりあえず、地質調査所発行の地質図をもとに、要請されている構造区分にしたがって陸地地質を編集(個人案として)し、Leonov教授へ郵送(航空便)した。「海洋域のDATAは今送れない」とのmessageをつけた。その後、dataの質の確認や海洋域が必要かなどの問い合わせをe-mailを通じて何回か行なったが、返事はまったくない(e-mailは届いているはず)。もともと、ロシア側で発想した企画なので、提唱者から詳しい連絡(編集原家の提示など)がない以上、動きようが無い。

今後もロシア側と連絡をとる努力をするが、IGCが一つの契機であったという経過から考えて、次回のIGC(Brazil)まで待って結論をだすことにしたい。近くLeonov教授に連絡し、返事次第で日本独自の貢献を検討したい。

なお、これまではロシア側の要請に答えるために研究委員会という性格を保ってきたが、次回IGCを来年に控え、国内的に一定の結論をだすように、近く委員間で連絡しあうことにしたい。個人的には8月にロシアを訪問するので、この折にLeonov教授と連絡をとる努力はしたい。

(4) ヒマラヤ地質研究委員会

在田一則委員より、今回は報告事項はないとの連絡があった。

(5) テクトニクス研究委員会(報告なし)

(6) 「地質学と地震」研究委員会(報告なし)

(7) 地質基準委員会

新妻信明委員長より文書により第3回地質基準委員会に関する下記の報告が提出された。

日 時:1999年6月12日13:00-19:15

場所：地質学会事務局

出席者：足立勝治・天野一男・早川俊之・酒井隆太郎・水野篤行・棚倉克幹・新妻信明・滝田良基・宇田進一・上砂正一・山元孝広

1. 検討内容紹介および意見

1) 火山および火山岩について山元委員：構造試錐・物理探査・地震探査などの調査方法が入っていて性能基準になじまないのではないかと意見が出されたが、それ以外の調査方法がないのでこのままで良いのではないかとのことであった。

2) 沖積層について棚倉委員：前回までの委員会の議論の結果を反映させて大幅な変更が要請された。調査項目では、第一に「沖積層の岩相と堆積環境」（岩相には粒度組成などの地質学的岩相の他にN値や透水係数などの物性・力学的性質も含まれる）「沖積層の分布と構造」「沖積層の年代」「堆積環境の変化」（海水準変動と対応させてモデル化）「気候変化」、これは現在さかんにおこなわれている活断層のトレンチ調査と共通し、本質的に変わらない。

3) 人工地質について上砂委員：1. 人工地質体の分布 [自然地質体との境界が重要] 2. 岩相・産状 [構成物 (人工物・自然物・それらの由来)・形成あるいは構築過程] 3. 人工地質体およびその周辺の物理特性 [空隙率が不規則で大きい・粒径分布変化が顕著・不当地盤沈下および崩壊・圧密] 4. 人工地質体内の物質移動 [地下水・化学物質]

4) 深成岩について滝田委員：1. 深成岩の同定 2. 深成岩体の分布および内部構造調査 3. 捕獲岩調査 4. 深成岩体形成年代 [放射年代にする]；岩脈 [年代・内部構造を含める]；節理 [A節理の形成 (冷却・構造変形・削剥) および水理のモデル作成]；マサ

5) 断層について宇田委員：1. 断層の存在と分布の認定 [位置・幅・延長・変位・断層面形状・断層間物質] 2. 断層の活動履歴 [活断層；地質断層] 3. 断層およびその周辺の力学的性質と物質移動；裂か

6) 地すべり [「重力移動地質体」としてまとめた方が良いと思う] について足立委員：1. 重力移動地質体の分布 [A重力不安定による重力移動のモデル化 B重力不安定・荷重および地質体の変動要因 C重力不安定の定量的把握と地質体の重力移動特性把握 D既存の地質資料と地形調査による重力不安定の存在の把握] 2. 重力移動地質体および周辺の物理的性質 [過去の土石流の内部構造などを調査して、土石流流動時の流体力学的復元も含む]

3. 重力移動地質体内部および周辺の物質移動 4. 災害地図

7) 正常堆積物について酒井 (隆) 委員：他の地質体の基準、特に沖積層を参考に次回までに案を作成することとした。

2. 次回委員会

次回委員会を8月27日 (金) 13:00-18:00に地質学会事務局で開催することとした。

1) 次回回は今回検討できなかった地質体の規約の最終検討を行うとともに、今回検討した地質体規約の最終案の検討を行うので、担当者は事前にメールで全委員に送付すること。

2) 説明書の執筆項目と執筆者の確認と執筆状況の報告。各地質体A4判20頁とし、本基準を達成するための代表的な調査方法の説明およびその実例を示す図を含めることとする。この実例は各地質体について10例程度が適当と考えられるので、図を持参すること。

(8) 地層命名規約策定委員会

天野一男委員長より、「International Stratigraphic Guide」の出版については、出版社と連絡をとりながら、来年夏の出版に向けて準備を進めている。現在、訳文の全面的なチェックを行っているとの報告があった。

(9) 女性地球科学者の未来を考える研究委員会

田崎和江委員長より文書により次の報告が提出された。

名古屋で開催される地質学会において、保育所設置の準備を、清水以知子さんが中心になって進めている。希望者は清水さんに連絡を取って欲しい。地質学会のニュース誌にも詳細が掲載される。

<女性地球科学者の未来を考える研究委員会>主催の巡検を秋に行う。昨年は八甲田の酸ヶ湯のバイオマツや柱状節理などを見学し好評であったので、今年も企画する。詳細は追って地質学会のニュース誌でお知らせする。

(10) 地学教育研究委員会

佐瀬和義委員より下記の報告があった。3月27日に今年度の地学教育研究委員会の第1回目の会合を行った。内容は以下の通り。

1. 今年度の地学教育研究委員会のメンバーについて

足立久男 (忍岡高校)、阿部国広 (西有馬小学校)、会田信行 (佐原高校・定)、府川宗雄 (千歳高校)、佐瀬和義 (池袋商業高校)、柴 正博 (東海大自然科学博物館)、小林和宏 (長野西高)、小幡喜一 (埼玉自然史博物館)、赤塚正明 (学習院中高等部)、小井土由光 (岐阜大・教育、名古屋年会の連絡)、矢野孝雄 (鳥取大・教)、赤羽貞幸 (信州大・教)、久保田喜裕 (新潟大・自然環境科学)、藤田 崇 (大阪工業大・一般教育科・地学)、別所孝範

(八尾東高校)、野村 哲 (群馬大・教)の方々にお願ひすることにした。また、今後の取り組みのなかで必要となれば、メンバーを追加する。

2. 名古屋の学会時の地学教育のセッションおよび夜間小集会について

セッション「地学教育・地学史」として、世話人には佐瀬及び府川があたる。夜間小集会…地元の実践、たとえば博物館などの実践も含めて話し合えるような企画を考える。

3. 今年度の取組みについて

夜間集会などの取組みを積み上げて島根の年会のときに、シンポジウムを開く方向で考える。

(この研究委員会の後で、来年の筑波の総会のときに普及教育実行委員会と共同で地学教育に関するシンポジウムが開けないかという案がもちあがっているがこれについては、次回の地学教育研究委員会で検討の予定)

4. 地学教育研究委員会の組織的位置づけについて

地学教育に関する諮問と実践の両方を兼ねているので、組織図の下位のほうに位置つけるのではなく、評議員会・執行委員会の下に直接つくかたちがよいとの意見が多かった。

(11) 研究企画委員会 (報告なし)

(12) 各賞問題検討委員会

1998年度検討委員会の嶋本利彦委員長より、ニュース誌投稿原稿として1998年度活動報告が提出された。

(13) 各賞選考委員会 (報告なし)

(14) 地質科学連合に関する検討委員会

小松正幸委員長より次の報告があった。

検討委員会を近く開催する予定である。地理関連学会への参加の検討を依頼されているが、個人的には賛同学会として加入するのが妥当と考えている。その方向で検討を進めたい。地質科学連合については、前回の会合で各学会に対して出された検討課題をあらためて検討するが、結成されれば参加することとしたい。意見があれば、寄せて欲しい。

以上に対して、地理関連学会連合に対して賛同学会として加入する方向で検討を進めることに関しては、とくに異議は出されず、賛成多数で承認された。

(15) 事業計画委員会

坂 幸恭委員長より次の報告があった。

本年度第1回会合を6月21日に行い、本年度活動方針とその具体的な進め方について検討した。

1) 名古屋大会後、第3回定例評議員会前の適当な時期に、法人化についての公聴会を持つことが望ましい。主催や形式については評議員会に諮る。

2) 臨時及び第3回定例評議員会では、具体的には定款を含めて法人としての組織・運営形態を提示、説明することになる。そのためには、会則細則等改正委

員会をはじめとする他の委員会の審議の進捗を見守る必要がある。

- 3) 第4回定例評議員会における最終的な可否の審議とは、実質的にはこの問題についての評議員会としての統一見解を得ることである。
- 4) 2000年度(第107年)総会における報告の形態、内容については現段階では未定。
- 5) 2001年に予定されている文部省と科学技術庁との統合を控えて、その前年度に第1回折衝に入ることができるかどうか、あるいは統合後の組織改編を考えると、2000年度の予備的折衝が実効性のあるものになるかどうか、について疑問がある。
- 6) 法人化を進めている地すべり学会には、主務官庁となる科学技術庁からかなり細かい指示・指導がなされている旨、青木委員より情報提供がなされた。
上記報告に対して、組織運営問題、会則等の改正の問題との関係について質問があり、任意団体としての日本地質学会の会則等と法人の定款とは性質の異なるものであるが、事業計画委員会としては会則・運営細則等改正委員会の結論を待っている状況である、との回答があった。
- (16) 会則細則等改正委員会(議題へ)
- (17) 名誉会員検討委員会

徳岡隆夫委員長より、1997年度第3回定例評議員会(1997.12.20)から1998年度第4回定例評議員会(1999.3.25)までの名誉会員に関する議論、本名誉会員検討委員会(徳岡隆夫委員長、手塚裕樹・三宅康幸・佐瀬和義委員)設置の経過、併せて1943年以降の名誉会員に関する規約上の扱い、名誉会員数の変更、他学会の名誉会員についての規定の状況等が資料により、詳しく説明された後、今後検討委員会として検討すべき問題点が次のように挙げられた。

- ・会員に限定することの確認。
- ・数を制限することの是非(名誉会員とはそもそも何かを議論する必要がある)。
- ・会則の再検討(「地質学について顕著な功績のある者」とされているが、「地質学会の発展に顕著な功績のある者」を加える必要はないか)。
- ・名誉会員の他に特別(功労)会員といった制度をつくる必要はないか。
- ・現行内規の見直しの必要性(財政的理由を含めて)「[地質学についての功績を]を押し量る基準の必要性、[70才以上]でよいか、[会長・副会長、評議員を2期以上務めた人]を拡大する必要はないか」、その基準を一部あるいは全て撤廃するほうがよいのではないか。
- ・支部推薦制度の再検討。
- ・名誉会員の権利・義務等。

今後さらに詳しい資料を整えて、次回の評議員会の討議資料としたいと考えている。

以上の報告に対して、名誉会員からも意見をきいてはどうか、との助言があった。

3 日本学術会議報告

斎藤常正学術会議会員より文書により下記の報告が提出された。

- 1) 日本学術会議第130回総会(1999年4月21・22日)

(1) 勧告「IGBPの促進について」の採択。IGBPは、1992～1996年度の5年間に前期計画として8つのコアプロジェクトを実施し、1997～2001年度には後期計画としてコアプロジェクト1つを実施中である。最近では、IGBPプロジェクトの成果が国際レベルでの政策決定に反映されつつある。IGBP執行部は、この計画を上記の2期で終わらせることなく、今後も引き続き実施することを決定している。そこで、学術会議は政府に対し、「IGBPへの分担金(19万米ドル)を引き続き拠出し、わが国におけるIGBP関連の研究の促進、国際対応、研究者の養成などの体制の維持、予算などの措置をとっていただきたい」旨の勧告を行ったものである。この議題は、2月の連合部会で趣旨説明がなされ、本総会で異議なく採択され、直ちに内閣総理大臣に手渡された。

(2) 日本学術会議の自己改革に関する自由討議。今年2月の連合部会で、吉川日本学術会議会長から提案された“学術会議の改革案”を、各部とも真剣に受けとめ、臨時部会を開いて議論した部会もある。この提案については2月末日をもって、各部・各会員から意見書が出されていて、会長はこれらを勘案して、10月の総会で改革案を提案する予定との意思表示があった。今回の総会では、学術会議の組織・運営を扱う第一常置委員会における討議状況の報告、第1、2、5部からの意見発表があった。

第一常置委員会は、学術会議と総合科学技術会議との関係、学術会議が所属するのは政府内のどの省庁であるべきか、の2点について緊急に議論すべきだと考えているとの報告があった。

この他、会議場で発言された個々の会員からの意見に対して、会長からの答弁があった。

(3) 日本学術会議の国際対応のあり方について。日本の科学者を代表する機関として、学術会議は、日本学術院に代わって国際対応の窓口として活動するとの現状認識がなされ、2000年に東京で開催されるインターアカデミーパネルや1999年10月と2000年5月に東京で開催されるアジア学術会議など学術会議が主催する国際会議の準備状況が報告された。ついで、このような学術会議の国際対応の進め方について自由討議が行われた。

- 2) 第4部会(1999年4月20・21日)

今回は、学術刊行物の認可、各関連会議の日程など日常的な決定のほか、主とし各種報告と意見交換が行われた。

(1) 日本学術会議改革案については、3月9日に第4部拡大役員会を開いてそれまでに第4部会員から寄せられた意見を整理して会長に提出した。また、4月21日に自由討議を行った。第一常置委員会のまとめは、上記報告の(2)のとおり、その他の主な議論には：学術会議は研究者の立場から意見を述べる機関である、政策案を出す組織であるべきだ、影響力を及ぼしながら独自の立場を貫くべきだ、及び研究者の声を伝えるパイプであり国際的な連絡の役割も重要、など。

(2) 2001年開催の国際会議の学術会議との共同主催。8件の予算措置に対して、今回は15件の申し込みがあり、各部における評価順位と「国際会議等検討委員会」によるヒアリングの結果を併せて順位を決めたとの報告があった。しかし、第4部の評価で1位、3位で推した会議、第5部が2位で推した会議などが落選し、なぜそのような結果になったかが問題にされた。検討委員会に出席した第4部の会員から“ヒアリングの際の説明の巧拙”が決めた手ごたえとの報告に対して、今後各部の推薦順位を重視する方向に是正すべきとの意見が強く出された。地質科学の分野では、第7回古海洋会議が採択され、ゴンドワナシンポジウムは採択漏れとなった。

(3) 科学研究費の基盤研究、萌芽的研究、奨励研究、研究成果刊行費の審査業務が、平成11年度より、日本学術振興会に移管され、それと共に国際学術研究の種目が廃止された。移管された各種目の第2段審査委員、第1段審査委員は、それぞれこれまでの約2倍と増員され、今年4月19日付けで学術会議宛に審査委員の推薦依頼があった。分科「地球科学」では、2段委員が3名から6名となり、7細目それぞれについて、1段委員が3名から6名となった。なお、国際学術研究が基盤研究の中に含まれることに伴い、海外調査の採択決定が、従来前年の秋であったものが当年4月となり、夏前の調査がほとんど不可能になるので、学術会議から善処方を学振に申し入れることについて説明があった。

地球科学系分科細目の第1段審査委員の増員については、従来行われて来た“5学会”による懇談会を4月13日に開催して推薦依頼学協を決定した。第2段審査委員については、4月19日付けで学術振興会から学術会議に依頼があり、4月30日までに報告するよう連絡があった。各学会などに検討を依頼する時間的余裕がなかったため、地球科学系3名と地球物理学系2名の5学術会議会員の間で相談し、従来の配分を参考にしながら、

主として申請件数に応じて配分を決めた。

なお、4月27日付けで、学術会議の第4常置委員会から、今後は、審査委員の推薦は、関係学協会に直接依頼するのではなく、全て研連を経由して行うことになった旨の通達があり、平成12年度の審査委員について推薦依頼先を5月21日までに報告するよう依頼があった。

- (4) 「わが国の大学等における研究環境の改善について（第4常置委員会報告の中間のまとめ）」の内容の報告があり、意見交換があった。この報告の強調点は、大学等における深刻なスペースの不足と建物の老朽化である。

4. 各研究連絡委員会報告

(1) 地質学研連

- 1) 斎藤常正研連委員長より第17期第5回会合に関して次の報告が文書で提出された。第17期第5回

日時：平成11年3月4日 13:30～17:00（日本学術会議第4部会議室）

出席者：斎藤常正、青木謙一郎、岩松暉、小川勇二郎、木村 学、小玉喜三郎、佐倉保夫、徳岡隆夫、新妻信明、西脇二一、廣井美邦、八尾 昭。

欠席者：足立 守、天野一男、高島 勲。
議題：

- (1) 第4回委員会議事録の確認。
(2) 理学データネットワーク推進小委員会委員の推薦について：2月18日開催の学術会議第4部会、部付置の小委員会として本委員会の設置が承認された。地球科学系の研連では、地質研連がその代表1名を選出することになり、西脇二一氏を推薦した。
(3) 地質科学関連学協会の連合体の結成について：「連合体結成の是非」を議論する会議が、地質科学総合研連の鎮西委員長の呼びかけにより、明日3月5日に開催される。これについて意見交換が行われたが、明日の会議の結果を見守ることになった。
(4) IUGSのR.B. Brett会長から、2月22日付けで、日本国内委員会に宛てた緊急アピールについて委員長から紹介があり、意見交換が行われた。ユネスコの財政逼迫から、ユネスコ内のInternational Geological Correlation Program (IGCP) 担当の事務局長の職が廃止される事態が起こっている。これに反対する声明をユネスコに送っていただきたいというものがある。これについては、委員長が、学術会議のIGCP専門委員会の委員長と連絡をとり日本から反対声明を出す方向で対処することとした。
(5) 2月18日に開かれた、学術会議連合部会・第4部会について青木委員より報告があった。平成11年度国際会議代表派遣の第4部における採択予定

は、第一区分（政府が分担金を支払っている会議への代表派遣）は6件でINQUAへの派遣を含む。第2区分（同上の国際会議役員会への出席）は2件、第3区分（その他の会議）は補欠も合わせて12件である。11年度は、古生物研連と地質科学総合研連〔特に第四紀学会関係〕から推薦された研連委員に旅費が配分される。

- (6) 吉川学術会議会長が提示した「日本学術会議改革案」の紹介があり、意見交換があった。学術会議会員ならびに各部から出された意見は、2月末日までに、各部長経由で、文書で提出されることになっている。

- (7) 学術用語集（地学編）の改版について：改版にむけた作業を、平成12年度に科学研究費を申請して行ってはなどの、実現に向けた方策についての意見交換があった。

- (8) 21世紀の地質科学の発展に向けた方策に関連して、新妻委員から、地質基準策定の進行状況が報告された。

- (9) 3月4日の午前中に開催された地質研連付置の「陸上科学掘削計画(ICDP)小委員会」について委員長から報告があった。斎藤委員長がこの計画のScience Advisory Groupに、日本の代表委員の一人として加わることになり、4月5日ハワイで開催予定の同会議に出席の予定である。

- 2) 天野一男研連委員より第17期第6回会合に関して次の報告が提出された。

第17期第6回地質科学研究連絡委員会・議事録（案）

日時：平成11年6月2日（水）
13:30～17:00 日本学術会議第4部会議室

出席者：斎藤常正、青木謙一郎、足立 守、岩松 暉、加藤碩一（小玉喜三郎代理）、佐倉保夫、高島 勲、徳岡隆夫、新妻信明、西脇二一、廣井美邦、八尾 昭、小川勇二郎、天野一男

欠席者：木村 学

議題：

- (1) 第5回議事録の確認は、次回に今回の議事録とともに確認する事となった。
(2) 日本学術会議の改革について：日本学術会議の改革に関する動きが青木委員より報告され、意見交換を行った。2月に吉川会長が提案した学術会議改革案に対して、現在各部・各会員より意見が寄せられており、吉川会長がそれらの意見をまとめている。10月の総会には改革案が提案される予定である。
(3) 科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦方法について：以下の点が青木

委員より報告され、審議の後、了承された。平成12年度の科学研究費の審査員数が現在の倍になることに伴う各学会の推薦枠変更については、第1段審査委員は例年どおり5学会の代表者による話し合いで決定した。第2段審査委員については、5学会に諮っている時間が無かったため地球科学関連の学術会議会員5名による話し合いで決定した。その際、過去の申請件数が考慮された。近年、地質、層序・古生物関連の申請件数が減少してきているが、申請件数を増やす努力が必要であることが確認された。

- (4) 地質科学関連学協会の連合体の結成について：天野委員より地質科学関連学協会連合体の結成についての現状が報告され、意見交換がなされた後、連合結成に向けて具体的な内容を早急に検討する必要性が確認された。なお、現在、各学会で連合体の組織・目的・必要性等について検討されており、7月末までにそれらの結果を持ちよって話し合いがなされる予定である。

- (5) 理学データネットワーク検討会について：西脇委員より日本学術会議理学データネットワーク小委員会の活動状況が報告され、本研連でも積極的に協力することが確認された。なお、小委員会では、現在、データベースを保有している研究所等にアンケート調査を実施中である。

- (6) 学術用語集（地学編）の改版について：本件について文部省から得られた情報が斎藤委員長より報告された。改訂にあたっては学術審議会での審議が必要であり、現時点では先行するものが4-5件あり、地学編改版発行は2年半後まで不可能であることが分かった。しかし、用語集の発行は基本的に重要な事柄であるので、2年後をめざして各学会で検討を続けることとした。

- (7) IGCPワーキンググループへの委員の推薦について：IUGSよりIGCPワーキンググループへ委員の推薦依頼が来たが、下記のように推薦することとした。なお、推薦の締め切りは9月1日までに、他にも適任者がいる場合は斎藤委員長に連絡することとした。○層序・古生物：岡田尚武（北海道大）、○鉱床・地球化学：田崎和江（金沢大）、有馬 眞（横浜国大）、○テクトニクス：小川勇二郎（筑波大）

報告・その他：

- (1) 日本学術会議総会（1999年4月21・22日）の報告が青木委員よりなされた。
(2) 環境と水に関する国際シンポジウム（1999年1月12～14日）が千葉大との協賛で行われたことが、佐倉委員

より報告された。

(3) 21世紀の地質科学の発展に向けての各学会の活動が報告された。地質学会からは地質基準の策定とInternational Stratigraphic Guideの訳本の出版について、応用地質学会からは応用地質用語集の出版についての現状報告があった。

(2) 鉱物学研連、及び鉱床学専門委員会との合同会議（報告なし）

(3) 鉱物学研連鉱床学専門委員会

石渡 明委員より第17期第6回委員会について、文書により下記の報告があった。
期 日：1999年6月15日（火）

15:45～17:00

場 所：日本学術会議第4部会議室（6階）

出席者：島崎英彦（委員長）、石渡 明、上野宏共、渡辺 洵、松枝大治（以上5名、欠席：溝田忠人、中嶋 悟、千葉 仁、根建心具）

鉱物学研究連絡委員会・鉱床学専門委員会合同会議に引き続いて、鉱床学専門委員会が行われた。

（議事）

1) 対外報告（案）について

これまで検討を行ってきた対外報告（案）「我が国における鉱床学の研究・教育の推進について」がほぼ完成した。多少の修正を施して出来るだけ早急に完成し、研連報告書として提出することになった。また、関係諸学会誌にも本報告書を掲載して貰うこととした。なお、先行して行われた鉱物学研究連絡委員会・鉱床学専門委員会合同委員会で、本報告書を連名で提出することが了解されている。

（諸報告）

1) 科学研究費について

これまで文部省が行ってきた科研費審査業務を、本年度から日本学術振興会へ一部移管することに伴い、一段・二段審査委員数がほぼ倍増することになった。学術振興会では、今後審査委員の推薦は学会からではなく、日本学術会議の研究連絡委員会より推薦して欲しいとしている。この件に関して、本年度は6月29日開催予定の五学会連合の会議で調整し、世話役の研連をそこで決定する事になる見通しである。なお、出来るだけ従来のやり方をこわさないようにとの申し入れは行っている。

2) 理学データベース・ネットワーク構築について この件に関しては、直前に行われた合同会議で配付された資料を基に意見交換を行った。主な意見等は以下のようである。

・各学会が、刊行雑誌の初刊からの発表論文名・キーワード等を整理してデータベース化する（地質調査所などでは実績がある）。

・博物館・資料館関係では標本データベ

ース化が始まっており、大学博物館相互のネットワークシステムの構築が始まっている。

・岩石・鉱石・鉱物などの化学分析値に関するデータベース化が必要である。当面は、河村雄行鉱物研連委員からの情報を得ながら対応していくことにした。

3) 中嶋 悟（東工大）委員より鉱床学専門委員会委員の辞退願いが出され、委員を交代することで了承された。

4) その他

・国内における大学総合博物館関係の整備状況の説明があった。

・Resource Geologyの国内外からの投稿件数が少なく、周囲にも投稿を勧めて欲しい旨の要望があった。

・既に行われた地物関係の雑誌統合および来年に予定されている鉱物学会と岩鉱学会の雑誌統合の状況が紹介された。

・次回の鉱床学専門委員会は、11月12日（金）合同会議後を予定。

(4) 地球化学・宇宙化学研連（報告なし）

(5) 海洋科学研連（報告なし）

(6) 国際学術協力事業研連

IGCP専門委員長 土 隆 一より文書により下記の報告が提出された。

平成11年5月12日に日本学術会議において第17期第3回委員会が開催されたので報告する。

1. かねてからの申し入れにもとづき、STPP（太陽系物理学プロジェクト）専門委を本研連のもとに設立することを了承した。

2. WCRP（気候変動国際共同研究計画）専門委にCEOP（アジアモンスーン地域におけるCEOPプラン）小委を新設することを了承した。

(7) 古生物学研連

井本伸広委員より第17期第6回委員会における審議事項について下記の報告があった（日本学術会議総会、第4部会報告は省略）。

議題：古生物タイプ標本データベースについて

前回の検討結果をもとに、記載する項目をさらに明確に例示し、各タクサの責任者に作業を依頼することとした。原稿締切は平成12年3月末とし、12年7月頃を目処に成果の刊行を目指す。

(8) 第四紀研連（報告なし）

(9) 地質科学総合研連

鎮西清高研連委員長より文書により下記の報告が提出された。

3月以降本研連は、研連を1回開催、また地質科学関連学協会連合の問題、科学研究費の審査委員の問題について活動した。

[1] 地質科学総合研究連絡委員会（第17期第6回）の開催

平成11年5月27日（木）午後、日本学術会議第4部会議室で開催。出席者は青

木謙一郎、池谷仙之、太田陽子、斎藤常正、末野重穂（代理島崎英彦）、鎮西清高、野津憲治、吉岡竜馬、の8名。

(1) 日本学術会議総会

（1999年4月21・22日）の報告

1) 勧告「IGBPの促進について」の採択

2) 日本学術会議の自己改革に関する討議：2月の連合部会で吉川会長が提案した学術会議の改革案について各部において討議がおこなわれ、意見書が出されている。会長は10月の総会でそれらの意見をふまえた改革案を再提案する予定。

(2) 第4部会（1999年4月20・21日）の報告

1) 学術会議改革案への対応：第4部会員からの意見を整理し会長に提出した。

2) 2001年の国際会議の共同主催：今年度は15件の申込み中8件を採択、地質科学では第7回古海洋会議が採択され、ゴンドワナシンポジウムは採択漏れとなった。

3) 科研費の審査について：国際学術研究が基盤研究の中に吸収されるため採択決定が遅くなるので、海外調査の時期を失する恐れがあることにつき、善処方を学術会議から学振に申し入れることについて説明があった。

(3) 日本学術会議の改革案について

日本学術会議は科学政策の立案に直接コミットするのではなく、長期的視点で学術の立場から発言するのが重要ではないか、という意見があった。

(4) 地質科学関連学協会連合についての審議

先の関連学会代表者会議における討議では、各学会には積極的なところとその意義についてやや懐疑的なところがある。主要学会が脱落した形で連合を発足させるのは好ましくない。とにかく何らかの組織をつくるのが肝心で、本研連としてはどのような形にせよ組織を発足させることを目標として活動することとなった。

(5) 科学研究費補助金の審査委員推薦について

今後学会でなく研連に審査員の推薦を依頼することとなったが、地質学鉱物学関係では、従来の推薦方針を継承するという前提があれば、地質科学総合研連が窓口になるのがよい、ということになった。

(6) 科学研究費の時限付き分科細目の推薦について

時限付き分科細目は現在自然史科学が3年目になっており、13年度以降の候補として第4部から1位で「生物多様性」が推薦されている。地質科学関

係でもその後のテーマを推薦することが望ましい。第四紀研連では第四紀学関連の細目を推薦することを前提に検討を始めた。この問題は、関連分野の申請件数への影響など慎重な検討が必要なので、来年度を目指し、第四紀研連と連携して検討することとなった。

[2] 地質科学総合研連の活動

(1) 科研費業務の一部が日本学術振興会に移管されたことに伴い、さまざまなあわただしい動きがあった。

3月8日に第4常置委員会から、第1段審査委員が6名になると想定した上でその推薦方法を検討し、4月30日までに報告するよう依頼があった。これを受けて、地質科学関係3名の学術会議会員が中心となり、4月13日、関連5学会および地質科学総合研連委員、が集まって対応を検討。従来の各学会に対する委員推薦数をほぼ倍増することで意見の一致を見た。

その直後、4月19日付で、日本学術振興会より学術会議あて第2段委員も倍増で推薦するよう正式の依頼があった。すなわち分科「地球科学」の第2段審査委員が従来の3名から6名に増員された。これについては各学会等に検討を依頼する時間的余裕がないので、学術会議会員3名が中心となって地球物理学研連の2名の会員と相談し、細目の数と最近の申請件数を参考に、とりあえず平成12年度向けの委員配分案を作成した。これについて関係学会等に事情を説明して了解を求めた。

なお、4月27日付で第4常置委員会から、今後は審査委員の推薦は関係学会に直接依頼するのでなく、全て研連を経由して行うことになった旨の通達があった。これについては上記、研連での討議報告を参照されたい。

(2) 地質科学関連学協会の連合体設立準備に関わる活動

地質科学総合研連からの呼びかけで、去る3月5日午後学術会議で学会代表者の会合を開いた。13学協会(及び1学会から欠席通知)が集まり、連合体の必要性、組織運営等について意見を交換した。各学会には結成に積極的なところとその意義についてやや懐疑的なところがある。主要な発言内容は次の通り。連合の活動目的として、1) 学術活動が中心になるべきだ、2) 合同学術大会を開くと既存のものと同重複し負担が大きすぎる、3) 情報交換を主とする、4) たとえば教育や普及など、学術活動の基盤を固めるような活動、5) 地質科学の社会的責任を果たす、また産業界における地質科学の地位向上のための活動、など。組織として、1) 自由意志で加盟、ゆるい連

合体とする、2) 運営のため大きな学会に協力してもらおうとよい、3) 日本の地質科学を代表する組織になってほしい、などがあった。この連合体が何をやるか見極めた上で学会としての態度を決めたい、という発言もあった。次回には、連合体に参加するかどうか、連合を組織して何をやるか、について各学会の考えを持ち寄ることとし、7月23日に開催することとなった。

主要学会が脱落した形で連合を発足させるのは好ましくなく、とにかく何らかの組織をつくるのが肝心で、本研連としてはどのような形にせよ組織を発足させることを目標として活動することとなった。

(10) IGCP 専門委員会

土 隆一専門委員長より文書により下記の報告が提出された。

平成11年6月8日(火)、日本学術会議においてIGCP専門委員会・同小委員会合同会議(第17期 第5回)を開催したのでここに報告する。

1. 本年2月1日～4日にユネスコ本部で開催された第27回IGCP理事会において、日本から推薦した提案のうち下記が新しいプロジェクトに採択され、本年から5年計画で活動することとなった。

IGCP-434 「Land-Ocean Interactions during the Cretaceous in Asia」(1999-2003) (白亜紀の炭素循環と生物多様性の変動) 代表者: 早稲田大学教授 平野弘道

2. IUGSからの依頼により、IGCP本部理事会メンバーの欠員に対して、日本から若干名の候補者を推薦することとした。

3. 次回は平成11年9月14日(火)に開催の予定。

5. 各種委員会報告

(1) 科研費問題検討小委員会

天野一男委員長より次の報告と要望があった。

1) 平成12年度から、日本学術振興会が科学研究費補助金交付業務のかんりの部分を行うことになった。これに伴って生ずる変更点について情報を収集し、対策を考えた。これらの情報をニュース誌(本年6月号)を通じて会員に知らせた。なお、今年度から審査委員の数が各細目で3名から6名に変わったが、第1段審査委員の地質学会への配分は、細目「地質学」で5名、細目「層位・古生物学」で2名であった。第2段審査委員は1名である。また、地球化学・宇宙化学研連委員長より地質学会宛に細目「地球化学」第1段審査委員候補者2名以内、分科「地球科学」(地球化学関係)第2段候補者1名の推薦依頼があった。これらの委員は第2回定例評議員会での選挙(議題)で決定されるが、そのための候補者の選出を行い、審査委員候補者名簿を作成し

た。

2) 上記変更に伴い、科研費「国際学術研究」が廃止されて「基盤研究」に統合されることとなった。これは海外において学術調査を行ってきた研究者にとっては重大な不都合な問題点を含んでいるもので、日本霊長類学会はすでに文部省学術国際局長・日本学術振興会会長に対して、問題点の指摘とあわせて意見書を提出した。自然史学会連合からも、本学会を含む加入学会に対して、意見書を提出して欲しいと要望されている。本意見書については、まだ草稿ができていない段階であるが、急を要する状況にあるので、本評議員会として、意見書を出すことを承認して欲しい。

国際学術研究の問題に関する意見書については、提出することを承認し、具体的な面については執行委員会に一任することとした。

その他、「文部・科学技術庁統合後、科研費は科技庁に移る可能性があり、科研費小委員会としてそのような大きな流れをつかんで対応策を考えて欲しい」との発言があった。

(2) 地質学普及教育実行委員会

高橋正樹委員長より次の報告があった。

普及教育実行委員会では、普及教育検討委員会設置以来5年間にわたって様々な普及教育事業の立ち上げを試みてきており、一定の成果を上げてきた。しかし、1年毎に設置される臨時委員会としての活動はすでに限界にきており、組織改革による、常置委員会のすみやかな設置を要望したい。今後、地学教育研究委員会と協力して、きたるべき常置委員会の内容についての検討を進める予定である。以下に、現在進行中の諸事業を紹介する。

(1) 普及出版事業(日本地質学会編の刊行物) A. 中学校理科分野教科書指導書刊行(刊行委員長: 徳岡副会長)(東京書籍) B. 一般向け普及図書「地震列島の不思議100話」(刊行委員長: 坂副会長)(東京書籍) C. 大学一般向け教科書「シリーズ: フィールド・ジオロジー」全9巻(編集委員長: 秋山前会長)(共立出版) D. 国立公園地質ガイドリーフレット(計画中)(環境庁との提携模索中)

(2) 「青少年のための科学の祭典全国大会」への協力参加 (財)日本科学技術振興財団からの協力依頼に応じて、昨年より参加している。本年度は、太古の地球への招待: 箱根火山の噴火の歴史をたどる(阿部国広ほか)、同: 化石のレプリカをつくりましょう(神戸信和ほか)が予定されている。現在準備中で、7月30・31日の両日、科学技術館で行われる。以上の事業を進める上で、やはり日本地質学会が任意団体であることが、様々な障害となっていることは否めない。法人化を含めた、何らかの今後の対策が必要で

あろう。

なお、本年度執行委員会のなかに普及教育関係の担当がないので、ぜひ担当を設けて欲しい。

上記報告に対して、出版社からの普及書に日本地質学会の名前を出すかどうかについて、若干の意見交換があったほか、今後の小学校の地学教育が環境教育とどのように関わっていくかの観点で考えることが必要、小・中の理科教員にいかんにか地学に興味を持ってもらうかの観点が必要、などの意見が出された。

(3) インターネット運営委員会

天野一男委員長より、「現在順調に運営されている・来年度での半数交代のための準備も開始した」との報告があった。

(4) The Island Arc 編集委員会

徳橋編集事務局長より下記の報告があった。

- Volume 8, Issue 1は配布済み(目次は添付資料参照)。
- The Island Arcの投稿原稿進捗状況(6月16日現在)

1999年新規受付	22編
内訳 特集号関係	5編
Comment	1編
その他	16編
1998年投稿論文で査読中のもの	2編
1999年投稿論文で査読終了(特集号関係)	5編
1999年投稿論文でリジェクト	1編
1999年投稿論文で査読中のもの	16編
- 秋の地質学会の折に、執行委員会と協力の上、2000年(Vol. 9)からの新規購読者拡大運動を展開予定。皆様の積極的なご協力をお願いしたい。

6. 関連外部委員会報告

(1) 学校科目「地学」関連学会協議会

佐瀬和義委員より第18回連絡協議会に開して次の報告があった。

日時：1999年6月16日、(地質学会からの参加者 水野、阿部、佐瀬)

A. 各学会からの報告

参加各学会の今後の日程などの報告の後、日本天文学会の代表から学会開催中の保育所設置に関する取り組み、およびバリアフリーの天文教材開発の取り組みの紹介があった。

B. 議題

- 「地学教育情報」の発行について
年2回(9月、3月)の予定で、各学会の年会、講演会、地学教育関係のシンポジウムなどの情報をメールなどで流す。
- 今後の協議会の活動の方向について
新指導要領についての議論の結果、次の協議会までに参加各学会で以下のことについて検討することになった。
■次々回(2015年頃、理科科目の再編で地学が消える?)の指導要領の改訂に向けてどのようにアプローチ

するか?(これは重要な問題で、地質学会全体として考えていく必要がある)

■それぞれの学会がかかわる分野で、学校教育の中でもっとも重視すべきだと考えているのはどのような内容か。

■センター入試の中での「地学」の位次回協議会の日時(予定)：

9月22日(水) 18:00~20:00

(2) 自然史学会連合

斎藤靖二委員より、文書により次の報告があった。

本年度の自然史学会連合シンポジウムは、自然史学会連合・日本学術会議50周年記念・合同シンポジウムとして、「自然史博物館の原状認識と将来像の提示」の基本テーマのもとに、下記のように開催する企画が進行中である。

「博物館の21世紀」—ナチュラリヒストリーの未来—

主催：自然史学会連合・日本学術会議ミュージアム小委員会

後援：国立科学博物館

日時：10月16日(土)

13:00~16:30

国立科学博物館新宿分館

研修館4階講堂

詳細プログラムは、別途ニュース誌に掲載の予定である。

そのほか、昨年来の連合のアクションプランとして地域博物館の研究環境を改善するべく活動を展開している。今後、各学会の意見・協力をお願いして行きたい。

(3) 地球惑星関連学会連絡会

公文富士夫委員より下記の報告があった。

第17回連絡会が4月21日に、第18回連絡会が6月10日に開催され、担当執行委員の公文行事委員長が出席した。以下の2点が主要な議題であった。

・合同大会等の開催予定とそれへの対応

1999年合同大会：6月8~11日 国立オリンピック記念青少年総合センター(北大担当) 一般参加者1460、学生・院生参加783、講演件数1593で成功裏に修了
2000年合同大会：6月25~28日 同上会場(九大担当) 大会委員長：柳 哮、地質学会との窓口：佐野弘好

2000年WPGM：6月27~30日 同上会場組織委員会(小松正幸)、プログラム委員会(木村学)、実行委員会(玉木賢策)が発足し、括弧内の方に地質学会からの委員を依頼した。また、WPGMに関する執行委員会の中の担当を磯崎国際交流委員長とすることとした。

・連絡委員会の規約改正問題と2001年以降への準備

98年度から議論されていた規約改正が17回の連絡委員会で提案され、地質学会執行委員会でも審議された。地質学会執行委員会内では大筋問題ないとされ

たが、18回連絡会では、規約改正に対して硬軟の反対意見が出され、まとまるに至らなかった。

連絡会の強化と2001年以降の合同大会への準備の必要性は共通の認識となったので、元の規約に則った運用の工夫として、会長、庶務、会計等の役職を設け、適切な方に引き受けてもらうことにした。会長には大谷栄治(岩鉱学会)が選出され、新しい体制ができた。

(4) 地球環境科学関連学会協議会(報告なし)

(5) 21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム

八尾 昭委員より文書により次の報告があった。

表記フォーラムを2000年7月29日(土)にメルパルク大阪(郵便貯金会館)で開催することが決まった。この大会の成功に向けて、前回の報告(3月25日、1998年度第4回定例評議員会)以降、実行委員会が2回(4月10日、5月8日：次回6月20日予定)開かれ、次の項目に関して検討が進められた。

- フォーラムの構想：記念講演、各分科会、総合討論、体験型イベント、地学教材コンテスト、地学教育普及パネル展示など。
- 分科会：当面次の4の分科会を設置して検討を進める。(1)学校教育を主とする市民共通知識としての地学の教育 (2)専門家(大学専門課程、研究者、関連官庁、企業人)養成・向上としての地学の教育 (3)社会教育・生涯教育としての地学の教育 (4)総合・フリートーク・連絡・その他
- 会則
- 学校地学関連学会協議会との関係：協力関係とする。
- 財政確立のための活動

議題

- 科研費配分に係る審査委員候補者の選出
天野一男科研費問題検討小委員会委員長より、同小委員会が作成した審査委員候補者名簿が提示され、この名簿に基づいて投票を行い、所属機関に重複がないように調整して、それぞれの分科・細目ごとに推薦順位を決定した。結果は次の通りである(番号は順位を示す)。

[地質学1段](10名選出)

- ①天野一男 ②井内美郎 ③増田富士雄 ④吉田武義 ●⑤三宅康幸 ⑥酒井治孝 ⑦板谷徹丸 ⑧高木秀雄 ⑨吉田 勝 ⑩渡辺暉夫

[層位・古生物学1段](2名選出)

- ①磯崎行雄 ②小笠原憲四郎

[地球科学2段](2名選出)

- ①足立 守 ②伊藤谷生

[地球化学1段](2名選出)

- ①矢内桂三 ②西山忠男

〔地球科学2段(地化研連関係)〕(1名選出)

①加々美寛雄

2. 1999年度日本地質学会会計監査の選出

足立勝治執行委員長より本年度会計監査として、長瀬和雄(再任)・青野道夫(新任)両会員が提案され、異議なく承認された。

3. 1999年度日本地質学会各賞選考委員の選出

昨年度と同じく、岩石・年代、構造地質、層序・堆積・古生物、環境・応用地質の4分野ごとに、評議員から12名の候補者が推薦され、投票の結果、本年度各賞選考委員として、高橋正樹・鳥海光弘の98年度、99年度編集委員長以外の、次の8名の評議員が選出された(アルファベット順)。

天野一男、磯崎行雄、板谷徹丸、楡井久、立石雅昭、田崎和江、吉田武義、吉川周作。

4. 各賞問題について

足立勝治執行委員長より1999年度各賞問題検討委員会委員として、所属分野を考慮した次の7名の候補者が提案され、また1998年度委員会で出された各賞問題に係る内容が多岐にわたるため、新委員会においては緊急性の高い、「国際賞」の名称、博物館関係の賞、出版物関係の賞(地質図体系)の3点にしばって審議し、残りの問題は継続審議でその後に送りたい、と提案され、異議なく承認された。委員は次の通り(アルファベット順)。

秋葉文雄、府川宗雄、板谷徹丸、小出良幸、小川勇二郎、立石雅昭、渡部芳夫。

5. 地質学論集の刊行計画について

湯浅真人第二庶務委員長より下記の3件の刊行計画が提案され、今後の論集刊行に関する討論が活発に行われた上、それぞれの刊行計画が承認された。

新規刊行計画(1件)：

・小笠原憲四郎・近藤康生(編)：タフォノミーと堆積過程—化石層からの情報解読—規模：論文数15、執筆者19名、200p。印刷希望部数：600部 印刷見積価格：1,045,800円(消費税込み)(印刷単価1,750円)出版：本年12月下旬。

内容：日本地質学会福岡大会で日本古生物学会と共催で行われた本課題のシンポジウムの後援を基本として、執筆・編集したものである。

最終刊行計画(2件)：

・宮下純夫(編集委員長)・松岡篤・君波和雄・荒井章司(編)：オフィオライトと付加体形成テクトニクス。〔原表題：付加体形成における緑色岩の意義〕

・加々美寛雄(編集委員長)・藤林紀枝・志村俊昭・土谷信高・周藤賢治：本州弧下部地殻と酸性マグマの生成・活動システム討論は、財政面(販売計画を含む)と学問的な意義の面について行われた。主な意見は次の通り。

・質の向上のためには外部査読が必要である。

・刊行計画が出されたテーマと内容に関して十分な審議が必要である。

・関連して、重要性を評価する機構が必要である。

・企画段階で売れるものを考える必要がある。

・学問的に重要だが、本来売れない企画のものを出す手段として、ページチャージ制にしてはどうか。

・論文を書く著者が印刷費を少なくとも一部は負担すべきである。

・別刷り料金を値上げするべきである。

・バックナンバーの在庫一掃を考えるべきである。

・論集刊行を市場原理のみで考えることはよくない。

・売れるものという観点から、テーマごとに、印刷された論文のCollected Paperを出すことはどうか。

以上の討論を受けて、小泉格評議員会議長から、今後執行委員会において論集刊行に関する諸問題、方針を成文化して欲しい、との要請があった。

6. 会則・運営細則等の改正について

徳岡隆夫委員長から、まず、1998年度の組織運営検討委員会と会則細則等検討委員会を継承して1999年度の会則・運営細則等改正委員会が設置された経緯の説明に引き続き、次のような委員会構成で本年5月以降に検討を進めてきたことが述べられ、承認が求められた。委員長：徳岡隆夫、副委員長：天野一男、委員：足立勝治・加藤碩一・佐々木和彦・高橋正樹・徳橋秀一・新妻信明・府川宗雄・水野篤行(事務局)

次いで、下記の諸項目について委員会としての提案が行われ、それぞれ挙手による採決がなされた。

・院生の会長・副会長の被選挙権について

昨年度の最終提案(院生を正会員に含め、被選挙権を持たせるが会費については一般と区別する)があらためて提案された。討論の上、この提案が賛成過半数で承認された。討論のなかでは、院生割引には申請が必要である、等の意見が出された。

なお、これに関連して、学生については被選挙権は無しとして会則の変更を行うことになる。

・会長・副会長の役割について

昨年度の最終提案「評議員会の活動および討論に参加するが、議決には加わらない」をあらためて提案された。ただし、規則としての表現は、会則では簡潔な表現に止め活動の内容については細則等で規定するのがよいと述べられた。以上について、活動の内容について質疑があったほか、「会務

を統括する会長」の活動に制約を与えるのはおかしい、「学会を代表し、会務を統括する会長」に投票権がないのは不具合である、等の意見が出された。表決は、前段の「評議員会の活動および討論に参加する」と、後段「議決には加わらない」を分けて行われた。前者については賛成多数で承認され、後者については、まず修正提案された「議決に加わるものとする」について賛否が採られ、賛成少数で否決の後に原案「議決には加わらない」が賛成多数で承認された。

・新しい会則・細則案について

会則・運営細則等の改正にあたって、条文案については臨時評議員会議に諮ることとしているが、原則としては総会事項を会則、評議員会事項を細則として扱って改正を行う方針であるが、その方向でよいかどうか検討して欲しいと委員会から要望され、賛成多数でこの方向が承認された。

・秋の総会とそれに伴う役員選挙の次期の変更について

高校教員にとっては春に行うのがよいが、春・秋に行う場合のそれぞれについてメリット・デメリットを明らかにして会員に対する広報を行って欲しいとの要望があった。小泉評議員会議長から本格的にはこの問題については秋の臨時評議員会で討論して欲しいと述べられた。

・そのほか、評議員の地方枠の扱い、支部問題、総会議事に関連した会則の扱いについて問題点が整理・提示されたが、あらためて議論を継続しておこなっていくこととされた。

7. 臨時評議員会の開催について

足立勝治執行委員長より、本年秋の名古屋大会の前日(10月8日)に、会則・運営細則等の改正、各賞問題等の審議を主要議題として臨時評議員会を開催したいと提案され、異議なく了承された。

8. その他

・1999年度第3回定例評議員会の日時を次のように設定したいと提案され、異議なく了承された。

1999年12月18日(土)

2:30~18:00北とびあ901号室

・足立勝治執行委員長より、1998年度各賞問題検討委員会の嶋本利彦(前)委員長に対して執行委員会からニュース誌に報告用の原稿を依頼していたところ、嶋本(前)委員長より「日本地質学会国際賞の名称変更：経過と現状」(各賞検討委員会1998年度活動報告：その1)が届いて本評議員会に紹介されたことの報告があった。これに対して、その内容に不適当と思われる表現が含まれており、このまま掲載することには問題がある、との発言があった。

出版物在庫案内

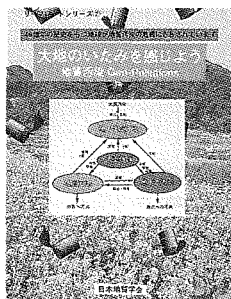
ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください。なお、2冊以上のお申込みにつきましては送料をお問合せください。現金書留または郵便振替 00140-8-28067

割引頒価：21号～39号 院生・学生4割引、それ以外の会員2割引、40号以降院生・学生のみ2割引

地質学論集

- 第21号 続・日本列島の基盤。加納 博ほか編, 331 pp., 1982年4月刊, 会員頒価2,400円, 千380円
- 第22号 琉球列島の地史。木崎甲子郎ほか編, 165 pp., 1983年4月刊, 会員頒価2,100円, 千310円
- 第26号 白亜系の国際対比—現状と問題。平野弘道編, 172 pp., 1985年3月刊, 会員頒価2,000円, 千310円
- 第30号 日本の第四紀層の層序区分とその国際対比。市原 実ほか編, 221 pp., 1988年4月刊, 会員頒価2,000円, 千340円
- 第31号 関東地方の基盤と変動。福田 理ほか編, 138 pp., 1988年6月刊, 会員頒価1,600円, 千310円
- 第33号 西南日本内帯高圧変成帯とテクトニクス。西村祐二郎ほか編, 357 pp., 1989年4月刊, 会員頒価3,000円, 千380円
- 第34号 堆積盆地と褶曲構造—形成機構とその実験的研究—。三梨 昂ほか編, 209 pp., 1990年3月刊, 会員頒価2,500円, 千340円
- 第37号 古日本海東縁の新第三系—層序・古地理・古環境。小林巖雄ほか編, 326 pp., 1992年3月刊, 会員頒価3,000円, 千340円
- 第38号 変動帯における砕屑岩類の組成と起源—日本列島を例として—。君波和雄ほか編, 401 pp., 1992年3月刊, 会員頒価3,500円, 千380円
- 第39号 統湖沼の成因と環境・地質。徳岡隆夫ほか編, 189 pp., 1993年3月刊, 会員頒価2,200円, 千310円
- 第40号 中央構造線のネオテクトニクス—その意義と問題点—。岡田篤正ほか編, 250 pp., 1992年12月刊, 会員頒価3,200円, 千340円
- 第41号 中部九州後期新生代の地溝。長谷義隆ほか編, 192 pp., 1993年6月刊, 会員頒価3,100円, 千310円
- 第42号 西南日本の地殻形成と改変。小松正幸ほか編, 357 pp., 1993年4月刊, 会員頒価3,100円, 千380円
- 第43号 浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学。村岡洋文ほか編, 177 pp., 1994年4月刊, 会員頒価2,000円, 千340円
- 第44号 島弧火山岩の時空変遷。周藤賢治ほか編, 335 pp., 1995年11月刊, 会員頒価2,800円, 千380円
- 第45号 シーケンス層序学—新しい地層観を目指して。斎藤文紀ほか編, 249 pp., 1995年8月刊, 会員頒価2,500円, 千340円
- 第46号 火山活動のモデル化。佐藤博明ほか編, 162 pp., 1996年9月刊, 会員頒価1,900円, 千310円
- 第47号 日高地殻—マントル系のマグマ活動。荒井章司ほか編, 323 pp., 1997年4月刊, 会員頒価3,000円, 千380円
- 第48号 Cretaceous Environmental Change in East and South Asia (IGCP 350) Contributions from Japan— 岡田博有ほか編, 188 pp., 1997年6月刊, 会員頒価2,100円, 千340円
- 第49号 21世紀を担う地質学。新妻信明ほか編, 232 pp., 1998年3月刊, 会員頒価2,500円, 千340円
- 第50号 構造地質 特別号—21世紀の構造地質学にむけて—。狩野謙一ほか編, 263 pp., 1998年7月刊, 会員頒価2,500円, 千380円
- 第51号 地震と地盤災害—1995年兵庫県南部地震の教訓—。岡田博有ほか編, 162 pp., 1998年3月刊, 会員頒価3,000円, 千340円
- 討論会講演要旨 (1979年4月刊, 東京四谷) 会員頒価700円, 千340円
- 第92年学術大会講演要旨 (1985年3月刊, 山口) 会員頒価3,200円, 千500円
- 第96年学術大会講演要旨 (1989年5月刊, 茨城) 会員頒価3,500円, 千500円
- 第101年総会・討論会講演要旨 (1994年3月刊, 東京) 会員頒価1,500円, 千400円
- 第103年学術大会講演要旨 (1996年4月刊, 仙台) 会員頒価3,500円, 千500円
- 日本の地質学100年 (100周年記念誌, 1993年3月刊) 頒価8,000円, 千600円
- 第104年総会講演要旨 (1997年4月刊, 東京) 会員頒価700円, 千300円
- 第105年学術大会講演要旨 (1998年9月刊, 松本) 会員頒価3,500円, 千500円

No. 39以前の論集：院生・学生は4割引、
正会員は2割引
No. 40以降の論集：院生・学生のみ2割引



☆リーフレットシリーズ第2作

『大地のいたみを感じよう—地質汚染 Geo-Pollutions』

1995年発行したシリーズ第1作「大地の動きを知ろう—地震・活断層・地震災害—」は、A2判裏表にカラー印刷というスタイルが、ハンディーで、さらにポスターにもなることで好評でした。第2作は環境地質研

究委員会編集の地質汚染のリーフレットで、前リーフレット同様、会員の方には一部無料配布いたしますので、以下の要領でお申し込み下さい。

配布方法：会員本人には一部無料配布。それ以上の部数をご希望の場合、および非会員の方には、一部300円とさせていただきます。

だきます。
申込み方法：学会事務局あて、必要部数を記入し、返信封筒（宛名を書き、郵送料分の切手貼付のこと）を入れてお申し込み下さい。なお、サイズが横15cm×縦21cm、重さが1部25gですので、一部郵送につきましては、以下のよう
・定形封筒の場合：90円切手貼付。ただし、二つ折にのせての郵送となります。
・定形外（15×21cm以上）封筒の場合：130円切手を貼付。一部以上の場合、部数×200円の代金と下記の郵送料を合わせて、切手でお送り下さい。（例、郵送料3部まで160円、8部まで270円、17部まで390円、20部まで580円）。20部以上の送付希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

マルト[®]の ラボ・ファクトリープラン 3点セット

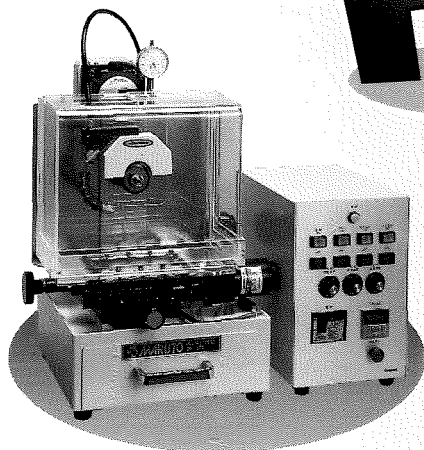
分析・検査用試料作製機器
〈切断・研削・研磨〉

な
り
小さな機械だが
役に立つ

小型 精密 操作簡単 低価格

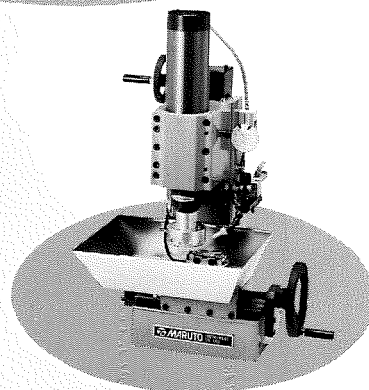
3機種揃えば、各種試料の精密加工が可能です。

(ガラス・水晶・シリコン・セラミックス
・錫物・金属材料などの加工)



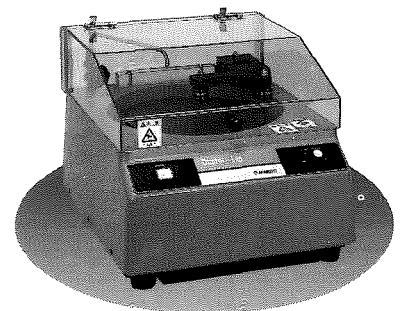
カッティング
連続・浅切込みができる
ステップカッター
〔MC-170〕

- 試料へのダメージが少ない
- 最小切込み量 10 μ m/pass
- 最大加工能力 H25 \times L40mm
- 設置面積 W550 \times L450mm
- 本体価格 178万円～



グライデング
立軸平面研削機
プレパラップ
〔MG-300〕

- 最小切込量は、0.01mm目盛
- 加工サイズは、MAX ϕ 50mm
- 任意研削面の逐次観察が可能
- 研削・研磨、同一治具使用により、研削・研磨工程は簡単で高精度
- 設置面積 W560 \times L380 \times H640mm
- 本体価格 98万円～



ポリッシング
精密鏡面研磨機
ドクターラップ
〔ML-180〕

- 組織検査用試料のラッピング・ポリッシング
- アクセサリ豊富
- 研磨試料サイズ ϕ 1 \sim ϕ 100mm
- 設置面積 W400 \times L400mm
- 本体価格 45万円～

☆貴重な試料を無駄なく手軽に加工したい、各種カタログあります。開放実験室でテスト加工が可能です。

材料を **切る**・**削る**・**磨く** そして **測る** 技術で奉仕する



本 社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島 1-1-10
☎東京 (03) 3251-0727 (代表) FAX: 東京 (03) 3251-2478
福岡連絡事務所 / 〒815-0033 福岡市南区大橋 1-21-5 岩田ビル
☎福岡 (092) 512-2755 FAX: 福岡 (092) 561-4288

E-mail: maruto@maruto.com <http://www.maruto.com>

**Reading the
isotopic clocks**

地質年代の測定

御社の調査・研究に必要とされる信頼できるデータおよび特別なお注文については、経験と実績の豊富なテレダイン ブラウン エンジニアリング社 環境サービス事業部へおまかせ下さい。

同社は、1955年に年代測定法を開発致しました。

そのパイオニア・スピリットは今もなお引き継がれております。

同社は、すべての主要なアイソトープ年代測定技術を世界の地質学団体へ提供している唯一の企業研究所です。

- K/Ar ● Rb/Sr ● U/Pb
- Pb/Pb ● ¹⁴C ● ²¹⁰Pb
- Tritium

テレダイン ジャパン 株式会社は、下記の業務と製品を取扱っています。

- アイソトープ年代測定と分析
- 地質・鉱山・考古学のための分析
- 地震計、微小地震計、浅井戸・深井戸地震計
- アナログ地震記録装置、デジタル地震記録装置
- 海底物理探査機器
(ハイドロストリーマ、アンプ、スパーカ)
- TLD、TLDリーダ、NaI(TL)
シンチレーション検出器

総代理店

 **テレダイン ジャパン 株式会社**

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-3-2(曙杉館8階)

TEL(03)3239-9080 FAX(03)3239-9021